（表紙）

三番箱　　伊進上

諸舊記文書　二

（中表紙）

「諸舊記文書」

256

於京都吉田殿江御断之條々

一薩州鹿児嶋氏瀬之祀場中ニ者、縦太守ニ而も他國へ出行之儀自往古神慮〔之〕（◎ナシ）戒也、如當分ニ而者江戸江参勤之儀も心任ニ不成候間、向後者雖為祀場中、他國之出行自由（◎ニ）成候様可申上事、

一同所諏方之祀場中ニ〔者〕（◎ナシ）喧嘩抔ニ（◎なとにて）而疵付候者（◎もの）左右方（◎共）ともにきよめいたし候、右之きよめの供物大分ニ〔而〕（◎ナシ）候間、可減少様可申定事、

一同所川内新田八幡祀場當分ハ七里方之由候、殊川向隈之城（◎方）江も祀場懸儀如何、向後ハ水引・中郷・高城三ケ所ニ可申定事、（◎付）并右之祀場中きよめの供物も可減少、且又致搦者ニもきよめ懸儀仕候（◎置）〔もの〕（◎ナシ）差合ニ成〔候〕（◎ナシ）間可申分事、

一隅州正八幡近邊之川田畠之（◎損）検地ニ成所（◎在）有之候得共、従上代八幡之御内證ニ不合候とて、土手・水よけのやう（◎様）なる儀（成）不仕候事、

一川内之川筋築ニ而魚取〔候〕（◎ナシ）事、水神のとかめのよし（◎由）候而、築せきたるハ（◎事）無之候、右御断之事、

一屋鋪（◎敷）中ニ荒神之木とて森（◎在）有之候而、屋敷之害ニ成所有之候、ケ様之神木伐候御許も御座候哉之事、

一國中ニ川ニ井杭不打由所之者申傳、井手〔を〕（◎ナシ）せき候儀

不成候、并春初田畠不致鍬初在所有之候付、耕作仕付時分延引候、可申分事、
右條之旨、可然可申調者也、
承應四年正月廿三日　　鎌田源左衛門（政有）
町田勘ケ由（解）（久則）
新納右衛門（久詮）
嶋津圖書（久通）

（本文書ハ「旧記雑録追録一」五三六号文書ト同一文書ナルベシ）

257
就御國元社法之儀、御使札并ケ条之趣承届、則委細別紙を以書附令進入候様子之段、宇宿若狭ニ申含候、其通ニ可被仰付候、随而従大隅守殿（光久）為御祝儀琉球布三十疋并燒酎二壺・なし物壱器被送下候、毎度御懇意之段不浅忝存候、此等之趣宜頼存候、尚期後音之時候、恐惶謹言、
（承応四年カ）三月六日　　吉田刑部少輔兼起
嶋津圖書（久通）殿
新納右衛門（久詮）殿

町田勘解由（久則）殿
鎌田源左衛門（政有）殿
貴報

258
一薩州鹿児嶋氏瀬之祭（正當）當正二月廿八日（十）也、則自朔日於祀場中ハ、縦雖太守他國出行自往古依社例神慮之制戒之由、此段者則前後齋之間、氏子中随神事（仁）ニハ禁足之法例也、於余仁者其例稀也、向後雖祀場中於　公道者、江戸参勤（覲）不可有其憚、是則君臣礼儀之法也、夫神者不享非礼云不違礼儀則可有寛宥免許乎、
一同國諏方之祭、正當七月廿八日也、則自六月朔日於祀場中、不通（慮）之外致喧嘩者双方共（ナシ）致清浄（儀）、古来之制法之由、此段者則有罪咎者以贖物贖其罪事、自神代之遺法也、尤随其身分際、以代官神職誦祓、致清浄潔齋亘、神國之風儀也、
一同國新田八幡宮之祀場七里方之由也、川向限之城も於為氏子者祀場懸儀尤也、非氏子者可無其法、水引・中郷・高城三ケ所、可有祀場懸儀（於）、此贖物清浄（氏子）之儀式者（者）

右可為同事、且又於致搦者武門之職法也、不獲止而用之、神道ハ以清浄為元、以正直為専、偏不廢社例則以代官神職、可有清浄亙也、

一隅州正八幡宮近邊之川雖(◎有)田畠之(◎損)検地成所、自上古依不慥、八幡宮之御内證土手水除之様成儀不仕事、是可為一社之法例哉、凡塞水道放土手畔事(◎者)悪神之所行也、八幡宮ハ(◎廣)大慈悲之太御神也、則詫(託)宣曰、自人之國我國、自他之人我人云々、田畠成就五穀能成、國家豊饒者八幡宮之御内證感應之儀也、於致土手水除豈在(巣脱カ)乎、雖然依為社例啓白申奉者也、

一川内之川筋築にて魚取事、水神之崇(巣カ)有と申傳儀尤有之事也、此段者水神敷地何町四方と被相定(◎在)、其外者以寛有之儀取之可然也、為其奉納鎮札幣帛、毎年一度祭之并啓白申奉也、

一屋鋪(◎敷)中ニ荒神木と云森伐其木事、古来崇(巣カ)在と申儀尤也、此儀處々(◎所)(◎ニ)繁多也、人屋之妨ニ罷成、堪忍難成木者雖伐之、荒神之(◎ヲ)別処ニ安鎮而其替ニ栽木、毎月一度令祭之、納幣帛啓白申奉可然也、

一國中ニ川に井杭打事忌之儀、社頭近邊者可有左様哉、又春初不致鍬初事無取見、川堰井手者▽◎田畠之△成就、春耕初者民之家業也、向後擇吉日致春耕(◎初)事、諸神豈其崇(巣カ)在之乎、

右断之趣如件、

承應四年二月吉曜日

神道管領長上卜部朝臣兼起

（本文書ハ「旧記雑録追録一」五五三号文書ト同一文書ナルベシ）

259

一雖未申通候一書令啓上候、然者御國諏方之神主宇宿若狭守神道執心ニ付、去年より當地ニ罷在候、則比志嶋監物殿より御状到来故、神道秘法数ケ条其外社法共申聞候、尚期後音之節候、恐々謹言、

吉田刑部少輔兼里

（承応四年）三月十一日

島津圖書頭(久通)殿

川上因幡(久國)守殿

本郷佐渡(北郷久加)守殿　人々御中

260
一金銀幣壱本　但箱入　安養院格護
銘云
奉寄進諏方上大明神金銀幣白(帛)壱本、祈禱當病平愈之者
也、
寛永十四年丁丑三月吉日　中納言家久

261
一銀小幣弐本
銘云
奉寄進両諏方大明神御寶前、
于時寛文四年甲辰五月吉日　嶋津又五郎(久竹)藤原朝臣久
胤敬白

262
一棟札略
奉造立諏方両大明神拜殿一宇、意趣者
太守家久公御壽筭長　御願成就也、
當座主權大僧都頼真
慶長十五年庚戌七月吉日
當奉行　比志嶋紀伊守國貞
樺山權左衛門尉久高
島津圖書入道紹益忠長
物奉行　三原諸右衛門尉
鎌田宗右衛門尉
大工　美代主殿佐清次
鍛冶　染川彦兵衛尉安中
作事代官　右松安右衛門尉
同筆者　橋口彦兵衛尉
脇大工　青木杢兵衛尉實宣

263
一并神主左三尺七寸入五尺五寸小板葺
棟札略
右同家久公御造営也、
元和三年丁丑(ママ)霜月大吉日　大願主敬白
當奉行　伊勢兵部少輔　比志嶋紀伊守

三原諸右衞門尉　町田圖書頭
造営奉行　有川助兵衞
當座主　盛有法印

264

棟札略

一奉修補諏方参籠所
寛文第十年庚戌七月朔日　安養院現住法印盛長
御物奉行　嶋津帯刀久元
御使　高崎宗右衞門　検者　松元慶右衞門
新納縫殿介

265

一諏方社因　光久公之厳命再復意趣、
寛文第十庚戌歳七月朔日
當山現住第二十五世遷宮導師傳燈大阿闍梨法印盛長
欽修焉、
御物奉行　嶋津帯刀久元
寺社奉行　嶋津出雲守久胤

御使　高崎宗右衞門　検者　松元慶右衞門
新納縫殿介　大工　萩原二右衞門

266

新納市正殿訴状（嶋津備前忠清家被召立度由）寫并調書留写

266の1

口上覚

一私曽祖父嶋津備前名跡茂無御座、就夫者　光久公御母（島津忠清女）堂家中絶ニ候間、此節名跡相續之儀、以御見合被　仰付被下度奉存候、此儀老親同名達心（久辰）在命之中念望至極ニ候、本家之對先祖孝養ニも候之故、偏奉願候事、
一當家直子無之、嶋津下野（久元）猶子ニ被　仰付連續仕候、此代より當分之地頭職与申候者、私家ニ被仰付置、尤下野御奉公仕候、雖然下野本家嫡子（忠倍）早世ニ付立帰候跡ニ、備前子近江（忠影）猶子ニ罷成候、且亦　慶安様御事者　國分様江被召出候而、　家久公御簾中ニ被為成、　御當家御繁栄之基ニ成候儀御存之前ニ候、依之私子共之内相續仕候儀不相應ニ被　思召候ハヽ、乍慮外備前血筋之

御一門中以御見合被　仰付被下度奉存候事、

一備前兄(忠長)者　関白秀吉公背　命、御改易被　仰付候、弟備前を初存知不申者茂一往者他國江御預之様ニ罷成候得共、於　御當家者御幸ニ茂罷成候欤、　慶安様御出生之儀ニ候、備前如本　御家ニ被召寄、高千斛之所務被下置、一世者相過候由申傳候得共、直子男女共ニ相續可仕様無之、多年無跡ニ及候儀私共心底無念之至、被遊御憐察被下度候、備前并近江死去之涯茂両度共ニ中納言様被遊　御光儀、難有　御意御座候段、立野姥(忠清妻永俊尼)私祖母承知仕候、喜入摂津守差引有之候由茂祖母申聞候、達心事者胎内ニ罷在極月晦日父ニ離、翌年正月廿日致出生、則より　中納言様江　御目見仕、家督被仰付、幼少之間　寛陽院(光久)様御側江被召仕、今以冥加之次第奉存候事、

一右之通兄ニ相替備前事者、奉對　公方様・御當家様一朝一夕之間茂不忠之訳無御座、御母堂之由緒茂御座候處断絶仕候儀、近代二男之儀者不及申、直子茂祖父以来漸當家連續仕、幸私世忰兄弟成人仕候付而者、此時節申上候儀名聞ヶ間敷様ニ候得共、私子共ニ是非ニ相續奉願儀ニ而無之候、薩州家之所領ハ　公義江被　召上、以後ニ御拜領候、加之無跡之故(ユエ)什物令紛失、漸大師之佳作不動・古作之愛岩(宕)・觀音、此三躰今以私所へ安置仕候、右躰譲物外ニ無之候處、血筋与ハ乍申、跡目御一門中江与奉願候儀、無謂様ニ候得共、薩州家者不肖ニ無之、又者輕家ニ而茂　御母堂家被遊御取立候其例御座候、乍此上左様ニ難被　仰付候ハヽ、當家ハ嫡子助四郎(久邦)江家督被　仰付、高屋鋪什物家財一圓相渡申度候、私事者本家ニ立帰、當分之二男孫四郎(久基)を本家之子孫ニ仕可申候、小高ニ候得者助四郎より孫四郎江分知罷成間敷候、其上當家之所領ニ付而茂曽以助成難叶ニ候間、名跡續候迄ニ纔之御扶助被下置候様ニ往ゝハ奉願候外無御座候事、

一私事結構ニ被召仕候砌、右之願時節見合候様ニ茂御座候得共、祖父近江以来私御役前ニ茂此儀者可申上所存ニ候處無跡ニ候之故、他之人を指跡目之願者遠慮ニ候、又御由緒之筋目ニ候處、無故者を相續為仕候儀非本懐

候、然處二男迄茂成人仕候ニ付、御一門中より御相續無之候ハヽ、私親子之間立帰申筋ニ此節老親江茂相談仕候、少茂於本家分限之願無御座候、何共　御見合次第ニ奉存候事、

右之趣成合候様ニ被仰上被下度存候、以上、

（元禄十四年）巳十一月廿八日　新納市正（久珍）

266の2

口上

西監物入道圓應事者　光久公御母堂之父方枝葉ニ候得共、其由緒を以　御當家江被　召出、難有仕合ニ奉存候、枝葉さへも右之通候得者、為　御母堂之備前家筋者御取立被下候様ニ奉願候旨ニ御座候、乍然此訳申上候様ニ者難仕候、各御存之儀候間、御内意ニて御取成頼入候、以上、

（元禄十四年）十一月廿八日　新納市正（久珍）

猿渡喜右衛門（信安）殿

村田平右衛門（経寧）殿

266の3

御内意之覚

一嶋津備前事者　龍伯様御姫御平様之腹ニ而、兄とハ別腹ニ候由申傳候儀ニ御座候、御改易之年間と御平様御出生之年間ニ而相違之様ニ茂承及候、

一備前事、高千石之物成被下置候訳御座候、地方を以可被下置由被　仰渡候得共、取納方茂六ヶ敷有之、第一慶安様ハ差上申、近江事ハ新納家相續仕候故、當時地方附屬可仕嗣子無之由申上候ニ付、物成ニ而者被下候旨祖父共又ハ譜代之家来慥申傳候、

右両條者、御出合之節宜御取成頼入候、以上、

（元禄十四年）十一月廿八日　新納市正（久珍）

村田平右衛門殿

猿渡喜右衛門殿

266の4

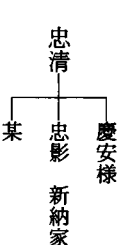
嶋津備前殿後嗣被　仰付被下度旨、新納市正殿より願被為申出候付調之覚

一嶋津備前守忠清与申候者、島津薩摩守義虎之三男ニ而御座候、舎兄又太郎忠辰、　関白秀吉公之命を被背候

ニ付、文禄二年忠辰御改易候、其節忠清并舎弟弥市郎忠富・小七郎忠辰(豊)三人小西摂津守行長江御預ニ而一旦肥後江居住候、慶長五年行長於関ヶ原敗走之後行長被誅、此時御當地江帰住ニて候、肥後江居住之中ニても候哉、皆吉休右衛門与申人之娘を被為娶、女子一人男子壱人出生ニて候、女子ハ則　寛陽院様御母堂　慶安様ニて御座候、　慶安様之御懐後ニ妙春与申候而只今之伊集院十右衛門殿之屋敷ニ住宅候付、立野之祖母様と申習(ナラン)シ候由、

一備前殿男子者　慶安様之御舎弟ニ而御座候、新納家十二代之家督近江守久元ハ嶋津圖書頭忠長之次男ニ而養子被仰付候處、兄島津河内守忠倍早世候故、新納家を辞退候而本家ニ立帰、嶋津下野与被改候、久元之跡を備前殿息男被為相續、新納近江守忠影与申、十三代之家督ニて候、依之備前殿後嗣者断絶之様ニ罷成候、然共血筋者忠影息男新納達心(久辰)老、左候而市正殿与新納家江相續ニ而御座候、

一薩州家之儀者、又太郎忠辰迄ニ而断絶ニ被仰付候、備前殿儀者、忠辰違命之儀ニ与同茂無之、母堂茂相替候、備前殿ハ　龍伯公之御娘御平様之御腹ニ出生ニ而御直孫、殊ニ　寛陽院様御母堂之御親父ニ而候得者御外祖父ニ而候、然者必後嗣者御立可被成ニ而御座候、御立被成候ハヽ、備前殿兄三郎次郎忠隣金吾歳久之後嗣ニ被為成候間、忠清事義虎之乍三男二男ニ被為成候、然者薩州家之二男家ニ立申筈ニ而候、系圖之系り様ハ元祖用久より代ゝ義虎与系り、忠清之兄弟不残次第之通ニ系り候而、



此節後嗣被召立訳を某之傳ニ書記申筈ニ而御座候、忠清舎弟越前守忠栄と申候之家、嶋津弥市郎ニ而御座候、是者母堂御平様之高を直ニ忠栄江被為給、家相立申候、其訳を傳ニ相記、やはり生所之座より系圖ハ系り出御座候、備前殿一流茂此同格、右之通ニ系り申筈ニ而御座候、

一備前殿江高千石之物成被下置候儀、御記録所江者相知不申候、

一御平様者天文廿年八月廿日之御誕生、又太郎忠辰者天文廿二年之誕生ニ而、文禄二年八月廿七日四拾一歳ニ而於朝鮮國死去ニ而御座候、御平様御歳二ツニ被為成候時出生之筈ニ而御座候へ者、御平之御腹ニ而無之段分明ニ御座候、以上、

右者御先代嶋津備前忠清家筋、新納市正殿より被為願候趣ニ付調被仰付、其節差上候調書之留、且又市正殿より之覚書写等書写差上申候、以上、

御記録所

丑
十月二日

覚

一御家御代々被成来候御元服之次第、於　将軍家御元服之次第与ハ為相替儀候、若従　公儀御尋之趣茂有之候ハ、、御返答之被成様茂可有之儀候間、委曲相糺可申出旨被仰付、左ニ申上候、

一御元祖忠久公御事、右大将頼朝卿之長庶子ニ而、元暦二年御年七、依頼朝卿之命鎌倉鶴岡若宮之宝前ニ而御元服、畠山庄司次郎重忠加冠被相勤、忠久与御名乗被成候、其時被任左兵衛少尉、鳩作之御寶刀御賜被成候、

一二代忠時公より十代立久公迄書留無之、御元服之次第、御年生之儀相知不申候、

一十一代忠昌公、文明六年御年拾二御元服、

一十二代忠治公、文亀三年御歳十五御元服、

右御両代御年生之儀者相知申候得共、委細之儀者相知不申候、

一十三代忠隆公・十四代勝久公御両代御元服之儀相知不申候、

一十五代貴久公、大永六年御歳十三御元服ニ而御座候得共、委細之次第者相知不申候、

一十六代義久公御歳十四、十七代義弘公御年拾二、天文十五年御元服、義久公御くしをハ本田紀伊(董親)結申候、北郷讃岐(忠相)御くしをはやし候、あて物は双六盤ニ而はやし

候、御刀ハ御屋形様より被出候刀ニ而はやし候、次ニ北郷讃岐より参候御衣裳、讃岐二男北郷左馬(忠孝)持候而参候を伊集院治部請取申候、御三献之宮仕は當奉行本田下野同弥六同弾正同宗左衞門此人数ニ而候、又御名を は又三郎様与日新様より御附御申候、御祝物讃岐より は土持摂津介同名之者此両人ニ而渡申候、御屋形様より ハ三原遠江同次郎左衞門請取申候、御名祝として従日新様又三郎様江御参らせ候御太刀は、加世田被召落候時　日新様御帯添、敵御打御嘉例よしと候而、新納伊勢持候而参候を御両殿御前にて川上上野受取候而上申候、又同日義弘公も御元服ニ而、御くしをハ御屋形様御はやし候、御くしをハ伊集院治部結申候、御祝物御太刀一腰・金覆輪御鎧甲・御弓・征矢・鞍置御馬一疋・引添一疋・鳥目五百疋、御返礼ニハ御太刀一腰・金覆輪御鎧甲・弓・征矢・鞍置馬一疋・引添一疋・鳥目五百疋北郷讃岐江被遣之与旧記ニ相見得申候、

一久保公御年十三、家久公御年十、天正十三年御元服、御両人様共太守義久公御加冠、久保公御理髪ハ島津中(家)務(久)太輔、家久公御理髪ハ町田出羽(久倍)被相勤、久保公御進上式之御引物、御酌之時刀御進上、太守様より御腰物御賜候、家久公よりハ御鎧甲御進上、御腰物御賜ニ而候、其外酒肴等之御進物為有之由候得共、委く相知不申候、

一光久公御年九、綱久公御年十一、綱貴公御年九、吉貴公御年九、継豊公御年九被遊御元服候、御規式之次第者御元服之記録ニ委相知申候、

右之通、御代々様御元服被遊候節、御實名御附被成候、御元祖忠久公ハ畠山重忠加冠ニ而忠之一字被差上候、忠時公より家久公迄ハ御家之字を御取被成御實名御附被成候、御加冠之御方より御一字被進候儀ハ無之候、光久公御元服之節より継豊公御元服迄ハ御理髪之人より實名之一字を差上、御實名ニ御附被成候、理髪之人より一字差上候儀何様之訳ニ而御座候哉、其道理相聞得不申候、右付而者段々御意之趣承知仕、御尤至極奉存候、何れ之筋にも御賢慮次第奉存候、

一右御元服之節、天井折いつ比より被用来候儀相知不申

候、古き御家之御事ニ御座候得者、御嘉例を以被用来候半与相考申候、尤被用来候由緒ハ相知不申候得共、是又御家御旧式と相見得申候、

右之通ニ御座候得共、御元祖忠久公於鶴岡御幼少ニ而御元服被成候由緒を以御家之御旧式与被相定、御代〻様御中剃刀被遊候節を御元服与御唱為被成与相見得申候、御作法之次第、古来之儀者相知不申、至比日候而者伊勢流与相見得申候、義久公・義弘公御元服之御作法与當時之御作法とハ右之通相替申たる儀ニ御座候得共、忠久公御幼少ニ而御元服被成、御代〻様御幼少ニ而御元服被成儀ニ御座候へ者、将軍家之御元服とハ其訳相替申候、しかれ共御家御元服之儀者、古来以来之御旧式と相見得申候、御規式之次第ニ付而者、右段〻之儀を以可被遊儀と乍憚奉存候、以上、

月　日　　御記録奉行

う共、存知分書付進候得と去〻(『先』)年鹿児嶋ニ而承候しかとも斟酌申候キ、又於當所蒙仰事及五六度之間(『にて候』)、さのミ背御意候もいかゝと存候而(『間』)、若輩(『童カ』)之比承て候し程さたかならす候得共、存之(『知』)分令申候、抑當家之御先祖忠久と申は右大将頼朝の御子三男にて御渡候、御母は但後(『丹』)御局、ひきの藤四郎義數(『か』)か姉『にて御渡候』、御くハひにんの時、頼朝の御臺二位殿と申ハ法條四郎義時(『北条四郎時政か』)かあねの二位殿御(『娘』)はからひに謀叛をもくハたて、天下を押取て何事も二位殿の思召まゝにて候処、(ママ)但後の御局の御腹御(『ニ』)子有へき之由其聞得あり、然間殊外(『ニよって』)之御そねミニて、彼女房海に沈むるへき之由頻被仰(『に』)候(『ける』)之間、日向國へ流し申されへきにて鎌倉を御立候時、頼朝(『出させ給ひけるに若』)より男子ならハ何所(『にてあらハ道より』)よりも御左右申へしと『頼朝』被仰下ける(『に』)間、摂津住吉にて御腹(『氣』)けつかせ給間、御宿をかり候得共、住吉の習にて不浄の人は(『を』)久『敷』忌所にて

『間更に宿をかさす候程に』
候程に、御宿をかし申さす候、　折節大雨にて候ける
『平き』　『石候ニ』
ニ、道の邊ニひらく大なる石の候けるに御輿をかきす
『候ニ男子』
へ候得ハ、やかて御産候、若君にて御渡候之間、鎌倉
へ飛脚をたて此由『を』申、其後住吉の神主『此由』承
『あけ候て申入候』　『に』　『宮
及て御所を構入申候、御産之間大雨にて候けるに、ミ
ウ』　『ハミ
やうふ殿其あたりに副申てゐて候ける間、當家に野干
やうふ殿』
殿と『大』雨を吉事にせられ候由承候、彼石を御産之
『られ候』
石と名付て此邊より登候、御年来ノ人〻拜し申候ける
『老者共』　『ハ』　『間』
とおとなしき者共被申候し、然ニ男子之由頼朝『被』
『候』
聞召て摂津國よりめしかへされ候て、八文字民部太夫
惟宗廣言あつかり申て養育申候間但後ノ御局を給られ
『同丹』　『ハ』
候而さいあひ候、忠季と申は民部太夫か子にて候、忠
『妻愛』
久一腹ノ御兄弟ニ而御渡候、随而初は惟宗氏、承久三
『入候』
年ニ改姓ありて号『御入候、随而初ハ惟宗氏を』藤原、民部太夫ハ日向國司にて候
『下』　『も上』
ける間嶋津ニ居住候」比木ノ判官・民部太夫も承久兵
『に』
乱の謀叛ノ人数にてうせ候ぬ、其子孫土佐ノはたの庄
『ハ』　(らカ)
ニひき・なかむら・さかは・ひとをかとて今もあひ残
候、又『坂』東國ノ結城殿も頼朝の御子にて候得共、
女房たち腹にて候間、是も意趣同前、今者藤原にて
『今ノ』
候、忠季と申者はわかさのミかた殿にて候、忠季『ノ』
『ニ』　『候』
子は忠經と申、承久之比天下以の外ノ物いひにて候
『間』
間、京都ノ御用心の為武藝ノ達者を関東より撰出して
『す』　『す』
三人めされ候随一に忠經のほられ候、父忠季は関東方
にて宇治河を渡候に討死候、「子忠經は京方にて宇治
ノ手にて討死」其時忠季は青黒馬に乗、からんの直垂
『に』　『ニける間』　『に』　『と』
桜華をぬい物にしてきて候之間、當家もいましめくれ
『子息忠經は京方
候と申候へは、是は他家之事にて候欤、「みかた殿と
にて、宇治川にて討死せられ候』
申ハいまた惟宗にて候、其故は民部太夫子孫にて候間
理候欤、忠久ノ御為には廣言は養父にて御渡候之間、
別各之儀にて候、雖然昔より名字をつゐて嶋津殿と申

候時は、三かた殿様には同姓よりもむつましき御事にて候や、是は當家之秘事にて候、無益事にて候得共、御存知ならてハ事候間令申候」忠久御為ニハ御孫『之孫ニ』、忠義ノ御為には御子七男久時と申ハあそ谷殿ノ先祖、薩摩國の守護代にて在國候ける時、あまり雅意『ニ』にまかせ『て』國ノ人に御あたり候ける間、市来政家『ノ』と申人被申けるは、あまりおんこくノ仁『恩顧』のやうに被思召候、島津『方』殿も我〻か家『等先祖』より御出にて惟宗にて御渡『入』候物をと被申ける間『程に』、久時の方よりは同惟宗姓なから各別『下上』之由被仰『候』ける程『間』に、両方よりの系圖を奉行所へ被出候、大隅守修理亮久時『の』の方よりハ、元祖蘇我大臣『より』以来民部太夫廣言、忠久と御出候『出され候、市来の』、政家の方より『ハ』、宗大納言より以来忠康、忠久と被出て候、為後日我〻か方『等』にも書付置て候、執印方にも少もたかハす書付置『れて候を見申て候』候、先年京都にのぼりて候時、三かた殿様を申候ては『之』『尋て候へ者』『未』惟宗『氏』にて候由被仰候間、系圖を所望申してうつして候、久時奉行所『ノ』被出候『へ』『御系圖ニ』にかはらす、[信濃ノなかぬま殿様を尋申て候へハ、頼朝ノ子孫にて候間、源氏にて候へと上意に候とて近年より源氏にて候由被申て候」久時謀叛ヲおこし薩摩國を押領候『仕候て』之間、久經御下候而國を取返され候『て候』てより、御一家には守護代を持せ『申』へからさる由置文ヲかれ候由承候、『又しなのゝ島津殿ハ近来源氏にて御入候』一秀平か子西城戸太郎追罰之時、畠山重忠大将として奥州へさしむけられ『候』ける時、重忠被申候けるは、昔貞任・宗任『追』追罰之時は源平両家ノ大将にて候、重忠か先祖者『義家の御供仕候、何れも同白幡にて候間、我等か先祖か』黒皮を一文一たけに切て幡ニ付て候ける之由承候、先例をおはれ候へてや候らんと被申ける程ニ、忠久十三歳之御時『にて』、越前國を御給にて奥ノ大将に御向候、重忠取むこに取申『て』され候て余之賞翫ニ大勢打こミにて候へハ『間』、自然忠久ノ御手ノ人〻致無礼『候ハん事』事も有へく

憚入候と被申ける間、直垂のミぬひヲとかせ、ゑほし
ノミぎふさなと被定ける由老者共申され候し、『右』『朱書』『〇』
か様之事共書付進上申候も憚不少候へとも、重々得御
意候間、後難を不顧、心底を不残申入候、玄久・久哲
之御時まてハ、御陳之時夜々に在京候ひし人々をめし
あつめ京都之様共物語をさせられ候し、今は思ひ々の
儀共承候程に、ヶ様に申入候も斟酌至極候、

一氏久・伊久ノ御時まて久在京候し老名共常召あつめ候
て、京都ノたゝすまひ、當家之様共御尋候しに、あり
のまゝに思々に被申候間、其比ハかやうの事存知之方
も多候し、今は見申人々ノ御中には御座なく候処、御
まきれの内に思召より候て御尋候間、有かたく存候而
心底を残さす申入候、文注書殿と申奉行ハ日本之諸大
名諸侍ノ家々のやうヲ書付被置候間、我家をさのミう
へ高く申なし候へハとて、人皆存知の事にて候、又我
家を知すしてかろ〳〵敷申成候ハんする事も口惜子細
にて候、京都にて大名と座敷論も候、又公方にてノ御
座敷定まりて候様も今は御内ノ人も知れしと覚候」『△』一

御一家之人々ノ遠近高低むかしより被召遣候様申候へ
と承候、『是又殊更』『へ共』雖斟酌候、上意もたしかたく候之間申入候、
『乍去』元久常に御物語候し、『毎々』御一家之事ハ『中御』親子兄弟よ
り相副候し間、いつれ高下有へからす候、就中和泉『二』
殿・佐多殿『一』・新納殿『三』・樺山殿『四』・北郷殿『五』『此面々の』御事
ハ御教書を『帯』對せられ候之間、果報により國をもたれぬ
にてこそ候へ、我『等』々に不可有高下候、心得候へと玄久
常ニ被仰含候し間『常ニ』御物語候し、かやうの儀ヲも
て御了簡可有之哉、

一『随而』愚僧出家之事者、先かやうの子細を申たて候『儀により候』
ハんために是とりゑとして遁世仕候、其故は牛屎花北
の合戦に御『打』勝候て大隅『へ』に御帰候時、正八幡御前
にて御内『ノ』老名を御定候時『て』、一味同心にして心底を不残
意見を申候へと『て』人衆被定候而神祭『さい』『に』をもて連判『正八幡
の御前にて』『を
さ』せられ候しに、我『年廿一にて候し間』[等いまた若輩に候しか共上意

にて候間〕老名一分にまいり候て判を仕候、本田・伊地知・阿多・平田・肥後・石井・某七人にて候、最初日の下にハ本田を御書候而、末ニハ某を被書『て』候『間』、其まゝ判を仕候、其後御前に被召候て何事も皆らうてほつてを常翫する事にて候間、まへには本田か名字を書せ、おくには某『か名』をかゝせて候『と仰られ候』、古より両人の事ハか様ニ被召遣て候、縦武田・小笠原か御内にまいりて候共、両人の上をさせましくこと由御懇ニ御物語候し候由被仰候、三寶諸天『八幡大神』も御照覧候へ、廣言を不申候、〔是も御内者召遣候やう御尋候程に〕有のまゝに申入候、憚入候、然にいまた意見をも不申、事をはからふ事ハ候はね共、随分の儀を嗜候時分久豊六ケ國に御のほり候、老名一分にて御供仕候、仍大儀之御使度〻仕候て、公方よりハ〔不被仰付候しかとも理運至極ニ候間〕日向之守護領本息之事、當座にて沙汰しかなへて〔知行候し、如此〕しんそなく事をたしなミ候し處、御供申候而罷下候時分、『日向より』伊東方被参候時、元久ハ殊外はなはたしき御事にて御座候間、はかたよりくたり『て』候面〻を何も御つかひ候ハ『ん』すると仰候而、佐多弥三郎殿・樺山六郎殿初こん三こんの御酌、某二こんをつとめ申候へ『と』今より定置候、〔いつれも如此なるへしとまて御意候し程に〕若輩なから『老名一分之事を承候間、我なから』事をたしなミ候間御返事に申候様は畏入申候時ハ不知物ニ罷成候『すると存候間御返事申候様ハかやうに』其謂は佐多殿・樺山殿『様之』御事ハ國を無御持にてこそ候へ、御身に高下有間敷之由常ニ上意候『しを承候』、其上『此』両人ハ元久之御養子にて御渡候、然者頼申上様の御子にて御座候、御内者之分として御あひ手にまいり候ハする事憚入候、『思召寄候而』上意『之通』は畏入『て』候得共、我等かヶ様に申候ハてハ誰〻も思ひよらしと存候、

御一家は御一家と召仕候かハれ御内者御内者とめしつ
召仕、御一家は御一家とあひて召仕『このことく』
かハれ候へかと申候へハ、其分にて候者召つかはれま
しくと而『此後はつかひ申』
しき由承候間、御はなにて候と存候て二三日出仕不申『一両日』
候し処ニ、『聽而』以御使つかれましきよし申候間、
つかふましきよしをこそ被仰て候へ、出仕不申候事不『候て由』『ハ』
心得候、とく『く』参候へと承候し間、聽而参候而『被召候間』
二三日して遁世仕候、［其時は誰々にも此意趣不申候『是ハ上意もさして可恨申事なく候、只』
而罷出候し程に、無御存知御方は結句御役を嫌申て候幼少より遁世の望候而、仏神にも祈精申候間、次かなと存候而待居
候時分にて、是ハ公方へハ御恨も有ましき事にて候と、ハ存候ハね共、
と被仰方有へく候之間、自然人の引かけにもや成候ハ
思か立たる望にて候程に遁世仕候、其時ハ是程こまかに不申候間、
すらんと存候而次令申候］
無御存知方ハ結句役を嫌申て候なと後々のひつかけにも成候ハんす
一當御代之初尊氏将軍之御時、天龍寺供養時一番随兵は
ると存候て、さしたる事にてハなく候へ共、残々申入候、又は御内
吉良殿『にて御渡候』、御合手ハかう武蔵守執『越後殿にて』『事』士師直と
之人々御一家中之事も委キ人と承候程にケ様の儀をもて聞召分られ
して勢もいかめしく肩をならふる人もなく候しか共、
れへく候哉』
きら殿御嫌候間、御所よりしていかに人を撰『進し』
『に』『成』『只』
候共御合手は有間敷候間、多々師直を御供に被召具候

へと御『書』意候ける間、無子細領掌候『けるニ』、随兵左右『ハ』
に對し候へ共、『是は』師直は一段はかりさかりて打て候ける『者』
より承候、又近比北山の義満御所の御時、相國寺供養
『之時恒例にて候とて』
に吉良殿・『かうとさ殿』御相手にかうとさ守殿せられ
『けるに』『又』『程に』『時御』
候を、きら殿御嫌候間、従御所天龍寺供養の相手にて
『候』『て』『御』
御渡し物をと被仰間、『きら殿より』尊氏の御書を被出候
『ケ様』『よりてこそ』『被』『て』『へ』『ける』
而如此之儀にて候し間、召具して候しと被仰候之間、
『よし』
又如本御供に被召具候へと御書を御遣候けると承候、
吉良殿御事にて候へハとて平家之時代、先代『之』世『中々』
『ん』『さのミ』『有ましく候』
にて候ハする時は是程『及ハ』不可有賞翫候得共、當
『御事て候之際』
御代ノ一家にて御渡候程に大名も憚、近習も恐をなし
『て』
［申候、今も日本國に平家の末孫多候へ共、さのミ不
用候］、我『等か主と』頼申て候人の御一家中をなひか
『申なし候ハんハ私ノ』『散々の式に成行候し程に、か様』
しろに存候ハんニハ我家も［いかゝと存候、是程細々

に存候而申て候し、是は次事ニ而候』
申候事ハ諸人あやまりてや心得候ハすらんと存候而為
後日申入候、今遁世の事ハ」『只』幼少之時より望『たに』
て仏神にも祈申候、其子孫にて候けるや、殊更其時分
ハ上意も御懇に候しに不圖思立候、更に恨申節もなく
候」、只時節到来にてこそ候へ、「其時分ハケ様の事を
内の人々のたゝすまひ申候へと承候間、凡の御方ハ別段に可有御心
不申候而罷出候間、若無存知御方ハ別に御心得あるへ
得之間、人ニしらせ申候ハんために如此申入候』
く候間、かさねて委細令申候」、
『又』『この』『皆人』『也』
一御年来之人之事『ハ』、誰も存知之事にて候、道鑒の御
時、日向・大隅は先代よりかりめされ『て』候、同道鑒御代
に先代『ハ』滅亡候、「大友殿ハ肥後・筑後、少貳殿ハ豊
前・肥前、當方は日向・大隅同めされて候」、『滅亡後』
先代披官之人道鑒御時より奉公被申候『て』、坂より上之御
内之人々ハ多分坂より上に玄久『之坂上に』御上之時奉『分』
公被申候『て』、其内少々薩摩・大隅より御供被申たる方も
候、忠久・忠義之御時より御内者にて候本田・酒勾ニ
而候、大隅之國も守護代者久時の守護代をめしはなち
候而後は酒勾持て候貞阿之時まてハもちて候『て』に守護代
『を』置候而我『身ハ』御代官に在京仕候、「當御代に成候而
も」尊氏中『之』将軍の御時まて『及』大隅・日向は御かへ
しなく候間、様々訴詔『被』御申候『て』によて大隅『計』とり御返し
候、雖然畠山之礼部さゝへて不渡候間、氏久御向候て
度々合戦にうちかち、國を被召て候其時分より本田守
『を承候』『の』
護代蒙仰候、『京都の事ハ酒勾に被仰下候、國の事ハ本田に被仰
付候』『来』近比まてハ御年来之中にも此両人をハ一かとめ
しつかハれ候事『無』ハ隠有間『候』鋪候、今は本田も不思儀に一
『ふまへて候』『計にて候間』
城を堅持て御用に立候間、壱人『の』名字は残て候へ
共、古之威勢程は不見得候、本田か親類酒勾か部類の
様共見候に、適被召遣候時も、山取作事奉行『之』・風呂焼
奉行なと『と』を承候をいかめしけ『き事と』に存『存氣ニ候』候、我等か奉公
申候し時及ハ宿邊ニ候を被召ニ童部にて候し程ハ中間・力者をも
時は必酒勾か部類御文御かいしやくにまいり『参』候し、玄
給候し、おとなしく成候てより殿原をこそ御使にて被召候しか』
久之御時は酒勾之貞阿まいり『て』候、元久之御時は

酒勾部類ハ［惣領御方に候、少々京都］『不在合』に候間
まいらす候、元久總州之御縁に御成候而御産有へきに
て候時は、『我等か』兄弟に承候しか共不慮ニ御産相違
し候、道貞之御子孫之一筋目は今まてハ他家之者御文
かいしやく『には』まいらす候、

一伊地知方之事は、先代『滅亡の』後道鑒之御時被参候、
公方之御奉行にて被居候しほとに、御内ニ御契約候、
御賞翫にて候、仍子を一人御養子にて候間、我家を随
分と被存候も其謂候与、［山田部類御年来之事にて候
へとも、是又あるかひなく見え候］、

一御所『上』様之奉行『頭人ハ人々望をなし候へ共、子細不存候、
當御代』ハ不及申候、頭人ハ山名殿・上杉殿・波田野
かのゝすけにて候、［是は人々のそむ所にて候へ共、
をよはぬ子細にて候間］其外大名『様』之内には奉行
なとをハさしも［思はす候、自然やくなとの時ハ相手
に嫌ふ事にて候］、當家にハ奉行を奔走候様ニ見えて
候、御存知なく候哉、［又之用付て候哉、不審に本田
も酒勾も家督者今まて『名字をも次て候者ハ』奉行不被仰
付候、適被仰付候時も堅辞退申候し、［御内に分限も
あり家もたたしく候ハんする方こそ頭人をもも、執
士侍所とも可申候へ］、少弐殿内にはあいは『ら』・そ
うまか間侍所と申候、大友殿内にはたハら・ふるさハ
か間に執士と申て事をはからひ候、

一返々も如此に申入候事憚入存候得共、難有御意候て申
上候、大友・少貳か家九州之御下向又は國々よりはい
りやう候、不存知候へ共、證文を見出候間写進候、又
判官御時、藤原にてハ被渡間敷候、仍宗家の系圖所望
候ハ、御渡候たるよし人々申あわれ候程に、不知事に
て候程に、さてハ藤原之判官ハ有ましくと存候處、師
久判官ニ御成候時、藤原師久と宣旨明鐘候を見出し候
間うつし進し候、忠久は承久三年及ハ惟宗にて御入候
之間、惟宗判官にて御渡候ける哉、ケ様ニおもひ〳〵
に申合候間、行末何とか申なし候ハんすらんと存候、

一當家には今まて守護代と申を御内者賞翫しつけて候、本田・酒勾か親類も末ゝ者中には奉行持たる事も候、古より被召遣候様も御尋候程に委申入候、

一御尋候子細共申入候、以次令申候、今の世上之様を見申に、事久かるへき様に見えて候、長引候者當家之御衰微此時節に及候(存カ)、其故は大に身を被持候方ハ合戦を次にして籌策を本とせられ候、たま〳〵一人ちうさくしいたされ候へハ、所領を御出候ハては不叶候間、御内者持て候所を御遣候、左候へハ御内の仁うせ候ぬこと久敷成候て、次第〳〵にうせ行候ハんにハ國を御持候無其甲斐候、につきのつちはし殿伊勢國(イニ賀)を御持候へ共、内者十人はかりにて國之人にもたれて御渡候、それは京近之程に腕つ(ツ)よの大名方人にもやなられ候らん、さる間此守護をかへられ申ま敷之由國人申候間、かたのことくハ守護にて御渡候、遠國なとハ守護の御力懸候而御大事と存候之間、なけかしく候、何事も御計事延候、又は聊尓に候由老名共かけにて歎き申候、元久之御時まてハ評定日を被定、何事なき時も其日は御寄合候し、志布志にてハほふまん寺の仏殿、鹿児嶋にてハ道場邊、人のよりつかぬ所にてこそ御談合候し、今程は細ゝ御談合候ハて、時に望て安〳〵と御計候よし承候、文には三思一言、九思一言と申事こそ候へ、聊尓ニ御計候、無勿躰候、兵書にも軍之病ハ無勢隠書のしんしにありと申候、かくして人の方に遣す文符節と申ハ、かくして使を遣していくか(さカ)の日いつかたの方に寄合候而合戦をいたすへく候と申談する事にて候、此約束を与所に知候へハ、如符節隠書しんして軍にまくると申傳候、いくらも談合は隠蜜すへき事にて候、いかやうの方便も候而合戦を本とせられ候ハてハ、國の落居ありかたく候、大國も日本も國破たる時は合戦ハ候ハて、儀はかりにて立なをしたる國ハ又破たる事分明候、此六年か内、たひをたひことに御かちあるへき時節候しか共、守護の刀を掛終させ候ハんために事を申延候程に、案のことくに罷成候、氏親・親春なとハ上意を請す候へとも、時節を見計候而わつかの勢にても大勢によせあハせ、度ゝ打かち候而こそ大隅をも踏

鎮て候へ、是をこそ一騎堂（當千カ）なとも可申候へ、定而御意にも違、人の心にも違候ハすれ共、御尋の次ニ申入候、

一北山義満之御所は五の御歳中之将軍に御すくれ候、御父ハ細川頼之、御母はむとうの御局預申され候而、天下を御ちゝはゝしてはからハれ候けるに、評定日よりさきに大事之御沙汰之時ハ、先女房達をそろへて吳見を申させて、其内によく候儀をよりゆきに被仰候けるか、大略此儀に成候けると承候、いかに才覚の人も一人してハ大事の御事にて候、元久の御時まてハ御使節供仕なとおかしけに候へ共、むかしより申付たる者をこそ召遣て候へ、いかに分限もありことく、からも人にすくれうつくしく候人も多候しかとも、始而奉公申人、又は未申付人をは不召遣候、殊更御はかせをもたせ、御臺なとの宮仕をさせられす候、かやうの人は宮仕申たかり候而、御臺もちて参候し時も、今はほしくも無御座候なとゝて召上られ候ハて、後に別人に仰候而被召上候し、今も其比御渡候し人は可有御存知、今はふと参て候者もきほう一射出、はうかふし一うたひ候へハ、軈而無内外ふりをして萬の事をはからふやうに見え候間無勿躰候、かる〳〵しく御成候程にさうなくもとのことく難成見え候、なけかしく候〳〵、

一先年御敵被申候し國の面々の儀、更にくつろかす候し間、もしか様ニ御計候者かハるへくもや候と御了簡候而、先國之事好久御計候へ、貴久は暫御隠居にて、ことのやうを御覧せられへきにて如此御計候し處、無幾程面々御方ニ被参候、相川所（残カ）には御勢仕候間、南方より牛屎・菱刈・四ヶ所も御退治候、武は急なれと申候は、かやうの時節にてこそ候へ、なとや是程競候時分五日支候而御もミ候しかハ、四ヶ所皆々惣なミの事にて候間、道行へきにて候しを打捨て御帰候間、事延候而今まて支候、乍去日出（目カ）候而鹿児嶋ニ御帰候ニ、人につれ申候而申入候し様は、如此日出（目カ）國御退治候時、御方中之國面々御内人々ニはや國之事無為に罷成候へは、貴久もとのことく鹿児嶋に御座候而國を御計候へと申度候、同心被申候へと御尋候へかし、尤可然被存し人候共、先は此間御ほねおられ候而御退治候し間、

暫ハ御計こそ可然候へと申されぬ方ハあらしと存候、縱此儀候ハす共貴久に此由御申候へかし、ヶ様に順次に御計候ハヽ、貴久も定而順次の御返事ニ仰候ぬと存候、又ハ自國他國の憲法之御計と人にもしらせ、京都邊まても賢人の名を上させ申候ハんために申入候しか共、御返事たに不預候間不及是非候、又人をして申入候も申されす候与若又不被申候者、かゝる人を御扶持候而御頼候程に、世上も如此長引候而大儀に成行候と存候、今は申入候而も徒事にて候へ共、後ゝの御了簡にも成候やと存候而申入候、

酒匂安國寺状」

好久

参人ゝ御中

（本文書ノ［　］印及ビ見セ消印ハ朱書ナリ）

（元久）嶋津殿御上洛

應永十七年六月三日御参着、

同十一日御参會候、

進上物　御太刀一腰　鳥目二千貫

従御所様（義持）　御太刀一振金作

御舎弟新御所様（義嗣）江

進上物　御太刀一腰　鳥目三百貫

従御所様　御太刀一振

官領江　太刀一　百貫

裏松殿江　太刀一　五十貫

武州玉堂殿江　太刀一　五十貫

山名金吾江　太刀一　五十貫

一色殿江　太刀一　五十貫

土岐殿江　太刀一　五十貫

京極殿江　太刀　五十貫

畠山太夫殿江　太刀一　五十貫

赤松殿江　太刀一　三百貫色ゝ也唐物

畠山少輔殿江　太刀一　五十貫

伊勢殿江　太刀一　五十貫

飯尾殿江　太刀一　五十貫

同廿九日御屋形江御成候時引物

御所様江進上物之分

(注)
御鎧一鍋白糸　一御太刀金作　一御弓征矢　一御馬二
疋一疋ハ鞍置　一小袖十重　一御太刀白作　一御太刀
黒作
一段子廿端　一盆三　金紫推紅(堆)　麝香　一毛氈十枚
一虎皮十枚　一海梅花三十枚　一面革卅枚
一壺十　南蛮酒　沙糖　一絹百疋
御所様懸御目之人数
御一家
北郷中務少輔　御太刀一　鳥目百貫
樺山安藝守　御太刀一　鳥目百貫
國方
加治木能登守　御太刀一　鳥目百貫
野邊左衛門大夫　御太刀一　鳥目百貫
北原左馬助　御太刀一　鳥目百貫
蒲生美濃入道　御太刀一　鳥目百貫
飫肥伊豆入道　御太刀一　鳥目百貫
肝付河内守　御太刀一　鳥目百貫
御内方
阿多加賀入道　御太刀一　鳥目百貫
平田右馬助　御太刀一　鳥目百貫
新御所様江御引物
一御鎧白糸　一御長刀　一御弓征矢　一鞍置御馬
一御太刀　一小袖十重　一盆二　金紫准紅(堆)　麝香
一染付鉢一對　沈香　一繪十幅　一毛氈五枚
一虎皮五枚　一面革廿枚
官領江
太刀一　小袖三重　壺五　面革五枚　弓十張　征矢百　麝香
臍十
細川殿江
太刀一　小袖三重　壺五　面革五枚　弓十張　征矢百　麝香
臍十
赤松殿江
太刀一　小袖三重　壺三　面革五枚　弓十張　征矢百　麝香
臍十
御近習人数
伊勢殿江

太刀一　小袖三重　壺三　面革三枚　弓征矢　麝香臍五
畠山相模守殿江
太刀一　小袖三重　壺三　面革三枚　弓征矢　麝香臍五
同中務少輔殿江
太刀一　小袖三重　壺三　面革三枚　弓征矢　麝香臍五
同七郎殿
同出羽守殿
同少輔殿
新田殿
福賢殿
朝日殿
侍人大名騎馬衆各太刀一　小袖三重
南禅寺江壺三鳥目十貫
相國寺江絹百疋
東福寺江鳥目十貫
即宗庵江點心料鳥目十貫
南禅寺都分鳥目三十貫　壺三　胡銅花瓶三　具足一鈒
馬一疋
四条導場江壺三　茶埦皿三百　蜜瓶一　人参十斤　香
爐十　花瓶一對
一条正親（「規」）導場江壺五　茶埦皿六百　人参十斤
赤松老名數人江鳥目卅貫　虎革五枚
依藤殿江壺三　弓十張　征矢百
赤松左馬助殿江弓廿張　征矢百　面革三枚
清阿江鳥目五十貫　壺三　虎皮
直阿江鳥目五十貫　壺三　繪十幅
侍、雑仕、小舎人、力者、御厩七間五間、童子松法師、輿舁、諸職人鳥目五百貫、
御成屋形代候時鳥目（㊀千）十貫
從御所様御太刀二振・御鎧・御馬、自諸大名馬・物具・酒肴数々、此外鳥目唐物色々引手物不知数、
伊集院殿御前ニ上洛候而、御在京之時儀被取成候、
包丁人春山

（本文書ハ「旧記雑録前編二」八〇〇・八〇二号文書ト同一文書ナルベシ）

270
しまつの三郎さゑもんたゝよしかくんこうにたまはりたる所とも、めされてさふらふらむ事、かへす〳〵ふひんにさふらふ、ことしとなり候て、あきたるところとも、おほろけにハみえ〔申〕候ハす、おのつからさふらふもあさましく、せう所ともにて候つる也、これよりのちにも、おのつからあきたる所候ハ、かならす〳〵たふへく候とそ、おほせ事候、この御ふミをおなし心に御らん候へし、

十一月十三日　「續目裡判」

（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編一」三一六の1・三五六号文書ト同一文書ナルベシ）

271
仰給候事、こまかにうけ給候ぬ、さい京して御心さしのわたらせ給候し事ハ、いかてかをろかのき候へき、たゝし御殿人のらうせきして候し事ハ、をろかならす思ひまいらせ候、とてもちからなき事にて候也、申させ給候御をんの事ハ、かみよりも御さた候へきよし、おほせくたされて候し事にて候、ひんきの時、申さたすへく候也、兼又、はたけやま殿なんとにも、御ゆかり候へハ、いよ〳〵をろかならすこそ思ひまいらせ候事にて候へ、なにしにかハ御ふしん候へき、あなかしこ、

「文暦二年乙未」閏六月廿九日　在判

豊後修理亮とのへ　泰時　「續目裏判」

（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編一」三八八号文書ト同一文書ナルベシ）

272
「藤野氏文書トアリ」

今日吉日候之間令申候也、

『疑肥後菊池』

今夕罷出當陳候、即可申候之處、期明日之参會候之間、遅〻仕候き、抑にしきのひたゝれの事承候、先祖一代御免候へは、子孫相續無相違事候、尤御用ハめてたかるへく候、可存其旨候、御旗事ハ、其陳ニ一流之外、不用事候間、御所持まてたるへく候、如何様御ひたゝれの事ハ、殊〻可目出候、心事入見参可申承候、恐〻謹言、

『疑當永和元年』八月十日　『今川了俊』了俊（花押）

『氏久公』嶋津越後守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」三〇四号文書ト同一文書ナルベシ）

273

御屋形様(忠国)之御事承候、委細心得申候、弥長久ニ可申通候、仍御一代國役事、無其例之由承候、肝要候、自然被仰出時宜候者、其子細可申上候、次日向國事、如何様ニ伊東方訴訟候共、不可有御承引候、若左様之御沙汰候者、當方懸身候て相支可申上候間、可御心安候、諸篇自先規申合事候間、京都之時宜者、乍恐可有御任候、此趣御下向之時、可預御披露候、恐々謹言、

十月十五日　　則宗（花押）

（墨引）　『京都所司代』浦上美作守

「文明四年正月廿四日到来」　　則宗

五代筑前殿

御陣所

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一四六九号文書ト同一文書ナルベシ）

274

『寫在島津圖書久通家来阿久根猪右衛門』

「校正了」

号四國宮落下、當國南方成廻令旨、依相語御方軍勢候、國中以外騒動之間、馳越千臺(川内)、雖相催軍勢候、依有所存遅参之處、御一族不残自最前馳加、被致忠節令条(田之)、就公私憑敷存候、且此段可注進申候、恐々謹言、

暦應五　　（島津貞久）道鑒在判

七月十日

莫祢遠屋次郎太郎入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二一四九号文書ト同一文書ナルベシ）

275

今曉三條御所炎上旱、依此事、大隅薩摩両國地頭御家人等、不可馳参之由、可被相觸國中之状、依仰執達如件、

康永三年十二月廿二日　　『高師直』武蔵守『在判』

島津上総(貞久)入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二一九四号文書ト同一文書ナルベシ）

276

「正文在樺山家」

注進

薩摩國動乱之間、　院家御領伊作庄河北仁、御敵等構城櫛於所々(一本仁)、田尻・坂本・今田已上三箇所仁、構城櫛楯籠之間、庄内荒所仁罷成候之處、嶋津左京進入道々恵、帯梨原法眼下状、去年四月七日、中山城仁打入、

277

『尊氏公御判』

被差置代官、直人名主相共仁、彼三ヶ所〔之〕（一本ナシ）城ハ（一本於）被攻落候之處、日置北郷河北者、大隅助三郎入道〻忍令押領候之間、今年五月中仁、自守護方名主各如元しすゑられ候處、同八月中仁、助三郎入道〻忍又成御敵、追落日置下司宗太郎忠弘之城、同北郷河北河南一曲仁、被押取候了、就其伊作庄河北仁、御敵等近日可寄来之由、及治定候之間、為令（恒全）庄内、道恵代官、名主直人相共、中山城楯籠候、如此奉為　領家、道恵被致忠節候事、無子細候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

貞和二年九月　日　　藤原種秀
藤原惟弘
沙弥道願
沙弥西念
沙弥良心

進上御奉行所

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二二二〇・二二二四号文書ト同一文書ナルベシ、一本ハ二二二四号文書ヲ示ス）

嶋つの左京しん入道・おきの入道の子とも、いまゝてこらへてちうをいたす事、しんへうに候、おハりのくにハつかさきのしやうもおとされ候ぬ、ゑちうのふもんくら人もかう人（◎ニ）まいり候ぬ、こなたさまハ、みなせいひつして候、猶〳〵ちうをいたすへし、又新田かしそくもいけとられ候てきられ候ぬ、いまハいよ〳〵ちからをそへて忠をいたすへし、きよかんあるへし、このあひたのしんくこそ、かへす〳〵しんへうに候へ、

『貞和二年』
（閏）潤九月十四日

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二二二七・二五六五号文書・「同附録二」一二二四号文書ト同一文書ナルベシ）

278

南方凶徒對治事、所差遣山名伊豆前司時氏也、早可發向之状如件、

貞和三年九月廿八日　　『尊氏公乎』御判（直義）

嶋津三郎左衛門尉殿
『師久公ナラン』

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二二六四号文書ト同一文書ナルベシ）

279

「正文在嶋津安藝守久雄」

薩摩國凶徒誅伐事、差遣子息可合力之旨、仰一色少輔(範氏)太郎入道之處、申子細、于今不事行云々、重猶可相談之、且亦如元可相催日向國勢之由、被仰付畠山修理亮(直顕)畢、彼仁相共弥可致忠節也、爰今月五日、楠木帯刀・同弟次郎・和田新發(智脱カ)・同舎弟新兵衛尉以下凶徒数百人、於河州佐良々北四条、所討留也、此上吉野退治不可有子細之状如件、

貞和四年正月十二日　『直義　御判』

嶋津上総(貞久)入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二三六五号文書ト同一文書ナルベシ）

280

兵衛佐直冬事、隠謀既露顕了、早令發向彼在所、可誅伐之状如件、

貞和五年十二月廿七日　『尊氏公　御判』

嶋津大隅左京(伊作宗久)進入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二三〇八号文書ト同一文書ナルベシ）

281

可参御方之由、被聞食了、神妙、有其功者、可致抽賞者、天氣如此、悉之、以状、

正平六年八月三日　左中辨『在判』

大隅左京(宗久)進入道館

『右上包』
吉野宮綸旨
将軍御教書　二通

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二三六九号文書ト同一文書ナルベシ）

282

『正文在入来院隼人重治家来岡本八郎右ヱ門重盛』

可参御方之由、聞食了、早属申征西将軍宮、可致軍忠、有殊功者、可有其賞者、天氣如此、悉之、以状、

正平六年八月三日　左中辯『在判』

渋谷九郎左衛門尉(重興)館

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二三七〇号文書ト同一文書ナルベシ）

283

入道直義朝臣乖

朝意没落云々、早可被追罰、於致軍忠輩者、可有抽賞者、

天氣如此、仍言上如件、

正平六年十月廿五日　　左中将具忠判

進上　足利大納言(尊氏)殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二三八一号文書ト同一文書ナルベシ）

284

吉野和睦之間、可追罰入道直義朝臣之(◎旨)間、去月廿五日被下　綸旨、案文遣之、仍為治罰彼賞類(◎輩)、所下向関東之(◎也)、存知定之旨(◎其)、相觸一族等官軍、弥可致忠節之状如件、

正平六年十一月十三日　　『尊氏公』御判

嶋津上総入道(貞久)殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二三八六号文書ト同一文書ナルベシ）

285

将軍家御臺所御領日向國穆佐院嶋津庄事、畠山修理亮・伊東八郎已下直久与(『イ冬与』)同凶徒等、構城塚濫妨候之間、可令退治之由、所被仰一色少輔太郎入道也、可致合力之状如件、

観應三年四月廿九日　　『尊氏公　義詮公御父子之間乎』御判(義詮)

嶋津人々御中

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二四二一号文書ト同一文書ナルベシ）

286

『藤野氏文書寫本四十四通之一也』

今月十一日夜、八幡凶徒等追落了、且存其旨、且可相觸九州輩之状如件、

観應三年五月十三日　　『尊氏公乎』御判

一色少輔(範氏)太郎入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二四二三号文書ト同一文書ナルベシ）

287

『同上』

八幡山凶徒没落事、去月十三日御教書如此、案文遣之、早可被相觸分國地頭御家人等也、仍執達如件、

観應三年六月十八日　　『一色少輔太郎入道道猷沙弥判』

嶋津上総入道(貞久)殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二四二四・二四三〇号文書ト同一文書ナルベシ）

288

『正文在清水瀬戸口弾兵衛』

嶋津上総入道々鑒以肥後宮令旨、引卒薩摩國凶徒并所々

悪黨等、遂落(逐カ)大隅國隈本城・栗野北里城間、為退治所發向也、致用意、可抽軍忠之状、仍執達如件、

観應三年七月廿日　『畠山直顕』修理亮『在判』

姫木五郎四郎殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二四三五号文書ト同一文書ナルベシ）

289

『正文在帖佐船津村ノ百姓軍右衛門』

嶋津上総入道『欠』　肥後宮令旨、引卒薩(◎摩)『欠』凶徒并所〻悪黨等、遂落(逐カ)『欠』大隅國隈本城・栗野北里城間、為退治所發向也、致用意、可抽軍忠之状、仍執達如件、

観應三年七月廿日　『畠山直顕』修理亮『在判』

姫木十郎殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二四三六号文書ト同一文書ナルベシ）

290

京都合戦難儀之間、一旦雖引退濃州、方〻官軍馳加之上、将軍家已御上洛、先陣勢参着之間、明日十日所責上也、其堺事、同心之輩相共可退治凶徒等、且帰路(◎洛)之時、可着(差カ)下討手之状如件、

文和二年七月九日　『義詮公乎』御判

嶋津判官(師久)殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二四八九号文書ト同一文書ナルベシ）

291

薩摩国凶徒牛屎左近将監高元・市来新左衛門尉氏家・東郷蔵人道義、肥後國葦北庄宮方凶徒、引合于當國凶賊和泉庄下司諸太郎兵衛尉政保以下、去四月廿六日夜丑刻、老父居住忍入于山門院木牟礼城、及合戦次第、舎兄師久注進之間、不及巨細候、次日州畠山匠作并伊東一族於佐殿方打出候之間、土持薩摩守貞綱同一族等、参御方可始合戦之由馳申候、彼書状進覧之、仍令談合球麻一色孫三郎殿、既打立候合戦之次第、追可注進言上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和四年六月十八日　左衛門尉氏久上

進上　御奉行所

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二五八七号文書ト同一文書ナルベシ）

292

『正文在大興寺』

一天四海之逆乱更不得其期、是偏義教公(カ)恣(盗)行悪逆無當之政道故也、然間於一門之中、不退此乱悪者天命之至、落着可及當家滅亡欤之上、別而者又為勝定院之猶子間、云由緒旁以存立(カ)之處、全非私曲之儀、併為助万民續家門也、依之万方成下知之間、諸國存其志、既時節純熟之間、(文)志(急)欲企現形、然者應順路之儀、早為御身方之随一致忠節、廻計略者、可為御本意、於恩賞者、随望可有其沙汰、猶〻軍忠之一段、別而憑訖、仍状如件、

八月廿五日　『尊有　在判』

椛山(孝久)殿

『上書』

椛山殿　尊有

『右之包紙如此有之』

大覚寺義昭僧正御真筆之御状、故以(ママ)預従椛山殿候、

權少僧都頼園

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二六一・一二六二号文書ト同一文書ナルベシ）

293

『在樺山源三郎久清』

日向國人野邊在所ニ大覚寺居住之由被聞食候、不日上進之候者、忠節不可過之候、於恩賞者、可随望之由、野邊堅可申付候也、

六月廿日

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二二〇号文書ト同一文書ナルベシ）

294

『在樺山源三郎久清』

大覚寺在所注進并彼状取進之、神妙被思食候、不日致計略可上進之、万一其儀不可叶候者、可討進之、雖為何篇忠節不可過之候、委細彼使被仰含候也、

六月廿日

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二二一号文書ト同一文書ナルベシ）

295

『在樺山源三郎久清』

大覚寺事、分國中居住之由、以前注進之時委細被仰訖、然者不日可致沙汰之處、於于今延引如何様子細哉、定雖不可有疎略之儀、不廻時日令落居者、万代忠節不可過之、併被憑思食候、巨細猶大内修(持世)理大夫可申候也、

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二二二号文書ト同一文書ナルベシ）

296

大覚寺事、依計略早速落居、忠節之至無比類候、向後弥憑思食候、兼亦一紙披見、殊神妙、旁以心中趣、感悦不少候、仍太刀一腰・腹巻一領・馬一疋遣之候、委曲満政可申候也、

（嘉吉元年）
卯月十三日　『義教公御判』

嶋津陸奥守とのへ
『九代忠國』

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二四一号文書ト同一文書ナルベシ）

297

『正文在樺山源三郎久清』

就大覚寺事、致粉骨之由、被聞食候、忠節之至、尤以神妙、仍太刀一腰遣之也、

（嘉吉元年）
四月十三日　『義教公御判』

樺山美濃（孝久）守殿

（墨引）樺山美濃守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二四五号文書ト同一文書ナルベシ）

298

『正文在別府式部左衛門』

就大覚寺事、致粉骨之由、被聞食候、忠節之至、尤以神妙、仍太刀一腰遣之也、

（嘉吉元年）
四月十三日　『義教公御判』

肝付三郎（兼忠）殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二六三号文書ト同一文書ナルベシ）

299

「在村田太右ヱ門」

大覚寺殿御事、於于日向國櫛間、被召御腹候、彼御頸既到来候、　公方様御快然過賢察候、天下大慶此事候、随而嶋津方より　公方様へ、後々何事にても言上之時者、三条殿に付申候て、可有披露候、我々にも可申通之旨、自是可申下之由、或方指南候、如何様　上意之趣、存知子細候哉、　氏神も照覧候へ、非虚言候、此分いかにも堅固可有御諷諫候、為後日存旨候之間、以誓言申候、恐々謹言、

（嘉吉元年）
卯月十四日　持世（大内）『在判』

菊池殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二四七号文書ト同一文書ナルベシ）

300

「在村田太右衛門」

去月十四日御注進、今月九日到来候、則致披露了、抑大覚寺殿御事、依御計略早速令落居候、御忠節之至、可及御子孫候、異于他候、同十日、御頸京着候、御感余被下御自筆御書候、并御剣國安・御腹巻浅黄絲・御馬青、被遣之候、御面目之至無比類候、尚以自私可申旨、被仰出候、就中今度之儀、雖御斟酌候、沙汰被申候（◎之）由被申事、御不審之由被仰出候、諸人又不得其意候哉、如此次第能々可有御心得候也、将又先度以告文、御心中通言上候、今度之儀相當之間、殊御悦喜候、次圓宗院事、大覚寺殿ニも不相劣思食候之處、被漏之条、御無念無極候、如何様之次第候哉、且御不審相残候、早々被尋出之、被召進候者、猶々可為御忠節候、委曲御使令申候、恐々謹言、

（嘉吉元年）四月十五日　（赤松）満政『在判』

嶋津陸（忠国）奥守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二四八号文書ト同一文書ナルベシ）

301

「藤野氏蔵本」

五人面々今度粉骨之由、令披露之間、即被下　御書候、并御剣被遣候、御面目之至、目出候、定而御祝着候哉、尚々今度御忠節異于他候、如何様於向後、連々可申入候、毎事不可存疎略候、御同心候者、可為恐悦候、併期後信候、恐々謹言、

（嘉吉元年）卯月十五日　（赤松）播磨守満政『在判』

謹上　嶋津陸奥守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」五四五・一二四九・一二五〇号文書・「同附録一」六一二号文書ト同一文書ナルベシ）

302

『正文在樺山權左ヱ門』

御太刀

新納　長光　『新納近江守忠續』

北郷　國行　『北郷讃岐守持久』

肝付　同銘　『肝付三郎兼忠』

本田　正恒　『本田信濃守重恒』

樺山　國宗　『樺山美濃守孝久』

此分被遣候、

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二六五号文書ト同一文書ナルベシ）

303

『藤野氏本』

『口欠』

『欠』野邊告文事『欠』被置其ニ候て可然候間、被遣返候、即此之使渡申了、兼亦不被仰出候之處、自其遮而以誓文、御心中通言上候、御悦喜之由、猶〻可申旨、不被仰出候、左様之趣、巨細此御僧令申候、併期後信候、恐〻謹言、

（嘉吉元年）卯月十六日　（赤松）満政『在判』

嶋津殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二五二号文書ト同一文書ナルベシ）

304

就大覚寺殿御事、先度御註進之通、御忠節誠無比類候、且者屋形まても面目之至候、定御使面〻下着候哉、兼又、圓宗院事、急被召捕進候者目出候、如何様にも被尋究、急速可被捕進候、彼者張本人事候間、殊以肝要之由被仰出候、猶〻被廻御計略候之者、千万可目出候、餘度〻被仰出候間、態以飛脚言上仕候、此之趣可預御披露候、恐惶謹言、

（嘉吉元年）五月廿六日　（重恒）友貞『在判』

進上　本田信濃守殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二五四号文書ト同一文書ナルベシ）

305

就大覚寺事、以前玄照上洛之時、且雖被仰候、今度儀忠節之至、無比類之間、態以使者被感仰候、仍馬・太刀・刀遣之候也、

（嘉吉元年）六月十七日　『義教公御判』

（忠国）嶋津陸奥守とのへ

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二五七号文書ト同一文書ナルベシ）

306

「藤野本」

嘉吉元年三月十三日、大覚寺殿之御事、依　上意、櫛間於永徳寺御生涯候、同十七日ニ御頸上洛候、同六月廿日、京着之時之御感之御内（書）『欠』二通、玄照書記と候ハ即心坊主之名也、満政と候ハ赤松（ママ）幡摩（◎也）守『欠』、一『欠』と被

遊候ハ大覚寺殿之御服儀也、（ママ）後覧之人為不審書付置候也、

寛正四年癸未七月七日

『忠國男立久家老　本田治部少輔』　宗親『在判』

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一四一三号文書ト同一文書ナルベシ）

307

『正文在大興寺』

薩摩國魔嶋郡大興寺之事

右件之寺者、　征夷大将軍義持御舎弟大覺寺殿於日州櫛間院御下向之事、至天下無其隠云々、于爰曽祖父陸奥守忠國依為京都之御下知難儀、于時嘉吉元年辛酉三月十三日、御歳卅七、不慮之計無是非次第也、然處為其子孫銘其恐肝、故奉請　勅号、權大僧都法印頼政定開基始祖、号　大覚寺殿御菩提所、令建立大興寺早、然者為忠治子孫者可存此旨、仍寺領在別紙至彼地萬雑公夏諸役等、皆以可有停止者也、況於他之妨哉者、證状如件、

永正十二年乙亥六月七日　（島津）忠治『在判』

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一八六〇号文書ト同一文書ナルベシ）

308

『正文在大興寺』

薩摩國魔嶋郡大興寺之事

右、寺建立之旨意趣并寺領定法等之儀、去永正十二年六月七日、忠治之状在之条、尤所庶幾也、然者至永代、可守此旨之外無他事、萬一於違乱之輩者、不可為忠隆子孫之至孝者也、仍状如件、

永正十四年丁丑八月廿七日　（島津）忠隆『在判』

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一八八七号文書ト同一文書ナルベシ）

（表紙）

三番箱　　伊進上

諸舊記文書　三

（中表紙）

「諸舊記」

一御三代様御下文寫
『〈』
一池田左近将監覚書
〃〃〃〃〃〃〃〃
一蒲生士山元氏所蔵古日記
一佐多民部左衛門尉久英覚書
一寛永九年百石より弐百石迄御軍役覚
一江平傳左衛門尉覚書
一新納拙齋其外書状写
一長野氏手鑑書抜
以上

忠久公

309

「写嶋津久雄ニアリ」

（源頼朝）
（花押）

〇〈下　伊勢国須可御庄

補任　地頭職事

「左兵衛尉惟宗忠久」

右、件所者、故出羽守平信兼黨類領也、而信兼依發謀反、令追討畢、仍任先例、為令勤仕公役、所令補任地頭職也、早為彼職、可致沙汰之状如件、以下、

元暦二年六月十五日

（本文書ハ「旧記雑録前編一」八七号文書ト同一文書ナルベシ）

310

○下　伊勢國波出御厨

補任　地頭職事

「左兵衛尉惟宗忠久」

右書同断、

元暦二年六月十五日

（本文書ハ「旧記雑録前編一」八六号文書ノ抄ナルベシ）

311

○（源頼朝）（花押）

下　嶋津御庄官

可早任領家大夫三位家下文状、以左兵衛少尉惟宗忠久為下司職、令致庄務事、

右、件庄下司職、任領家下文、以忠久為彼職、可令致庄務之状如件、庄官宜承知、勿違失、以下、

元暦二年八月十七日

（本文書ハ「旧記雑録前編一」八九・九一号文書ト同一文書ナルベシ）

○文治元年十一月十八日、同断御下文、

（右ハ「旧記雑録前編一」九三号文書ヲ示スモノカ）

○文治二年正月八日、信濃國塩田庄地頭職ノ御下文、

（右ハ「旧記雑録前編一」九七号文書ヲ示スモノカ）

312

○下　嶋津庄　「頼朝公」判

可早停止藤内遠景使入部、以庄目代忠久為押領使、致沙汰事、

右、号惣追補使遠景之下知、放入使者、冤凌庄家之由、有其聞、「欠」（事）實者、甚以無道也、自今以後、停止遠景使之入部、以彼忠久為押領使、可令致其沙汰之状如件、以下、

文治三年九月九日

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一二一号文書ト同一文書ナルベシ）

○五月九日、盛時一通写、○建久二年十二月十一日、頼朝下文寫一通、○建久三年十月廿二日一通、○建久九年二月廿二日一通、

（右ハ「旧記雑録前編一」一五三・一五五・一五八・一七九・一八〇号文書ヲ示スモノカ）

313
○将軍家政所下　嶋津庄内薩摩方住人

補任　地頭職事

左衛門尉惟宗忠久

右人、如本為彼職、任先例、可令致沙汰之状、所仰如件、以下、

建暦三年七月十日　　案主菅野（景盛）（花押）

令圖書少允清原（清定）判　　知家事惟宗（孝実）

別當相模守平朝臣（義時）判

遠江守源朝臣（親廣）判

武蔵守平朝臣（時房）判

書博士中原朝臣（師俊）（判）（◎花押ナシ）

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二三四号文書ト同一文書トナルベシ）

○建久三年五月、信濃國大田（太）庄地頭職寫（承カ）一通、○承久三年五月八日、右同一通、○承久三年五月十三日、越前國東郷庄地頭職、○承久三年七月十二日、越前國守護人一通左衛門尉藤原忠久トアリ、○承久三年七月十八日、信濃國太田庄地頭職左衛門尉藤原忠久トアリ一通、○以上、陸奥守平朝臣判アリ、○（北条義時）（花押）

（右ハ「旧記雑録前編一」二七〇・二七三・二七四・二八四・二八八号文書ヲ示スモノカ）

○（北条義時）（花押）○貞應元年十月十二日、越前國守護（職）事、任去年御下文之旨、左衛門尉惟宗忠久可令奉行之一通、

（右ハ「旧記雑録前編一」三一五号文書ヲ示スモノカ）

忠時公

314
○可令早嶋津三郎兵衛尉忠義（忠時）為越前國生部庄并久安保重富地頭職事、

右人、補任彼職之状、依仰下知如件、

承久三年八月□（◎廿五）日　　陸奥守（北条義時）平（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二九九号文書ト同一文書ナルベシ）

○承久三年閏十月十五日、伊賀國長田郷地頭職左兵衛尉

惟宗忠義トアリ、○貞應二年六月六日、可令早左衛門尉藤原忠義為近江國興福寺庄地頭職事一通、○貞應二年八月六日、同十二月八日以上陸奥守判、○貞應三年九月七日、可令早左衛門少尉藤原忠義、為讃岐國櫛無保地頭職事一通、武蔵守平（北条泰時）（花押）

（右ハ「旧記雑録前編一」三〇三・三二一・三二二・三二六・三二七号文書ヲ示スモノカ）

315

○下　信濃國太田御庄沙汰人等所

可早定補津乃郷地頭代職事

左衛門尉惟宗忠義

右以人、於彼郷御代官、有限御年貢無懈怠、任先例、可令致沙汰（◎給）之状如件、

嘉禄元年七月三日

（本文書ハ「旧記雑録前編一」三三三号文書ト同一文書ナルベシ）

316

○譲渡

在判

薩摩國地頭守護職事

左衛門尉惟宗忠義

伊作庄　かわのへの郡　指宿郡

この三ヶ所外ハ、可被（◎致）沙汰也、

右、限永代、可致其沙汰之状如件、

嘉禄三年六月十八日　豊後守（忠久）（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編一」三四七号文書ト同一文書ナルベシ）

○嘉禄三年、信乃國（太）大田庄内惣政所神代郷云々一通、

（右ハ「旧記雑録前編一」三四八号文書ヲ示スモノカ）

317

○「頼朝公」（藤原頼経）（花押）

下　左衛門尉惟宗忠義（忠時）

可早領知越前國守護職、嶋津庄内薩摩方地頭守護職（◎摂）

并十二嶋地頭職（但除河邊郡・指宿郡・伊作庄定、此外泉庄、後家給御下文畢、後家一期後者、忠義可令傳領之）、信濃國太田庄内小嶋・神代・石村南・津乃（已上四箇郷）地頭職事、

右人、任亡父豊後守忠久朝臣譲状、可安堵彼職之

状、所仰如件、以下、

嘉録(禄)三年十月十日

（本文書ハ「旧記雑録前編一」三五一号文書ト同一文書ナルベシ）

318

○将軍家政所下　　和泉國和田郷住人

補任地頭職事

前大隅守惟宗忠時

右人、越前國生部庄之替、所宛給也者、為彼職可令領知之状、所仰如件、以下、

仁治三年二月廿二日　　案主左近将曹菅野

令左衛門少尉藤原(二階堂行綱)在御判　　知家事弾正忠清原在判

別當前武蔵守平朝臣(泰時)在御判

前摂津守中原朝臣(師員)在判

前陸奥守源朝臣(義氏)在御判

前美濃守藤原(親実)在御判

前甲斐守大江朝臣(泰秀)在御判

武蔵守平朝臣(朝直)〔□(◎ナシ)〕(在御判)

散位藤原朝臣(義景)在御判

（本文書ハ「旧記雑録前編一」四〇九号文書ト同一文書ナルベシ）

319

○すりのすけひさ(久経)時にゆつりわたす所〳〵、

さつまのくにのすこのしき、おなしきくにのうち、さつまこほり(郷)いちく(市来)のゐん、やまとのゐん(山門)、へきのな(日置)(南)んかう(宮里)、ミやさとのかう、あくね十二たうのしま、このゆつりにまかせてちきやうすへし、もしさかいといひ、みくうしといひ、かた〳〵いらんをなさん事もあらハ、なかくいけんをはなちて、上まて申上て、そのいらんせんものゝりやうを申給はるへし、

ふんゑい二年六月二日　　道佛(忠時)判

（本文書ハ「旧記雑録前編一」六七九号文書ト同一文書ナルベシ）

320

『コレヨリ口切』

○しなのゝくに太田庄内

こしまのかう

一おほいのすけのふん

さつまのくに

いすゐん
きいれのゐん
えのこをり
いつミの庄
みついゑのいん
しなのゝくに太田庄
いしむらのミなミかう
つのゝ二郎丸ニ給田屋敷
いつみのくに
上てうのかうの内五かり　子細見譲状、
一こけふん
さつまのくに
みついゑのゐん　一このゝちハ□ほ□のすけ（お）（い）
しなのゝくに
かしろのかう　一このゝちハすりのすけ
さぬきのくにくしなしのほうの内
ミつなり名　一この後ハすりのすけ
給米百石　たゝし母一期の後ちきやう□し、（すへ）

一女しいかのあまのふん
いかのくに
なかたの庄　一このゝちハ四郎六郎ニゆつるへし、
一同女しミなミの女はうのふん
さつまのくに
たにやまのこをり
いつミのくに
ミきたの中条
同けてう
しなのゝくに太田庄内
かしろのかう給田屋敷　子細見譲状、
一まこもんす　すりのすけの女し
いつミのくに
上てうのかうの内
ちんたのり
右、ゆつり状もくろくかくのことし、このむねをまほりてりやうちすへし、たゝしゆつり状をたいせすして、しそくといふハくりをかうにして、しゝそん〳〵ニてきた「本ノマヽ」（◎か）

いをなさんともからニをいてハ、またくしそんのきにあらす、しかしなからふけうのものなり、たとい上ニ申上「不孝也」といふとも、またく御□(し)むよ□(う)あ□(る)へからさる状如件、

文永四年十二月三日　　沙弥道佛(忠時)（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編一」七〇五号文書ト同一文書ナルベシ）

321

○可令早修理亮久時(久経)領知薩摩國鹿児嶋(◎麑)郡地頭職事

右、任親父前大隅守忠時法師(法名道佛)去年十二月十三日譲状、可令領掌之状、依鎌倉殿仰、下知如件、

文永六年十月廿三日

相模守平朝臣『時宗』（花押）

左京權大夫平朝臣『政村』（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編一」七二一号文書ト同一文書ナルベシ）

322

○校正早

一たうふつかそりやうらの事、めん〳〵のしそくまこともらにわけゆつるとゆへとも、しし(実子)んなからんし◎ハくらのふんを、その一このゝちハ、ひさ時ち行すへし、

一御くうしようとうの事

そりやうのふんけんをさためをかれをハぬ、しかるをかのふけにつきて、はいふんの御くんしをたいかんせんともからあらんにをきてハ、そのりやうハ、ひさ時ちきやうすへし、

一きやうとおうはんの事

ひさ時かさいそくにしたかひて、一ミとうしんにあひつとむへし、もしそうりやうひさ時かけちをそむきて、たいかんのともからあらハ、そのちきやうのふんをハ、ひさ時これをちきやうすへし、

一ひさ時にゆつりあたふるそりやうのうちのゝそきにをきてハ、ひさ時につけをはぬ、

右、のちのらうろうをたゝんかために、そんしやうの時、かきあたふるさうくたんのことし、

ふんゑひ八年九月十五日

たうふつ御判(忠時)

（本文書ハ「旧記雑録前編一」七二七号文書ト同一文書ナルベシ）

323

○ゆつりわたす

下つさのくにさうむま（相馬）の御くりやのうちくろさきのかうの事

右ところハ、さうむまのこ二郎左衛門殿（たね）、ならひにこあまこせんのゆつりしやうをそへて、下つけの三郎むねたゝにゆつりわたす也、しゝさかいハ、かうく（康元）元ねんくわんねん・こうあん三年のこあまこせんのゆつりしやうにまかせて、たのさまたけなくりやうちすへし、もしこの所のうちを、ゆつり状ありと申さん人ハ、しそんにてハあるましく候、ほうそのとかに申あてられ候へし、よてゆつり状如件、

弘安七年三月廿二日　　たいらの氏（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編一」八五〇号文書ト同一文書ナルベシ）

324

○将軍家政所下

可令早嶋津下野前司入道ゝ義（忠宗）、領知日向國高知尾庄・肥前國松浦庄内早湊村・同國福万名地頭職「イ富忍阿跡トアリ」（頭注）江田忍阿跡、副田三郎次郎種信跡事、

右、為菊（◎池）地庄領家職替、所被宛行也者、早守先例、可致沙汰之状、所仰如件、以下、

文保元年十二月廿一日　　案主菅野

令左衛門少尉藤原　　知家事

別當武蔵守平朝（貞顕）臣在判

左馬權頭兼相模守平朝（高時）臣在判

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一二二七号文書ト同一文書ナルベシ）

325

任此状可令領掌之由、依仰下知如件、「右以日高義勝本写之、文化寅□月十八日」

文保二年三月廿三日　　相模（高時）守在判

武蔵（貞顕）守在判

（本文書ハ文保二年三月十五日島津道義譲状ノ外題ナリ）

ゆつりわたす

ちやくし三郎左衛門尉貞久分

さつまの國すこしき

十二たうのちとうしき
さつまのこほりのちとうしき
山門ゐん
いちくのゐん
かこしまのこほり同なかよし
さぬきの(◎ナシ)
しなのゝ〔國〕くしなしのほう上村下村
しなのゝ國太田の庄内南郷
(◎つさ)
下総國さむまの内ふかわの村下黒さき、同ほんと
ひうかの國たかちをの庄
ふせんの國そへたの庄副田三郎二郎種信跡但散在名をハのそく、
右所々、貞久にゆつりあたふる所也、女子分子なくハ、
其一期の後ハ、惣領(◎そうりやう)貞久可知行之状如件、
文保二年三月十五日　　沙弥道義(忠宗)御判
(本文書ハ「旧記雑録前編一」九六八・一二三二・一二三五・一二五二号文書ト同一文書ナルベシ)

326

蒲生郷士山元庄右衛門家蔵古日記
『弘治元』
二月分

十二日(旧之)朝、吉田衆蒲生へつり仕役たくまれ候へ共、
指義(旧儀)もなし、従是(旧ナシ)〔ニ〕　若殿様吉水まて御續アリ、
十五日、吉田衆鼠尾にて敵一人打れ候、本田宗左衛門
高名▽(旧)仕候、十七日朝、城ケ△崎敵より栫取候、▽
(旧)廿四日、加治木春日△山へ敵伏『候を』▽(旧)二人打
取れ候、何茂有△名(旧ナシ)〔字〕者也、
▽(旧)　三月分
一一日、吉田衆はるけにて敵壹人打、同馬四疋取てのか
れ候、
二日、平松の人衆帖佐湊ロニ仕方たくまれにて、敵貳
人打候、梅北向合良方高名仕られ候、是日　若殿様餅
田原迄御馬出され候、
六日、吉田衆蒲生畠田にて、敵壹人打候、馬八疋取て
のき候、
八日、加治木衆・長濱衆・日當衆(山脱カ)・溝邊衆談合ニて、
邊河にて仕方たくまれ、敵廿三人打候、
拾五日、銀之御陳之坂ロニ被召寄候、御陳太将ハ摂津
殿、くハ初ハ三原方、

廿四日、銀之御陳之覧為ニ、　御屋形様御光儀アリ、かくて吉田へ御父子之御馬ヲ入れ候、此日御奉公之人衆、先吉田衆ニ弟子丸播磨守・敷根源八左衛門方・福島次郎三郎、伊集院衆ニ春山又次郎・尾上次男、市来ニ濱田名字、谷山ニ指宿右馬允、此外ニ知覧衆貳人、種子島之番衆ノ中間三人、右衛門大夫殿殿原壹人、同朋壹人、鹿児嶋本田刑部少輔殿原△一人、有川(旧河)「治部少輔中間」一人、瀬戸口藤兵衛▽(旧)中間壹人、吉田ニ僧壹人、弟子丸ノ△中間一人、桑波田肥前中間一人、三原兵部『さ衛門尉』さま門尉中間一人、以上此分ニ(旧而)候、此吹『晩』『ゝゝゝゝ』大殿様吉田へ御光儀アリ、それより軈而平松のことく御光儀あり、

同廿七日、帖佐の四日市にてふし仕方(旧いたさ)させられ候、これによつ□(て)、(旧)同廿六日より南方の人数鹿児島まて被参候、若殿さま(旧)『去廿六日』去廿三日のひるほとより平松へ御光儀あり、鹿児嶋衆・南方の衆者、さる時より打立て平松へ被参候、かくて其夜の子(旧の)刻より、人数(旧二手分られ)二手に分「れ候而、一手をハ」帖佐の川口こからす「と云所ニ伏」られ候、一手をハもりその「と云村に伏」せられ候、吉田(旧の)人数をは「はきのミねふるの栫の下に」ふせられ候、▽(旧)御屋形さま御父者うるを(瓜生)野の△『ふる(旧ナシ)「の」城の』▽(旧)下に御馬をひかゑられ候、同△大隅(すミ)『の人数』▽(旧)者典厩さまめしつれられ△『候て、以上三草』▽(旧)にふせられ候、かくて大隅方よりつりての衆廿人はかり、たかひの下をさしとをり候て、みの時計かけいたし候て、敵二三人打のき候處を、敵軈而つゝきあい候て、きり付候處を、平松の人數の草よりふしをき候て、川をむかひにせきわたし、てきののくへき方をとりきられ候間、てき是を見てむかひの山のことくにけのほり候處を、大すミのふし草方へよりをこされ候て、そく時ニてき拾人計打取られ候、かくてたかりの口よりせめいられ候程ニ、敵もたれきと(垂城戸)をたて、ふせきたゝかふといへ共、御方しきりにたれきとを打破る、うをあはするてきをハ打ふせきりふせ、いちの坂をせめのほつて、たれこしの合戦度々あり、かくて麓の家のこらす放火させられ候、然共二三ケ所有をハのこされ候、かくて本のこ

とくたひの口のことくひらかれ候處ニ、蒲生つゝきあひあひにて、こゝかしこいくさ合戦あり、此日左兵衛佐殿無比類御合戦めされ候、此日打取れ候てき以上貳拾壹人なり、軈而伊集院大和守殿勝吐氣あけられ候、此日御方ニ越度の人數、加世田ニ先宮原名字の珎三といふとうほう一人、大隅へ清水衆野口名字の人、日當山ニさかせ川名字の人、喜入ニ△田代名字▽㊧の人、以上此分也△、手負者『所〻方〻』▽㊧に數を不知△

「四月」㊧之分▽㊧弘治元△

「二日の夜」夜、てき帖佐の本城・新城、同山田の城をすて、『御座をなされ候』祁答院のことくのきそろのよし、子刻㊧尅ハかりてうさの本城の者二人平松へはせ参り、御左右申候、それよりまつ平松の人数のうちに、足はやき人数少〻はせつゝき、城内に被入候、加治木の人数も夜うちにはせつゝき候て、無何事三城御手に参候、　御屋形様者其比平松に御光儀時分にて、軈而三日の明ほのゝ時分、御馬まハり三百ハかりにて、帖佐の本城南『南之城トアリ』本の城に御座をなされ候、鹿児嶋にハ其夜の午時(牛カ)ハかり御左右あつて、若殿様御兄弟御三人、御供の人数五百ハかりにて、〔みの(巳)時ハかりに〕㊧帖佐の南の城に御つきあつて御祝言御申にて候、又四郎殿さま　典厩さま御同心あつて、其勢三千ハかりにて、三日のひるほと蒲生の城ふもとに御馬をよせられ候て、城わたされへきの使僧をもつて被仰「候へと」も、蒲生被申候分者、「此前より」度〻のくわんたひの『かれかた』「く存候へハ城之事ハ」事者太刀のつかにてわた▽㊧し可申之△由被申候間、それよりふもと「の家のこ」らす放『火させられ候』、吉田「の人数」者松山口にさしよられ『候』て、『矢』「射こまれ候」て無何事ひらかれ候、此前て「き方より」とりかため候中こわの栫、三日「の巳時計」火をかけ「にけ」のき候、「やかて吉」田衆・鹿児嶋衆御番被申候、

「同三日申の㊧時如御佳例」伊集院大「和守殿太平の㊧吐氣あけられ時ヲ挙られ候、同晩とのゐときあり」、▽㊧

同四日、山田の城御覧のために　御屋形様御光儀あり、此日南方の人數皆〻はせつゝき被参候、

同五日、しろかねの御陳はらひあり、此日蒲生の松坂の者少々山田のことくくりとられ候、此晩とのゐとき有、

同六日、さるの時計ニ　大殿様御意有、同安□さま御供あり、此日北郷殿より使者被参候、

同七日、さるの時計ニ新栫へ敵百計よせきたり候處を△城衆出▽(旧)合、矢軍あり、かくて指△儀もなく、(旧)(旧)て(きのき候處を、御方しきりニ)うを御心□きりにきりつくれ候▽(旧)程ニ、て△きもち(旧か)具足二三すて候て、「あはてゝ」城内ににけ入候、これによつて「若殿様」新城のふもとまて御つゝきあり、

「同八日の」ひるほと、山田『と』新城とのさかい「にて、蒲生衆」百五十ハかりかけいたし候て、〔人打(旧ナシ)てのき候、これによつ〕□(てカ)「新城の麓まて」もとまてつゝきあり、

「同九日、蒲生へ」御仕役〔の〕(旧ナシ)ために『南方』の衆吉田・帖佐に(旧打)よられ候、

同十日、蒲生へ御衆遣あるへきのよかて、『よし候て』大すミの人数者帖佐のふもとまて打よられ候へ共、てんきなにし(旧なにく)く候て御と〔ゝ〕(旧ナシ)まりあり、此日祢寝七郎殿参上あり、軈而御めにかゝられ候、同十一日の刻(朝)、てき新栫へよせきたり候へとも、させるきもなし、此日龍雲寺御つきあり、同十二日、尾州より御使者あり、此日龍雲寺より蒲生へ使僧被遣候、此日肝付殿被参候、軈而御めにかゝられ候、此晩大殿さま御寄合あり、御座に祢寝七郎殿被参候、

十三日の朝、新栫へてき寄きたり候、御方少々出合、矢いくさあつて、敵にハ手負あまた見へたり、(旧御)此方にハ無何事、此日肝付殿より蒲生へ使僧被遣候、此晩祢寝殿被参候、軈而御目にかゝられ候、十四日のあさ、大殿さま鹿児嶋のことく(旧御)帰宅あり、同又六郎殿「さま御供あり」、此「日午〔の〕(旧ナシ)」時ハかりに北郷次郎殿御つきあり、軈而此晩御寄合あり、御祝物進上分御太刀一腰・御馬一止(旧疋)・鳥目五百疋なり、　若殿さまにも〔同〕(旧ナシ)此分に参候、此日祢寝七郎殿蒲生の松山口に、我手の衆五「拾計にて」矢いこまれ候、

「十五日、蒲生」より肝付〔殿〕(旧ナシ)へ使僧有、「此日北郷次郎殿」御手の衆三百ハかりにて、「蒲生の横尾」口にさしよ

られ「候て矢いくさあり、然」共互に無何事、▽(旧)十六日の朝、蒲生より△龍雲寺▽(旧)まて使僧被遣候、此日△〔祢寝(旧ナシ)〕肝付衆・加▽(旧)治木衆少々相そはれ候て△、蒲生のよこを(横尾)▽(旧)ロニ指よられ候、てき百計△出▽(旧)合候て、殊外の△〔大(旧ナシ)〕『いくさあって』、手火矢にて▽(旧)敵壹△人(旧ハ)いふせられ候て、打とゝめられ(旧候)、御方にハ無何事、此日新栫御覧の▽(旧)ために△若殿さま人数千ハかり御供にて御出あり、▽(旧)十七日の晩△、祢寝殿・肝付殿へ御寄合▽(旧)有、十八日、相△良殿より使僧被参『候』、▽(旧)やかて御目にかゝられ候、此日溝邊△へてき二百▽(旧)計にてかけのふし△『仕候ハ、』下『候』(旧と)者二人▽(旧)打てのき候△處を、城衆出合つきを『く』▽(旧)られ候へ共無△何事、御方手負一人あり、▽(旧)軈而越度仕候△、これによって帖佐衆▽(旧)ことくくつゝかれ候△

「十九日、若殿様」鹿児島のことく御「帰院あり」、此日龍雲寺より蒲生へ使僧被遣候、

廿日、蒲生より龍雲寺へ使僧被(旧申)上候、此日入来院より肝付殿へ使僧あり、蒲生の身(旧く)しやうに付なり、此晩祢寝殿・肝付殿・北郷次郎殿御めにかゝられ候、

廿一日、祢寝七郎殿御暇被申候、此日山田の足輕(カル)、蒲生うらにてて き一人打取候、

廿二日、山田の足輕二十三人梅北方めしつれ候て、御めにかけられ候、此晩北郷殿御宿に御光儀あり、御座中半に御馬御給にて候(旧候、即)刻、北郷殿よりも御馬進上候、

廿三日、北郷殿御暇御申にて候、

廿四日、肝付方へ御一筆被遣候、御使者新納刑部太夫(旧輔)殿・阿多若狭(久鎮)守殿、此日肝付方よりも御一筆被上候(旧候、則)刻、御馬一疋進上申(旧被申)され候、此日祢寝殿、種子之番衆三人御暇申(旧被申)され候、此日新栫へ蒲生衆寄来り(旧ニ)候て、吉田衆三人おちと申(旧被申)され候、一人ハ二階堂殿次男、一人ハ村田越(経定)前殿殿原、一人ハ下ゝ者、

廿五日、蒲生衆新栫之野頸にて馬取候て退『候』、『従是』御提『〻〻』御續にて候、

廿六日、帖佐之寺師名へ敵出候、従是御屋形様御續(旧取)ニ而候、自其帖佐之新城之覧之ために『〔と〕(旧ナシ)御出あり、此

晩新栫之』麓まて敵来候へ共、指事なく候、此日鎌田刑部さま門殿帖佐之内城へ相移られ候、此夜蒲生之『あ『さ衛門尉殿』(旧)『ゝゝゝ』はら家』「やき候」、

▽(旧)

廿七日、吉田へ蒲生衆かけ野伏仕候て、吉田衆九人打取候、桑波田主馬・蓑輪・遠矢方、此外ハ下ゝ者ニ而候、是により候て、　御屋形様　典厩様新栫之ふもとまて御つゝきあり、此日肝付衆待野伏候へ共無何事候、此日甑島殿より、同名加賀守殿年頭之御祝言申上候、

廿八日、肝付殿假屋へ　御屋形様御光儀ニて候、

廿九日、新栫之△『おもて』▽(旧)野くひの垂まて寄候へ共△、『城』衆ふせられ候へ者、こと〳〵く手おひにて『ゝ』(旧か)(旧共)成候て退候處ヲ、吉田衆つゝきあわれ、松山口まてつきをくられ、敵壱人打取候、此方にも吉田衆長田八郎右衛門小者一人おちとにて候、

卅日、上原長門守新栫へ御使者ニ御遣にて候、

五月　高寺に(旧ナシ)〔ノ〕分▽(旧)元年△

一日、山田衆高方にてに待野伏候處ニ敵来候、楯二三ゝゝゝゝ

条追落れ候、『同』日本城衆待のふし候へ共、何事なし、二日、佐多殿・左兵衛(旧ナシ)〔尉〕殿駒御上にて候、此晩蒲生『之』『ゝ』へ八幡之御馬場より、帖佐之本城之ことく光物アリ、此日串木野へ敵よせ来り候へ共、無何事のよし御左右アリ、

三日、法印様御越ニ而、御祈禱之御大般若アリ、此日伊集院治部少輔殿・新納刑部大夫(旧太輔)殿吉田へ御使者ニ被越候、此日肝付殿へ伊作野ゝ駒(旧之野之駒)被給候、此日山田之足『七人出候而』輕七人出シ、甑浦にて敵一人打取候、此夜新栫之麓より御嘉例□(旧の火)御ともしにて候、四日、山田へ敵かけ野ふし候て人一人、馬三疋取(旧ナシ)〔候〕てのき候、五日、新納刑部太夫殿(旧輔)加世田へ御使者被越候、六日、此曉小麦田にて赤塚方・北村方耳聞ニ出候て、敵壱人打捕候、相残候二百計伏候之由、注進にて候、従是御屋形様新城之麓まて「御馬被出候へ共、敵夜内に退候間、無何事御帰候」

▽(旧)

一七日、典厩様日當山へ城御給にて候、

一八日、北郷殿より念佛寺使僧ニ被参候、おなしく御東より御使者有、

一九日、左兵衛尉殿為ゝ代（「本マヽ」）と加治木へ御越有、森兵部一七御祈禱之御札守上候、

一十日、　若殿様より御使者アリ、此日又四郎殿様山田城之覧之ために御出ニて候、

一十一日、喜入野ゝ駒新正八幡へ御祈進候、蒲生より山田へ落人来候之由、以使僧被申上候、此日加世田之法泉寺庄内へ御使僧ニ被越候、

一十二日、新栫之△人衆、蒲生之横（旧尾）口之垂三重被取破候へ共、敵不出合候間、指義（旧も）なし、此日、　若殿様吉田へ光儀（『御光儀』）にて候、

十三日、伊集院之平等寺泉へ御使僧ニ被越候、此日城ケ崎之栫御とらせにて候、此日鍬初三原右京亮、此晩吉田之ことく御屋形「様」御光儀アリ、

十四日、吉田へ敵寄来候のよし聞得候て、軍衆ヲ被寄井手之河内、寺山王（旧王）子の山ふせられ候へ共、何事なし、此日典厩様吉田迄御つゝきアリ、

十五日、祢寝殿より使者被上候、此日若殿様より吉田之若宮へ瀬崎野（旧ナシ）「ゝ」駒御祈進候、

十六日、法泉寺庄内より御帰ニ而候、此日谷山之廣徳寺肝付へ御使僧（旧ナシ）「ニ」被越候、

十七日、城ケ崎の栫之御番、右衛門太夫殿御當にて（旧ナシ）「候」、岩釼座主大明神へ一七日参籠之由被申上候、

十八日、龍雲寺より蒲生へ御使僧被遣候、

十九日、京都之日吉太夫吉田へめしよせられ（旧ナシ）「候て」、御目ニかゝり『候』、此日福昌寺監寺加世田へ御使僧ニ被越候、

「廿日」、従加世田御使僧アリ、

「廿一日」、御屋形様鹿児嶋のことく「御帰宅有」、此日郡山へ落人（旧）「候之由被申上候」、

一廿二日、吉田之わき田へ敵五百計ふし候ヲ、耳聞人衆聞付之御左右申され候、従是　若殿様人衆めしつれられハ御出候へ共、敵のき取候間、無何事候、此日敵ねすミか尾迄来候、新栫之人衆被出合候へ共、指儀茂なし、此日北郷殿より蒲生之ことく両使僧被通候、

一廿三日、何事なし、

一廿四日、山川へ△蒲生之者唐船乗（『イ房乗』）候て、「十人来候」ヲ（『シレス』）

打つめ候よし、使僧以頴娃殿被申上候、此日北郷殿より使僧ヲ以北原出頭之由被申上候、此日みそへ（溝辺）へ敵かけのふし仕候て、以下『の』者二人打候てのき候よし、御左右有（旧ナシ）〔り〕、

廿五日、若殿様吉田衆三百計めしつれ候て、松山口ニて伊集院大和守殿（旧敗）軍役アリ、矢合ハ木脇大炊助、

廿六日、何事なし、

廿七日、蒲生へ伏仕方たくまれ候へ共天氣なにし（旧なにしく）く候て被留候、此日山田より松坂にて、名字者二人打捕候よし、御左右被申候、此晩吉田之くきのうとニかけのふし候へ共、何事なし、

廿八日、何事なし、

廿九日、何事なし、

六月分▽旧元年△

二日、従蒲生新栫へ、山下名字者落候て参候、伊東方より手火箭（旧矢）・塩焙（旧硝）被籠之由被申候、『候』由『申候』此日祢寝之番衆御目ニかゝられ候、

三日、東俣之足輕十三人にて、入来之はると云村打破（旧候て）□敵八人打取候、「彼人衆」吉田へ参候て、懸御目ニ候、「八日、ねすミ」尾ニ敵出候ヲ、新栫之「人衆出合候て」松山口ニおひこまれ候、▽旧十日、吉田衆・新栫之△人衆松山口ニ指▽旧寄ニて候、手火やいられ候、此晩若殿様如鹿児島御帰宅ニ而候、

一十一日、敵吉田之西之宇都ニ而一人打候てのき候、城衆出合候てつき候へ共、何事なく候、

一十二日、新栫之野くひへ敵五百計出候て、馬十三疋取候てのき候、従是栫衆・吉田衆松山口まてつかれ候へ共、無何事候、

一廿九日、新栫之麓ニ敵伏候のよし、使僧以被申上候、自是　御屋形様御父子以上宮裏迄御續候へ共、何事なし、

七月分元年

一三日、吉田之野くひニ火事△出来候、▽旧従是蒲生衆三百計△〔差候（旧ナシ）〕あまつゝミ▽旧まて出来候△、栫衆被出合候て矢▽旧軍有△、鹿児島衆蓑輪次郎五郎▽旧手火矢ニ△あたり候て落とにて候、吉田衆つゝき合れ

候て、手おひあまた候へ共、なに事なし、

八月分▽(旧)元年△

九日、帖佐之餅田にて下々者一人取候てのき候(旧口)ヲやかておひ落(旧さ)れ候て、敵一人打捕候、

十一日、十一夜吉田之くきの聞都(『宇都』)ニさくかりニ敵参候(『ゝゝ』)ヲ、耳聞衆聞付候て、てき二人打取候、

十二日、郡山衆入来へ仕役にはへの山を被越候處ニ、敵此方へ仕方ニ越候處ヲ見付候(旧之)て、河殿へ注進候て、つき送られ候〔て〕(旧ナシ)敵一人打取候、其外持具足五十五おひ落れ候、同日串木野之衆・市来之人衆少々談合以、千臺之くミ崎・塩屋破ニ被出候て、人衆ヲ二手ニ分候て、舟くかより被指寄候へ共、敵『早聞付候て』ふせ「き候間、塩屋に火箭射付候て、やきくづされ候、湊の足輕七八人手おひ候、くかよりの人衆ハ敵二人打候て、無何事のき候」

▽(旧)

一十七日、蒲生衆新栫之籠迄百計来候、味方被出合候て箭軍あり、敵一両人射ふせられ候得共、打留ハなく候、

一十九日、帖佐之本城衆・山田衆蒲生ふもと近く出られて、住吉あたり之さく少々はらイせられ候處ニ、北村衆續合候て、寺師あたりまてつき送り候へ共、無何事候、是ニ仍新栫之人衆横尾口ニ指寄候て矢軍有、吉田衆者松山口ニ指寄候て矢軍有て、味方手おひ五六人有、此内壱人ハ落とあり、是ニよつて　御屋形様宮裏迄御續有、

一廿三日、蒲生衆手計ニ而、吉田久木宇都の作敷候、城衆被出合候へ共、指儀もなし、従是　御屋形様御父子中村まて△御續▽(旧)ニ而候、此日郡山より入△来へ仕▽(旧)方へ罷出候て、敵三△人打取候、此外ニ一人生捕ニて参候のよし、御左右アリ、

廿七日、蒲生より落人来候て、廿八日朝、吉田へ衆遣のよし申候、従是鹿児嶋衆夜内ニ吉野ゝ原まて被打出(旧罷)候へ共、無何事候、

卅日、山田へ敵寄来候て作敷(『散』旧敷)候、従是城衆被出候て、『頻』ニさハ、れ候(旧ら)間(旧而)指義もなくのき候(旧し)(『ゝ』)處ヲ、梅北方足輕ヲすゝめ被切付候程に、鳥啼(ナキ)と云所より敵打初候て、松坂之〔城之〕(旧ナシ)野頸まて被切付、敵以上十九人(旧崎)

(旧ナシ)『被打取候』〔程〕打取候『〻〻〻』従是吉田衆・新栫之人衆横尾口ニ指寄候而矢軍候へ共、互ニ何事なし、

九月分

十三日、蒲生横尾口ニつり仕役たくまれ候へ共、敵不出合候間、何事なし、此晝ほとてき百計新栫之麓まて来候、城衆被出合候て、横尾まてつきをくられ候へ共、なに事なし、

十八日、吉田之足輕久末口ニかけのふし仕候(旧ナシ)〔て〕、敵一人打取候、

十月何事なし、

潤十月分

廿四日、此曉新栫之人『人衆』茂『〻』横尾口ニふされ候、敵聞付候て伏草ヲとりまき候て、時をあけ候、みかたこゝかしこ打破れ候(旧て)□、一人もなに事なくのきとられ候、従是(旧ナシ)〔ニ〕吉田まて　御屋形様以上　御父子御つゝきにて候、

廿五日、吉田衆五人にて蒲生横尾口にて敵二人打取『候』候、其外ニ十五六之童『子』一人生捕候てのき申候、『〻〻』

十一月分

十六日朝、新栫之人衆伏仕役たくまれ候、てき少〻出合候へ共、ふし草まてハきき(旧不来)らす(旧ニ)候處(旧ナシ)〔て〕、味方伏起(旧ナシ)〔られ〕候て、横尾垂ニおひこまれ候『〻』、垂越之合戦『候』、従是開れ候處ニ、敵又横尾まてつき来候て、味方ニ手おひ廿人計(旧に候)アリ、此『日』内吉田衆本田宗左衛門手火やニあたり候て、やかて法度申さ(旧れ)『〻』□候、伊集院掃部助殿深手にて候、

卅日、山田之足輕松坂浦(旧より)にて敵壱『人』打取候、

十二月分

五日朝、新栫より狩野伏に出られ候處ニ、敵少〻出合候て矢「軍」アリ、みかた横尾口迄おひこまれ候所ニ、敵之草より三千計伏起候(旧ナシ)〔て〕、切かゝり候ほとにみかた無『勢』にて、如城ひらかれ候ほとに、はけしく『候』とて合戦有て、ミかた(旧に)□手おひ死人あり、先下大隅之番衆前田長門方打死候、其外川「野」邊衆蒲池方中間一人、鹿児嶋衆村田与五郎方中間一人、此分も敵にも一両人死人候へ共、味方『ま』けいくさにて候(旧ナシ)〔之〕

間、しるしハとらす候、
十二日、山田之足輕蒲生浦にて敵一人打取候、
廿八日、郡山之足輕入来堺ニて敵一人打取候、

弘治二年丙辰

正月分

酉日 朔日朝、吉田人数蒲生のひさせ〔ロ〕(旧ナシ)に出られ候處ニ、てき出合候て、互ニ手火矢射られ候、てきあまた矢ニあたり候、御方にハ無何事、

牛日 五日、さ(旧くる)の時ハかり、吉田之足輕衆松山口のふか野に火を付候、これによつて新栫の人数少々よこ尾まて被出候、てきも少々出合候へ共、いくさなとハなし、

午日 十日の夜、新栫のおもて〔の〕(旧ナシ)ロよりこミや仕候、しかれとも指義もなし、

未 十一日『の』ひるほと、新栫の野頸の遠見の尾まて、敵六十ハかり来(旧り)候へ共、指義(旧義)もなく候處ニ、吉田衆つゝかれ候て、『さゝか尾』さか尾あたり矢いく(旧さ)あつて、出羽守「殿」殿原一人越度「ニ候」、其外無何事、

牛日 廿九日、吉田の足輕衆ひさせ(旧久木せロ)ロにて敵一人打とり候、

刁〔日〕(旧ナシ)卅日、吉田の足輕衆三十計にて、蒲生のをもて大渡ニて、かけ野ふしにて敵一人打取候、両日ともに弥八兵衛与申御中間高名仕候、

二月(旧之)分

子日 十日、吉田の衆二十計にて、蒲生の荒比良くちのたれ二重取やふられ候て、番屋に火をかけられ候、てき出合『イヤカテ』あひ候へ共、指義(旧義)もなし、

刁日 十二日、吉田の衆百ハかりにて、蒲生の岩上『一本ナシ』のにてみ『ゝ』『ゝゝ』きり一人打取(旧ら)れ候、殊外はたらき(旧ニ)候て、帖佐衆一両人すりてをハれ候、城衆つゝきあひ、吉田のさかひまてつき来り候へ共、指義(旧義)もなし、此日帖佐の本城の足輕三人、蒲生うら「にて」敵三人打て来り候、

卯日 十三日、山田の人数蒲生松坂の栫へつり仕役たくまれ候て、敵「三」人打とられ候、

午 十六日の朝、てき五百はかり新栫のふもとまて来り候へ共、指義(旧義)もなく候、此晩むくの瀬といふ所にて下々者一人、てきより打取候、

未日 十七日の夜半ハかり、村田越前守内衆濱田善三郎、蒲

生より落来り候者二人、案内者〔一人〕(旧ナシ)　いまいたの栫(旧ひ)へしのひ入、家十四五燒くつし候、それより無何事、新栫のことくのき来り候、

申日
十八日、山田の足輕五人北村〔の〕(旧ナシ)ふもとに出〔候〕(旧ナシ)て、敵二人打取候、

酉日
十九日、堺目「さませつきこへ候て」、御屋形さま御父子

『以』
已上、吉田のことく御つゝきあり、

『ゝ』

『牛日
廿三日の吉田衆、蒲生のつちやくらに忍ひ入あかられ候て、番衆四人打て、番屋に火をかけ、何事なくひら(旧ひ)かれ候(く)』

『刁日』

『午日
『ゝゝ』
廿四日、新栫の人衆よこ尾ロニさしよられ候て、はくさく少〳〵ちらされ候、てき出合候て〔矢〕(旧ナシ)いくさあり、帖佐の衆もすミよしの川こしに矢いくさあり、しかれとも指儀もなし、これによつて　御屋形さま鹿児嶋の人衆五百計御供にて、吉野のハ『ら』まて御つゝきあり、

三月『之』分▽(旧)二年△

刁日
七日、蒲生へ御衆遣あり、御はたの役者梶原方、さしてハ瀬戸口藤兵衛、御太刀者阿多源三郎方、御馬者伊作野の栗毛なり、同　若殿さまの御太刀者本田弥六郎(旧方)、御馬者市来野(旧く)つき毛なり、御仕方の趣者しやうかうあんの原のはくさくハらはせられ候、此日　御屋形さま御父子御分者、よこ尾に御馬をよせられ候、かくて八幡の御山のあたりまてさく不残ちらされ候て、すミよしあたりまて少〻ひらかれ候處に、北村衆御つゝ「き」あひ候て、原中までつき来り候處を、三千ハかりにて川よりむかへまてをつめ(旧追詰)られ候へ共、てきあしはやくにけ候間無何事、それよりもとのことくひらかれ候ほとに、いまいたロにて合戦あつて、御方あまた越度あり、まつ吉田衆嶋田隠岐守、帖佐衆川田高馬方、南方田布施に平田小三郎方、鹿児嶋江伊集院大和守殿殿原、加治木名字者伊地知筑前守殿原、遠矢名字の者、喜入衆に長田名字の人、大すミへ典厩さまの御中間一人、ミや内に桑波田方の中間一人、帖佐に御中間孫七兵衛、已上此分候、其外手負あまたあ

『内主』
『ゝゝ』

り、此日北郷殿御供あり、同日置伊勢介方御供被申『候』、此日吉田に御滞留あり、

辰日
九日、山田の足輕七人出候て、祁答院大村とゆふ所にて下々者四生とつて来り候、

卯日
十八日、帖佐衆五百計にて松坂の城にさしよられ候て、火矢いつけられ候へ共とりさやしそろ『き』間、指義(旧儀)もなくひらかれ候處に、てき(旧三)二百計にてつき来り候て、御方にもてきにも手負あまたあり、

申日
廿三日、溝邊に北村(原)衆・菱刈の衆已(旧以)上六千計よせ来り候て、はくさくちらし候てひらき候處に、加治木衆・長濱衆つゝきあひ、つきをくられ候ほとに、御方に三人越〔度〕(旧ナシ)あり、まつ長濱へ足輕一人、加治木に一人、みそへに一人此分『候』、此日帖佐くちにも、蒲生しふや衆二千計『にて』よせ来り候へ共、指義(旧儀)もなし、

〔西日〕(旧ナシ)廿四日朝、新栫の野くひまて敵来り候へ共、指儀もなし、

四月之分

亥日
四日、『日』當山に敵出候て馬とつてのき候處を、城衆出合きりつかれ候ほとに、原中にていくさあつて、御方に地(旧池)上名字の人越後(度)被申候、此外『ニ』今一人越度申(旧被申)され候へ共、たれともなし、

五月之分▽(旧)二年△

酉『日』
三日の夜、溝邊の城内に北原方に心あわする者あつて、夜半計に中城にてきを引あけ候処に、肝付名字の人其外無比類はたら『か』れ候て、きりかへされ候、〔此日〕(旧ナシ)取てかけられ候頸二十二(旧三)也、其外手負数をしらす〔候〕(旧ナシ)、てき方『にかへり候て、あまた越度の』よし聞候、此日肝付三郎『五郎』方高名つかまつられ候、其後二三日あつて、敵方心あわせ(旧し)候、竹下名字其外(旧く)しやうかひさせられ候、

六月之分▽(旧)二年△

刁日
十五日、山田(旧へ)にてきかけ野ふし仕候て、名字の人一人越度被申候、

酉日
二十二日、山田にてき来り候て、下々〔の〕(旧ナシ)者二人打てのき候、城衆つゝきあひつきをくられ候へ共、無何事(旧候)、

戌日
廿三日、吉田衆三十ハかりにて待野ふしせられ候處ニ、てき六十計来る候『り』を、十一人打とられ候、此内三人ハ名字の者なり、此分鹿児嶋『へ』御左右あり、

七月之分　無何事、

八月之分　無何事、

九月之分

酉日
五日、松坂又『の』野『ゝ』くひにてつり仕方たくまれ候て、敵三人打(旧伏)せられ候、梅北宮内左衛門尉方一人打れ候、山田衆細田(旧五)後藤兵衛方一人、鹿児嶋衆福嶋新左衛門(旧ナシ)〔方〕一人、以上此衆三人高名被申候、其比山田に御屋形様御光儀時分ニ而、松坂の『城の』むかへの長尾まて御馬をよせられ、城の躰御覧あり、此日の勝吐氣は鎌田刑部左衛門方、此日典厩様『又四郎殿さま』御供あり、

十月之分

戌日
朔日、吉田衆・新栫の人衆談合(旧ニ)候て松山口ニつり仕(旧ナシ)〔方〕たくまれ候て、敵一人打れ候、御方にも手火矢ニあたつて川上殿内衆一人越度あり、其時分若殿さま吉田(旧へ)に御光儀時分ニ而、さゝか尾まて御馬を出され候、

亥日
十四日、溝邊へ北原衆五六千計にてよせ来り候て、谷といふ所をやふらん仕候へとも、御方しきりにふせきたゝかひ候間、合戦度々あつて、敵七人打とゝめ候、此内六人者名字の者なり、御方ニハ手火矢にあたつて、足輕二人越度仕候、『無』其外何事、「本ノマヽ」

卯日
十八日、蒲生松坂の城に衆遣有へきために、ひつし刻計より　御屋形さま帖佐のことく御光儀あり、同　若殿さま者山田のことく御光儀あり、

辰日
十九日、松坂の城に御衆遣あり、其趣者又四郎殿さま鹿児嶋衆・〔山田衆〕(旧ナシ)御供ニ而、西の口にさしよられ候、野頸〔の〕(旧ナシ)口にハ大すミの衆典厩御大将にてさし『よ』寄られ候、水のての口にハ左兵衛佐殿南方の衆めしつれられ候てさしよられ候、吉田衆・伊集院衆をは、北村之衆からみのために二草〔に〕(旧ナシ)ふせられ(旧候)、かくて明ほのゝ時分、三方よりときをあハせてせめられ候、城(旧衆)中ニも祇答院の番衆、其外三百計ニ而ふせきたゝかふといへともかなはす(旧不叶)、『則』却時にきり「掛れ候」、『ゝ』

西の口にて又四郎殿さま御合戦めされ候、其外こゝかしこにて合戦あり、此日打とられ候敵、〔まつ〕(旧ナシ)松坂の地頭中原加賀父子三人、祇答院番衆に□(旧名)字の人十一人、此外とつてかけられ候くひ四十二なり、其外に〔こゝ〕(旧ナシ)かしこにきりすてられ候死人、已上(旧以)此日九十二なり、北村口にのふし草にもてき来り候を、村田越前守の内衆濱田喜三郎てき一人打とゝめ候、それより上村といふ所をやふられ候て、放火させられ候、かく(旧て)北村の城ちかく　若殿さま人衆三千計にて、御馬をよせ候て、北村の城わたされ(旧ニわたすへき)へき『の』よし、以使僧を被仰候へ共、さしこたへて申候間、それより　御屋形さま御父子已上(旧以)内城に御座あつて、如〔御〕(旧ナシ)佳例の伊集院大和守殿勝吐氣、大(旧太)平の吐氣あけられ候、此日御屋形さまの御太刀の役者阿多若狭守、御馬者伊作野の栗毛なり、おなしく若殿さまの御太刀〔の役〕(旧ナシ)者鎌『御』田神五郎方、御馬者市来野〔ゝ〕(旧ナシ)つき毛なり、此日此『ゝ』方ニ越度の分、山田衆上床衆・大迫兵八郎方此分候、此夜　若殿さま者内城に御番あり(旧也)、　御屋形さま者山田のことく御馬を入られ候、

巳日
廿日、松坂の人数うるしといふ所をやぶらんかために、人衆千ハかり出られ候〔て〕(旧ナシ)、敵三人打とられ候、其内壱人ハ名字の者なり、かくてこゝかしこに候『村』こと〳〵く放火させられ候、其外無何事、

十一月〔『之』〕(旧ナシ)分

申日
五日の朝、蒲生のをもてもりの(旧森園)といふ所にて〔つり〕(旧ナシ)仕方たくまれ候て、敵三人打せられ候、いつれも下々者なり、『御』此方に『ハ』すりてあり、其時分山田に　御屋形さま御光儀時分にて、すミよしまて御馬を出されて候、此日勝吐氣鎌田刑部左衛門尉方(旧事)、

酉日
六日、ひかしまたあつちにて『き』来り候て、下々者二人打候(旧の)よし、吉田より御左右あり、

子
九日、〔日〕(旧ナシ)溝邊より敵方へ仕方に罷出候處に、敵も此方仕〔方〕(旧ナシ)のためにに来り候ほとに、中途ニて行あひ、殊(旧之)外のいくさあつて、敵四人打とゝめ候のよし、御左右あり、

辰日
廿五日、蒲生の荒(フラ)比良に御陳とらせられ候、此日御は

たの役『者』梶原方、さし手者瀬戸口藤兵衞、此日の御鉄の役者本田丹波守、御馬者瀬崎野ゝ月毛也、かくて吉田之人数者、其夜の丑刻より御陳へ入られ候、若殿さま者辰ノ刻ニ御陳へ御出（旧な）あり、（旧是）其日のくハそめ（旧ナシ）〔者〕三原右京亮、軍神観請（ママ）ハ岩切三河守、くハんしやうの時ハ伊集院大和守殿、矢合ハ木脇大炊助、御陳の人衆ハ鹿児嶋衆・谷山の人衆・市来の『衆』・吉田の人衆・喜入の衆・頴娃衆・下大すミの衆・こしきの嶋の番衆、（旧以）已上此分にてかためられ候、かくて敵御方互ニ手火矢はなされ、ときの聲ことハたゝかひおひたゝし、此日御屋形さま山田より御馬を出され候、御太刀の役者阿多若狭守、めしの御馬ハ伊作野ゝ栗毛なり、御供の人衆者大すミの衆三千はかりにて、蒲生の面に御馬をよせられ候て、若（旧き）衆少くとたれ「の本まて」けうまてさしよつて矢『いくさあり』、御屋形さま者くろせとより荒比良に御光儀あつて、御陳「の躰」静に御覧あつて、山田のことく御馬を入られ候、此日松坂の人数も北村の野頸にさしよられ候へ共、無何事、此晩　若殿さま吉（旧ナシ）〔田〕のことく御馬を入られ候、

巳日
廿六日、蒲生のかた中の衆少くはせつ『と』ゝき来り候へとも、指儀もなし、松山口に『ミ』御陳と互に手火矢はなされ候、其外無何事、

午日
廿七日、尾州より御使者として平田出羽守被参候（旧ナシ）〔而〕、軈而若殿さまの御目にかゝられ候（旧て）く、帖佐のことく御暇被申候、

未日
廿八日、和州・遠州帖佐のことく越候て、尾州よりの御使者『同心あ』つて、山田のことく御参りあり、『使者』御屋形さまの御目にかゝられ候、御意趣者蒲生に御意見のためなり、軈而両使僧をもつて蒲地（生）ニ尾州・讃州の御意趣申わたされ候、しかれ共御意見蒲生せ（旧しやう）□（う）ゐん申されすして、出羽守十二月五日との日御暇被申候、

十二月之分

『刁日』
五日、蒲生のうち馬立といふ『所に御陳とりあり、御（旧太）大将者　典厩さま、此日くわ初者三原右京亮、観請のときハ伊集院大和守殿、陳衆者（旧ナシ）〔先〕大すミの人衆・

川邊の人衆・伊作の人衆・知覧の人衆、(旧以)已上此分ニ而かためられ候、此日御屋形さま山田より御馬を出され候、其日の御太刀の役者高崎藤六方、めしの御馬は栗毛なり、かくて御陳御覧あつて、上「村と」いふ所ニ御馬をひかへ▽(旧)させ△られ候處ニ』、さるの刻計てき三百ハかりにて、御はたもとにかゝり矢いくさ少々はしまり候処ニ『あら』ひらの御陳衆松山口に火矢射付られ候、これによつて敵城内に引入候、それより新栫のことく御馬を入られ候、新栫ニハ左兵衛佐殿・南方の人数にて御番あり、

『卯日』
『六日、若殿様馬立の御陳御覧のために御出あり、此日よこ尾ニ而御中間加藤越度仕候、

午日
九日、帖佐のはるけの山ニ而下々者二人てき方より打とり候、

巳(日)(旧ナシ)
廿日夜、新栫の衆よこ尾口「の垂」二重燒くつされ候、

未日
廿二日、本城といふ所を菱刈方より陳にとりかため候、此夜荒平(比良)の御陳衆松山口のたれ燒候、無其外何事、

(申日)(旧ナシ)
廿三日の夜、山田のきやうしこし(旧き)浦にしゝ待に出候處にてき五六十計七谷のことく通(旧ナシ)〔り〕候をしかゝ見さため候て、馬立の御陳其外方々に此分注進申候間、其夜のあかつきよりてきの退へきかたに人衆まはされあひまたれ候處ニ、梅北方人数(旧衆)三十ハかりニて七谷のふし草にかゝられ候、てきたまらすにけのき候處を』ふるせとゝいふ山にをつゝめられ候て、敵十七人打とゝめられ候、かゝる處ニ松坂の▽(旧)城の△面にてき千はかりにてよせ来り(旧ナシ)〔候〕、川上殿御大将にて北村の城ちかき所まて▽(旧)つき送られ候て、軍合戦有て△、則時にてき六人打とられ候、(旧以)已上此日打とゝめのてき廿三人なり、まつ蒲生衆五六人、祁答院衆五六人、其外ハ皆菱刈の人数なり、此日高名の人数をゝしといへとも、田布施衆辻大蔵事無比類はたらかれ候、此日の勝吐氣者鎌田刑部左衛門尉(旧ナシ)〔方〕、此日御方に大事(旧の)手負多く候へとも、無何事、

廿九日の夜、新栫人衆松山口のたれ一重とられ候、同夜荒比良よりもこみ矢いさせられ候、

（別紙）

「弘治三年丁巳正月より後ハ惣而別紙に寫置、三月ハ正月の誤なり、本書に正月とありしを三月と書改しと、今書に見得候、間違なるべし、正月是なり」

弘治三年丁巳三月之分『本書三月ヲ正月トアリ』

御屋形さま新栫にて御越年あり、　若殿さまハ吉田にて御越年あり、

『卯日』『朔日』、若殿さま新栫出あり、御太刀の役者伊集院孫太郎方、めしの（旧ナシ）〔御〕馬は瀬崎の（旧ナシ）〔丶〕月毛なり、（旧此）□日馬立の御陳衆麓の（旧と）原に狩野伏に出られ候處に、敵少々出合候て、互に手火（旧矢はな）□され（旧た）候、敵に渕上隠岐守と云者手火矢にて即時に射ふせられ候處を、梶原藤七兵衛方軈而打留候、從是敵續合、二俣川にて殊之外矢軍あり、其時分敵城の麓に火事出来候而、家少々燒候、此日の勝吐気は鎌田刑部左衛門（旧ナシ）〔尉〕方、從是　典厩さま新栫之ことく御（旧参り）□、此日七曲の陳衆』▽旧松山口の堀越ニ△『互ニ手火矢』▽旧離れ候、吉田△『衆久』旧▽木田△『權』▽旧兵衛尉手火矢ニあたり候て越度申候、

巳日
一三日、　御屋形様馬立之御陳江御光儀、正好庵之原を直ニ御通り候處ニ、敵少々出會、河越ニ手火や互ニ離候、御方ニ手負壹両人有、

戌日
一九日、此夜馬立之陳衆いまひたの栫ニ火矢を射付られ候て、家廿計燒くつされ候、是ニ新栫之人衆向村迄指寄れ候得共、指儀もなし、

卯日
一十三日、新栫之人衆松山口ニさし寄れ候、番家火や射付られ候へ共、敵其用心仕候間、何事なし、

未日
一十七日、人衆少々もよをされ候て、尾上栫あたりにてつり仕役たくまれ候へ共、指義もなし、たかひニ計火箭はなされ候て、敵あまた射ふせられ候へ共、注をも取れす候、味方ニも手負二三人有、此内ニ吉田衆河内玄蕃亮一人おちとニて候、是ニよつて馬立之陳衆も河こしに矢軍せられ候得共、指儀もなし、

寅日
一十二日、敵百計篠尾あたりに伏候て、晝程計かけ出し、遠見の人衆おひこミ候て、松山口之ことく退取候所

を、新栫之人衆出合、つき送られ候、荒平之陳衆も續
▽㊧かれ候間、敵春山口之ことく△『退入候』、
子日
一廿二日、明早時分馬△『立之人衆菱』▽㊧刈陳之麓△『まて出られ候處ニ』敵の外伏『ニ行』合、させる儀(㊧義)もなく(㊧し)ひらかれ候、此日敵五百計にて馬立の陳之麓狩野伏仕候、此日新栫之人衆松山口に指寄れ候(㊧て)(㊧手)百計火矢(㊧く)離れ候、此夜吉田之足輕五人尾上栫ニ▽㊧忍入にて、家二三燒くつし候、
巳日
一廿七日、　大殿様之御使僧として田布施之常珠寺蒲生へ御越候、
午日
一廿八日、蒲生より新栫之麓まて使僧あり、

二月之分三年

申日
一十二日、吉田之堤津留と云所まて敵拾人計かけ出し、した〳〵の者三人取てのき候、足輕衆馳續候へ共、何事なし、
酉日
一十三日、馬立之陳衆少〻狩野伏ニ出れ候處ニ、敵出合、矢軍仕候、味方より河を向へに追渡れ候處ニ、菱刈陳より三百計續合、以上人衆五百計ニ成候て、味方を自河向へにおひわたし候、是より味方無勢にてひゝかれ候を、敵しきりに切付、爰かしこニてはけしき軍有、從是新栫之人衆續、近き敵を又河よりむかへにおひ渡れ候、敵味方手おひあまた有、此之内帖佐衆鹿島郷兵衛尉一人おち仕候、新栫より續人衆四五人手負有、此日荒比良の陳衆畠田へ指△『おろされ、手こわき矢(㊧候)有て、(㊧軍)手』おひ二三人有、敵ニハ當座ニ越度二三人見(㊧へ)『之候』、
戌
十四日、此夜吉田の若衆卅計にて、松山口ニ籠(㊧ナシ)〔矢〕いられ候、
巳日
廿一日、荒比良陳衆見切(㊧ナシ)〔ニ〕出られ候て、畠(ハタ)田にて『八』敵一人打取れ候、安田名字之者也、味方ニ小野江右衛門尉矢被射付候ヲ、濱田勘解由兵衛打取候、此日之勝『時』三原右京亮、
▽㊧
申日
一廿四日、吉田之足輕卅計出候て、しらハ河内と云所ニ而馬三疋取てのき候處ニ、北村衆續合、山上山と云所までつき来り候へ共、なに事なし、

戊日
一廿六日、松坂之人衆五拾計ニてかけ橋越にて、馬壹疋
とられ候、其外敵の持具足多々追落され候、

三月分三年

巳日
一三日、此夜馬立之陳衆北村之麓之むら打破れ候而、敵
三人被打取候、其外家廿計放火させられ、何事なくひ
らかれ候、

酉日
一七日、北村麓にて人壹人生捕候て如新栫之来候、

戌日
一八日、馬立之陳衆北村城近く行伏せられ候て、敵貳人
打取れ候、其外ニ馬貳疋取てのかれ候處ニ、城衆出
合、矢いくさ有て、何事なく互ニひらかれ候、此夜吉
田之足輕、馬立之衆少々、松坂衆少々出合候て、敵方
之内掛之橋を落れ候、

亥日
一九日、馬立之陳より梅北宮内左衛門尉ハ新栫之ことく
参られ候處ヲなはひ松ニて、敵五六人かけ出し候得
共、為何儀もなくのき候處ヲ、新栫之衆續合、いまい
たロニおひこまれ候て合戦有、味方ニ大寺大炊助方太
刀初也、其外若衆△『多々軍ニ逢(旧れ候て)□』敵壱人打取候
へとも、しるしを(旧ハ)とられす候處ニ、敵走合其頸を取
候、しはしの御陳の物笑ニて候、此日味方手負多々候
へとも、なに事なく候』、

巳日
十五日、御家中もよおされ御衆遣アリ、此日御『旗』於ノ役
『々』者梶原新兵衛尉、さしてハ瀬戸口藤兵衛、此日の御太
刀役ハ白濱次郎左衛門(旧尉)、めしの御馬ハ伊作野ゝ栗毛
『也』、若殿さまハ(旧も)御太刀役(旧ハ)鎌田治部左衛門(刑カ)「尉」(旧ナシ)、召
之御馬(旧ハ)瀬崎野々月毛なり、御仕役之趣ハ松坂の人衆
北村之麓『ニ』指寄「て」(旧ナシ)伏(旧せ)られ候處ニ、敵狩野伏出
候處「ニ」(旧ナシ)ヲかけ出「ら」(旧ナシ)れ候▽旧て、敵貳人打取
候、従是青色野と云ところにあひつノ火をふすへられ
候、自是所々に被隠置候大衆蒲生之城麓に被指寄候
て、麥作不残被敷候、此日　若殿様若宮八幡へ御参り
ニて候、其外之人衆悉御供被申候、此日頴娃衆塩井殿
ロニ指寄候て、五六人合戦被懸候、此日味方ニおちと
衆松坂ニ伊十院衆高野三郎四郎、喜入ニ五代孫太郎、
頴娃衆鎌田名字、野邊名字、以上此分候、大隅へ足輕
衆貳人、

未日
一十七日、馬立の陳衆三拾計八幡の御山ニ待野ふしせら

れ候所迄ニ、敵五六人通候處をかけ出され候得共、敵足はやくにけ退候、しほひとの口までおつこまれ候て、無何事ひらかれ候△

亥日

廿一日、てき三十計住吉のわたりにかけいたし候て、下々の荷『物』を〔を〕ひおとし（旧候）てのき候處（旧ヲ）ニ、新栫の人数馬立の衆つゝきあわれ候而、（旧いまひたロ）い□板口にて殊（旧之）外はけしき矢軍あつて、手火矢にて敵一人則時に射ふせられ候へとも、しるしをハ取られ候、（旧御）味方に（旧く）両陳に手負十人計あり、しかれとも何事なし、

廿二日（旧の）朝、馬立の陳衆菱刈切付候ほとに、丑ノ刻計より辰の刻半まて、こゝかしこに（旧而「本ノマヽ」）けけしき軍あつて、既ニ御屋形さま（旧御）父子御左右（太刀）をめされ候て、敵即時ニ三人打取（旧ナシ）〔ら〕せられ候、此時御馬廻り（旧以）已上三十計にて、其外（旧ニ）敵を方々へおっちらされ候、此日御屋形さまめしの▽（旧）御馬の向うに△征箭（旧ヲ）うけ□（旧留候）、若殿様めされ▽（旧）候所、御甲のまつかうに、はへのおも請留させ給へ共、下地よく候て御身ハ何事なく候、同又六郎殿左之御もゝにはへおゝ請させ給ひ、面より裏へぬけ候へ共、當所好く候て御痛なし、かくてさま〳〵御父子御手ヲ敵百計にて開候ところに、種子島之番衆其外手火箭しきりにはなされ候間、互ニ指義なし、此日又四郎様ハ平松之人衆以上五百計御供ニて△、蒲生（旧たさや）▽（旧）まロに衆からミに御坐候處ニ△御難儀之由被聞召候て、人衆百計（旧ナシ）〔ニて〕御供▽（旧）とも△にてはセ續御参りにて候、是によってみかた力をえ候、此日（旧南）味方人衆ハ左兵衛佐殿御供にて、松山口の衆から見ニ御座候處（旧ニ）へ、御難儀之由聞召、麓迄御参り（旧ナシ）〔有り〕、此日祢寝殿参上（旧ニ）『候』て、中途まて参られ候、

327の1

佐多民部左衛門『英』久莫『ヒ』覚書

一天正拾九年辛卯、高麗入トシテ、肥刕名越之御普『請』しん有、左候而文禄元壬『高麗』しからい『辰』國入御座候、

一嶋津様御両殿公加徳嶋江御在陳被成候、然者佐多太郎（久慶）次郎も在陳被申候、然ハ氣相ニて御奉公難被成候間、替を立候へと御公儀より被仰付候へ者、當分伯耆守（佐多忠充）『幼少』事もゆうしう之儀ニ候へ者、替ニ罷立申事不罷成候、然

ハ我等事、太郎次郎之兄弟之由ニ候へ者、御公儀より直ニ被仰下候付、高麗江罷渡り相替申候、

一其後日本國之諸軍兵いつれも御着相被成候、然ハ惣大将ハ金吾様と申、太高様之御代ニて候、然ハ奥入御談合相齋候て奥入御出立之御支證鎧甲金之はりさや二ツからめさし、ほろかまへ同たし金の日の丸なり、いつれも大名衆ハ同前之御支證ニて奥入被成候事、

一嶋津様も慶長二年丁酉、加徳嶋御陳より御打立奥入被成候、我等事も一騎の御紙を被下、人数五拾弐人めしつれ奥入仕候、

一日々ニいつれも奥之様ニ御入候へ者、南京と申大川内有、然ハ其ひろ田原に石磧の大城を取構、険勢籠居候ヲ一日一夜ニせめをとし、城ニ火を懸大敵を悉ク切り冤し候、さりなから夜中の儀ニ候へ者、少々ハ奥之様ニ逃行申候、それより又奥之様ニ御入候へハ、大川内是有、其田原ニ大かい御座候、然ハのろ川ニて候、其川上ニ石橋候へ共引はつし柱計ニて候間、むかへの地ニ御渡り被成候事難成みへ申候間、いかたなとをくミ立、いつれも御渡り被成候、それより又奥之様ニ御入被成候處ニ、惣大将より仰渡し候様子ハ、まつ是より跡之舟本迄いつれも御引ニて、御番可有通被仰候付、皆々御引ニて舟手ニ御陳取候て御座候事、

一嶋津様ハ泗川ニ御陳取、御両殿公御在海被成候、然者高麗人を数人御手ニつけ、サルハミトモウス、大川内ニ御百姓トシテ召置候て、知行作らせ候て召置候、其奉行トシテ川上久右衛門方又我等召置候、然處ニ御両様御越被成候て、高麗人罷居候を御らん候、然ハ日もはや入かたに罷成候間、御逼留被成候、為心様ハ川上久右衛門所ニ御宿被成候、光門様者我等所ニ御宿被成候、然ハ川上四郎兵衛殿御内儀トシテ仰聞せ被成候、御たる酒・うを取合候て御両様へ進上申候へと承候間、やかて御しろより取よせ候て、為心様へ四郎兵衛殿御取なしにてあけ申候へ者、御はうしを被下、忝御意ニ候、それより光門様へ伊勢兵部殿御取なしにて進上申候、然ハめし出し、かたしけなき御意にて候、明れ者やかて御帰り被成候、

一其後、嶋津圖書頭(忠長)より御状被下候様子ハ、其元御番ノ儀ハ帖佐衆へ相渡し、久作(久英)事ハ明日御城之様ニ人数めしつれ参候へと被仰候間、やかて御城へ参候て御ほう(奉)くう(公)仕候、

一慶長二年、従大明猛勢(禅)将軍日本へ来候、秀吉公御取會之由候、

御熟談ニて盤龍那之弟渭濱と申仁を為質人嶋津殿へ相渡り候、

一奠(順)天泗川ノ瀬戸口へ兵船ヲ相揃候所ニ、翌朝大明之兵船仕懸候、防戦之事以之外ニて、敵船も焼亡、又きり崩ふね共ニ雖有之、数万艘ニて更無勝利、味方之舟も数万焼亡ニて、ちやくせんと申嶋へ樺山權左衛門(久高)殿を始、数人衆追上候へとも、遮而敵船ニ無勝利、味かた心易引逃事、釜山浦へ東西當手相揃(候)ニ而、如日本御帰陳候、嶋津殿御舟、惣而跡にて候事、

一同三年戊戌九月廿七日、大明人・朝鮮人晋州表より泗川軍衆指懸防戦(ナシ)〔ニ〕候、厥時相良玄番(頼豊)戦死ス、

一其後大明人加藤殿陳へ相懸候へ共、手構(指欠)無之候、それより小西摂津守殿陳おひはらい、すくに(て)小嶋ニおひ上めいわくにて御座候ヲ、嶋津様より御かせひ被成候事、

一同年拾月、猛勢相催御城ニ取懸(ニ)候て城を取返、たてをつきしとミ鉄炮をそろへ、御城ニ打懸候、然ハ大手の口より石火矢をあまたうたせ候へ共、敵ほろひことの外いろめき候、其時御城御打出、御両殿へ軍兵働切崩、敵餘多うちとり、晋州(チンクウ)川を限ニ追詰、悉ク川ニ溺もあり、またハうちとらるゝも有之候、然ハ川之むかへに丸尾有、その尾の上ニ大将ハたまり居候ニ、嶋津様の御備の一本杉を敵中ニさし登り候へ者、其時敵は敗北して逃行を、晋州迄追詰候へハ、蔵を作置、かて(粮)を入御座候を悉ク焼亡候へ者、日もはや入かた罷成候間、先御城の様ニいつれも御帰り被成候、然ハ敵の打くひをそろ(そ)へ候へハ、御手柄ニて三萬八千七百餘騎計捕、其くひ塚を三拾間計ニ御つかせ、その上ニ松うへ置被成候、

一其後大明之両軍大将孟老耶・盤老耶より太夫参去(タモ)龍濱(望)

327の2

と云者を為使者度々懸引有之、依之和儀ニ候、

一其後御引陳被成候、然ハ嶋津様壱岐之嶋に御船懸り被成候、然ハ石田治部少輔殿名越ニ御下り、嶋津様を御待候、天下の大高様（太閤）の御使ニ是迄罷下り候間、嶋津殿御出合被成候へと仰候ニ付、やかて御出合候、然ハ高麗ニおひて一入手柄之由其聞得候ニ付、然ハ大高様より御はひりやう（『拝領』）ニて候、物数取合相渡し被成候、然ハ此御礼ニすぐニ都の様ニ御登り候へハ同心と被仰候間、直ニ御のほり被成候、然ハ大明より相渡候質渭濱事ハ、日本伏見に召烈、御公儀相調、御手柄之御褒美ニて御下候、薩摩より大明へ送届候、

一我等事ハ壱岐之嶋より御いとま申上候て罷下り候、右之様子大方覚候まゝ書付候、

佐多久作
久奥（『英』）（『ゝ』）（花押）

一明暦三年ひのとの酉三月、鹿児（島脱カ）御公儀より高麗入之様子御尋候付、我々事も召寄被成候、然ハ宿送りの夫馬給り候て参上申候、然ハ川上因幡（久国）殿出相被成、日記ニ書立候て、我々事ハ、高麗御弓箭奥入ニ付、高千五百石軍役ニ一騎之御賦、佐田（多）久作（々）奥入ニ備道具之事、

一弓四ちやう
一鉄炮四丁
一やり四本
一手やり一本
一大登一本
一小さしの物四通
一莫（マク）二かしら
一鎧甲一通
一のり馬一疋
一牛鞍（『、』）かいく
一我等めしつれ申候人衆
殿原三拾六人
中間四人小者一人
夫丸十一人

327の3

其方御番之儀ハ帖佐衆請取候て可被成相定候、貴所之事人衆めしつれられ候て此方之ことく御越有へく候、明日必帖佐衆可被参候間、替れ候て御帰候へく候、恐々謹言、

五月十八日　圖書頭　判

佐多久作(久英)殿

327の4

一佐多之本家者、九代伯耆守牛監(忠将)入道(賢)之孫子也、然者我事ハ四ツの年より隠居養子として召置候、然處御分國中所替御座候ニ付、川邊之内宮之村へ御うつり被成候、左候へ者、我等事ハ太郎(佐多久慶)次郎殿兄弟之けいやくニて『庶子』候、然者知行三拾石そし分として相請取申候覚悟仕申候、其使人ハ朝限諸右衛門・谷山喜右衛門彼人ニて相定申候、それよりやかて太郎次郎殿ハ高麗國之様ニ罷立、加徳嶋へ在陳被申候、

327の5

佐多休次郎家普(譜)写

御公儀へさし出し用高麗御弓箭之事

奥入ニ付

高千五百石軍役

一騎之御賦相調へ佐多休作人衆めしつれ奥入仕申候様子

備道具分

一弓四ちやう　一鎧甲一通
一鉄炮四ちやう　一のり馬一疋
一やり四本　同鞍かひく
一手やり一本　一大登壱本
一小さし物四通　但きぬニ日の丸十文字
但鉄炮衆おい物白きぬ日の丸
一莫二(マク)かしら　是ハ一夜〳〵篠陳屋之前に引、
一我等めしつれ申候人衆
是ハ役人分谷山喜右衛門
同名與八郎
『〃』難波孫九郎難波弥左衛門〃〃〃〃〃
『〃』同名李之助

『〃』仲拾助
『〃』神宮司典内左衛門
『〃』鮫島城之助
是ハ晋州替候
打死、
松本藤次郎　松本兵右衛門〃〃〃〃〃〃
郡山次郎兵衛
吉永助三郎『〃』吉永勘助〃〃〃〃〃『イ助右衛門』
晋州おもて打死、
『〃』赤崎番左衛門
『〃』安藤源次郎
池上庄次郎『○』
『〃』小田金六　江平金六
『〃』木原典介〃〃〃〃
『〃』鮫嶋市右衛門
永崎源左右『○』
渡〃川八助
池井善三郎『○』

『〃』神宮司庄司
『〃』村岡善左衛門
『〃』安樂主税介
西郷新八郎『○』
的場甚助『○』
『〃』赤崎甚六
染川采兵衛〃〃　女正『○』
財部半介『○』
西俣市介『○』
真玉彦三郎『○』
岩脇新九郎『○』
『〃』大迫十助
山口孫四郎『○』
山下久八『○』
『〃』『イ源』朝限新三郎

伊左敷小吉『○』
『〃』佐多源吉
合殿原三拾六人
中間衆四人
孫七兵衛　段之助
源太兵衛　筑助
小者壱人名ハ竹善、夫丸拾壱人
惣合五拾弐人
但殿原四人ハ手あきとてのり馬の両脇ニ行、拾弐人ハ備道具衆、其外ハ日〃替候、
中間弐人のり馬両口有、
壱人大登さし、
壱人ハ手鑓持、
夫丸拾壱人
色〃の道具荷持、
右者さし出候事、
寛文元年十一月ニ
鹿児島御公儀上納仕候ひかへ日記

今ハ我等　　佐多民部左衛門
當年八十四　　久莫判（英）（ゝ）
是ヲ書申候、

328

覚

主従八人　寄高五十石
高百六拾石より二百斛取迄被下分
一馬　壱疋
一さし物
右馬之飼者不断者被下間敷候、御出陳之前稜より二舛ツ、可被下候、但雑穀たるへし、
主従六人　寄高百石
高百石より佰五十石取迄被下分
一馬　壱疋　飼者壱舛宛不断可被下候、従御出陳前二舛ツ、可被下候、但雑石（穀）たるへし、
一具足一領
一指物
右寄高百石之段銭六十貫文、但百石ニ付三人役にして、壱人ニ付廿貫文ツ、の夫銭ニ相定、

寛永九年十二月二日（旧六）

（伊勢貞昌）兵部少輔
（川上久国）左近将監印
（喜入忠政）摂津守印
（島津久元）下野守

（本文書ハ「旧記雑録後編五」五八七号文書ト同一文書ナルベシ）

329の1

覺書物写江平傳左衛門重覺書

一日向國宮崎大明神御下向之砌、御供仕罷下、宮崎大明神日向國庄内之江平之野ニ一節御住、其後薩刄喜入瀬ゝ串へ御渡候而、瀬ゝ串之宮崎大明神を（ト）被御祝給候、（ゝ）某甲名字者庄内江平ニ而江平ト號候、幕紋ハ左供畫也、其後瀬ゝ串より知覧厚地江親類付へ一節勘忍仕候砌、常州様（佐多久政）より被召出候て、御奉公之始ハ加治木下向候時御供仕候、夫より日州栗野へ常州様御番手之砌御供候、其後曽木御番手之時御供申候、曽木江佐多殿御番手之時ハ、伊信様（惟新）（加久藤）格等之城へ御籠被成候、其後飯野嶋

津殿御手ニ参候而、飯野へ伊信様御籠被成候、其時佐多殿山野へ御番手被成候、其時ハ伊藤(東)殿飯野之城へせめ来候時、伊信様白鳥ニ向テ溝御座候、溝之侭忍寄、城之後より切掛被成候而、伊藤殿悉打亡し被成候、其きをひに殿郡(都於郡カ)高城迄打入被成候、高城ニハ島津中務様御籠被成候、其時豊後衆高城ニ向来候而陳を付、石火矢にてせめ候故、中務様御所は可被成様無之候而、土手をつき其内ニ御勘忍被遊候而、敵をやらひ被成候、其時伊信様月之輪与申川を召渡候而、豊後陳へ後より切掛被成候得ハ、豊後衆引申候を、耳川まてせめ付切ふせ被成候付、豊後衆悉切臥せ一返仕候、其時某甲父八兵衛申候、敵之者逃行候を八兵衛江被仰付候、八兵衛追付両人をからめ取、常州様御前へ指出候、一人ハ常州様御手打被遊候、一人ハ八兵衛へ被下候而、烈下候而召遣申候、其後日向一國御手ニ参候、其後肥後に打向被成候、佐多殿御番手所は針野へ御番、其後者片志田ニ御番、其後中務様嶋原江御渡し被成、いまた御陳も無き時柴野陳ニ而御座候時、肥前衆向来候時、中務様若君様嶋原へ御着被成候へハ、中務様被仰候者、御家を残置候處ニ御着被成候哉、乍去不苦候由(と)被仰候、(ゝ)敵陳之氣を見る人被仰候ハ、今日之御軍者可為御勝と申上候、面ニ鉄炮一渡・やり一渡・弓一渡揃候而、かひの声内ニ切出事有間敷候と被仰候、氣を見る人ニ被仰候者、敵之勢者人数いか程と見申候哉与被仰候へ者、敵者四千程と申上候得者、中務様御悦喜ニ而夫〳〵死せんと被仰候、此方の人数者いか程と被仰候へ者、此方人数ハ五百程と申上候、右之五百程ニ而肥前衆へ切て掛被成候へ者、肥前方皆〻打亡し、高信(隆)一人ニ打なし、高信ハ将木(几)ニ腰を掛御座候処ニ川上左京(忠堅)[illegible]、高信之首を取らんと御掛被成候へ者、高信被仰候者、汝はいか成人ニて候哉、日下より参候而打申せと御座候得者、如其被成候、夫より肥後へ引陳ニ而候、中務様若君様肥後ニ而御元服被成候、御元服之様子無申計御祝ニ而候、夫より佐多太郎次郎(久慶)様は御帰國ニて候、其後豊後入ニ常州様御渡被成候時、御供申候而参候、豊後之ふなひおきのはまニ而、千石權兵衛長曽守(我)

殿衆悉打亡し被成候、長曽守殿衆甚五郎と申者、千石
權兵衛殿衆宗五郎ト申者、両人を我等父からめ取烈れ
下申候、其後常州様殿武田へ御籠被成候時者、八兵衛
者替番ニ而罷帰り申候処ニ、太香様御下向ニ而乱國ハ
平治之所ニ、當所門浦より渡唐之出合、天下より御崇
被成候、依テ無御存知、太郎次郎様御上洛被成候時御
供申候而罷上候、其時金兵衛之名を被下候、陳たひの
御供計十八度仕候、其時川邊宮江移替御座候時、高麗
奥入之人数ニ召つれ被成候時六介と名を被下候、七月
十四日より番船崩しと御座候間船ニ乗り、十五日之早
朝ニ番船悉打崩し被成候、八月十二日ニ南門ト云城ニ
持留罷居候時、八月十五日夜四ッ時前ニ南門之城召
落、夫より青國と申ニ打入、高麗人鼻切と被仰候、日
本大名衆高ニ付テ人之鼻をそき納可有之由候、其時谷
山喜右衛門殿被仰候者、佐多殿衆ハ鼻をそき不申候事
いかゝと被仰候間、有馬利右衛門・江平六介申様は、
我ゝ明日参り候而鼻をそき可申与申上候而、青國の行
つまりに塩入よし原御座候、高麗人行つまりふしかた
まり罷居候を、鼻十五そき、三奉行之御目ニ掛り申
候、夫より高麗中飯米取替利右衛門・六助両人ニ而取
申候而つゝけ申候、夫より引陳ニ而曽天之城ニ御陳被
成候、曽天之後番ニ猿はみト申在郷ニ後陳ニ而御番請
夜白仕候、其後嶋崎ト申所ニ御陳普請夜白仕候、其六
月より某甲替番ニ而帰り申候、其後庄内陣ニ庄内一成
に打まわり被成候而、福山江御番之御供申候、此後山
田之城ニ番手、志和池城・森田之城皆ゝ御供申候、其
後白州穆佐之城ニ御番、倉岡ニ御番手、皆ゝ御供申
候、其後大坂入ニ白州様之御供申候、以上陳たひ之御
供、金兵衛十八度、傳左衛門九度、金兵衛御奉公者常
州様より太郎次郎様迄御奉公申候、太郎次郎様より白
州様迄者傳左衛門御奉公申候、因幡様より又四郎様迄
者六助御奉公申候、

行年八十一ニ罷成申候、

氏ハ平ハ、名乗ハ重、江平傳左衛門

明暦元年

十月吉日

329の2

右者徒事ニ候へ共、後代之物語、扨又孫子之覚と存事を以、如此残置申候、

右於知覧臨寫、

文化戊寅（十五年）夏四月廿七日　　正澄（花押）

330

一貞昌（寛永元年より以来夫婦江戸へ相勤■、為御合力将賜年俸百石、辞焉、）

一仁礼蔵人

一鎌田左京

「文化十五五月朔日承也」

一□（右衛門在江戸中五拾石ッ、被下候、）

一町田駿河守

右同三拾石ッ、

一野尻ニ而伊集院源次郎を射殺候鉄炮、田部市助殿所持ニて候由、野尻ニ而求為被申由候、たゝり有之由ニ而きらひ申候故、安ゝ与買為被由候、玉目七匁、家員ト銘有之由候、惣躰竹之節（フシ）之細かなるすぐれたる細工ニ而為有之由候、市助殿上なミを仕かへ為申由候、此噺川畑平左衛門篤實より承■

（家員ト云鉄炮工ハ無之由候、善長の隠銘ニてハ有之間敷哉与申来の由）

331

猶ゝ依樂見續之儀、此比やう〳〵出船之由聞得候、飯米可為拂底候、先ゝ御物借下され候て、見續待付候やうに御取成偏ニ奉頼候、いまた鹿児しまの濱に有船之事候之間、定六月末つかた（ヘ）こそ可致上着候欤、其御分別所仰候、兼又今權國本之仕合不及是非、依子細走上候処ニ、武庫様以御分別於中途討果候、御満足之由、自　龍伯様ハ御丁寧御礼被仰下、外聞實景（不審候）与、此等之次第、御前様へ御仕合可然折節、御披露頼存候、次存松老へも申入度候、其外吉作州・休心老・白次左、何れ（に）も▽（正）〳〵△在洛中御懇意（志）之儀（ナシ）〔候〕、又依樂召置被懸御目（長）自、然者御酒御振廻（舞）可為御懸廻（敬置）之由御心得所希候、

就好便令啓達候、卯月廿二日細嶋着岸仕候而、入来院へハ今月二日漸罷着候、御堅約之日州より濱市迄、夫丸五人相閉候て越着仕候、悉皆貴老御力迄にて遂下向候、過分之至難申盡候、帖佐へ参上申、上下無何事候、御在所へ（ハ）〳〵急申候之間、使はかりを進覧候、御息御兄弟御さかしく候、可御心易候、愚老進退之儀、兎角不申上、如入

来之罷通、大方見廻申候、一切無心附(旧付)候条、能々見合候而、濱市へ以祇候御侘可申上分別(旧ニ)候、追而吉左右申へく候、恐惶謹言、

(新納忠元)同武蔵入道

『文禄元年ナルベシ』

五月六日「文禄五年ナラン」　為與(旧舟)（花押）「與ハ舟ノ誤カ」

(新納長住)旅庵老

参人々御中

（本文書ハ「旧記雑録後編三」六三号文書・「同附録二」三〇二号文書ト同一文書ナルベシ）

332

尚々敵方草臥候とて、油断候てハ可為越度候、油断無之様ニ氣遣尤候、折々又八郎殿へも此旨(旧由)可被申〔上〕(旧ナシ)候、以上、

新納本右衛門尉(旧尉)入道差下候刻、以書状申遣候処、其返札加披見候、然者庄内裏江着陣之由、如何無心元候、此時之儀候間、別而奉公肝要候、将又鎌田出雲守・比志島紀伊守・樺山權左衛門〔尉〕(旧ナシ)、以別紙可申候へとも、右之通相心得可被申候、謹言、

(慶長四年カ)十月廿四日　惟新（花押）

伊勢兵部少輔殿

（本文書ハ「旧記雑録後編三」九四二号文書ト同一文書ナルベシ）

333

於先年日州表京衆着陣〔之〕(旧ナシ)刻、親父忠隣被遂戦死、誠(旧誠)吳〔于〕(旧ナシ)他者也、頓可申理之処在洛打續(旧相)、于今背本懐(旧畢)候、右之誠名(旧佳)到向後不可有忘失〔候〕(旧ナシ)、仍(旧為)證跡如件(旧斯)、

天正十九年卯月七日　龍伯御判

(島津常久)袈裟菊殿

（本文書ハ「旧記雑録後編二」七四七号文書ト同一文書ナルベシ）

334

天罰起證(ママ)文之事

晴蓑(歳久)簾中・袈裟菊丸・同母儀三人之事、并家来之者(一本ニ至アリ)迄、任先度(旧今)嘱(一本ノアリ)於致下城者、向後可為安堵(旧稲)者也、

右之趣若於令違犯者、

▽(旧)奉始上梵天帝釈四大天王、下堅牢地神、惣者日本六十余州大小神祇、別者薩陽鎮主新田八幡大菩薩　開門正一位并天満大自在天神、殊者鹿児嶋惣社諏方上下大明神　戸柱大明神　稲荷大明神　春日大明神

若宮大明神　御部類眷属等、神罰冥罰罷可蒙者也、
仍如件△、
天正廿年壬辰七月廿六日　　義久御判
袈裟菊（一本ナシ）「丸」殿
（本文書ハ「旧記雑録後編二」九四〇・一二一〇号文書ト同一文書ナルベシ、尚一本ハ九四〇号文書ヲ示ス）

335

天罰起請文之事
今度左衛門（歳久）入道殿御一身御成敗之事、以御朱印被仰出（旧候）、
其外之儀不乗御文書（旧言）候、然上者、晴蓑御女中・袈裟菊
殿・御母儀三人并家来衆（一本ノアリ）之事、下城之上義久次第、向後
不可有別儀候、若此旨偽申者、
霊社神名略之、
天正廿年壬辰七月廿六日　　幽斎
玄旨判
袈裟菊殿
▽（旧）参△
（本文書ハ「旧記雑録後編二」九四一・一二一一号文書ト同一文書ナルベシ、尚一本ハ九四一号文書ヲ示ス）

336

是龍伯公命比志島国貞至大村説下城（七月廿日比）、袈裟菊不
肯、又使花舜軒龍雲寺及大窓寺（七月廿七日公賜書大窓寺）、強下城、亦
不従、同復命福昌寺主僧及新納忠元至宮ノ城説袈裟菊
曰、従　命下城則所領及身上無異矣、於是不得已下
城、入来院重時往携袈裟菊至入来、實八月十一日也、
袈裟菊及祖母・母結草庵於坂中（入来）居焉、
一嶋津菊けさ殿為御替、北郷讃岐守殿御越候間、則菊け
さ殿御暇被下、只今帰路被成候（慶長十七年十二月廿六日本田佐渡守正信遣羽柴陸奥守（ママ）様書ニ、アリ）、
猶以、諸所士衆跡目無之衆可被申上由、今度江戸よ
り被仰下候間、急度高奉行所へ可被申出候、以上、
急度申候、
一當年出物高一石ニ付米八舛充真赤半分たるへき由、今
度平田盛右（純正）衛門を以江戸より被仰下候、但右之内、真
米者半分之上ニいか程成共可有上納、米・大豆等直成
之儀者後日出、物奉行衆より可被申渡候事、
一銀子を以上納候ハヽ、その時々この直成ニ可有算用事、

一来年正月を限ニ可有皆濟候、若於未進者、二月朔日より可為利付候間、能〻可被相付、此旨事付、たハらの誘米之調積御蔵入を被承合可被入念候、麁相候ハヽ相納間敷候条、其段衆中在郷へ堅固ニ可被申渡候、聊油断有間敷候、恐〻謹言、

（寛永十七年カ）
辰九月一日

（三原重庸）
左衛門佐 ㊞（黒印）
（鎌田政統）
治部少輔 同
（川上久国）
因幡 同

337の1

覚

此状急用ニ付、其元衆中長野宮内左衛門方へ遣候之条、早〻可被相届候、以上、

鎌田次右衛門

七月朔日

指宿
嘜中

337の2

以宿次申越候、當年諏方御神事ニ付、居頭并社役人長野家より可被相勤之旨申渡候処ニ、御方より名字中へ被申渡、社役領掌之人数被申上置候、然處ニ右社役人之内谷山衆中長野郷介儀差合有之候条、右代申付、領掌之人急度可申上候、聊延引有間敷候、此旨御老中御差圖ニ而候、恐〻謹言、

七月朔日

鎌田次右衛門
政意（花押）

長野宮内左衛門殿

338

尚〻　大隅守殿より御状被下候、御父子御無事㊐ニ〈
候、態以飛脚申入候、

一賀藤肥後（ママ）父子國を被召上ニ付、従江戸御上使此書立衆御下候、大形六月廿日ニ江戸御打立候而、七月中比、我等國迄欤霧崎迄か、御出筈ニて候、

一若つかへ之儀㊐有候（一本ニハ）者、御人数可被遣候間、黒田殿・鍋嶋殿・我等なとも心〻用意仕相待候、上㊐使〈衆御下知次第可罷㊐之出候由、昨夕従申来候間、其用意仕候、（一本成）

一限本城、御掟次第ニ城ヲ可相渡と而、掃除なと申付候

339

由、豊後横目衆より申来候、御近所之儀候間、其段不及申候、

一何茂拵候とて、人衆ヲ入可申分ニ而ハ無之候へとも、先任御意ニ拵候へ共、下々申付候、（一本伺）

一其許之儀如何申下候哉、彼地於罷越者、程近可有御座候〔間〕、万々可得其意候、此外追而可申越儀御座有間敷候、恐惶謹言、（旧ナシ）

（寛永九年）六月十六日　　細川越中守忠利（ママ）

喜入摂津守殿

花山美濃守殿　まいる

（本文書ハ「旧記雑録後編五」五三五号文書・「同附録一」六八号文書ト同一文書ナルベシ、一本ハ六八号文書ヲ示ス）

追而申入候、

一五月六日十一日同十五日廿四日、四度之御状昨日到来、披見仕候、其地御無事之由、此方同前ニ候事、

一此暮ニ御上洛可然由、土井大炊頭殿より御内證共細々被仰越候、即上聞仕候、尤ニ被思召候間、秋中ニ御上洛之用意、被仰付候事、

一松平肥前守殿御成日記、被成御覧候、就其此方　御成ニ可入道具共御書付御持せ候、重而様子可申入候事、

一御供衆之儀、御成之時御前之役者可被仕衆舞臺ニ鳥目・小袖なと可被出様子、前廉稽古候ハてハと被仰越候、尤ニ存候、内々ニて人之不存様ニ書付可申様ニと、被仰越候、心得申候、其外色々入可申候哉、書付重而可申上候事、

一宮仕衆振舞方ニ動（動）衆之事、去年貴老御供申大炊頭殿へ罷出候刻も、右之御出合共承候、尾州紀州両大納言様御成之時も、連々御知音之衆へ御やとひ候之哉、此度も左様ニ候て可然存候、弥其心得可申事、

一摂州去月六日其地被為打立哉、今月朔日大坂出船之由申来候、定下着程有ましきと存候事、

一御成之　御時分之儀者、春ニ於罷成者、可然由被　仰候〔之〕（旧ナシ）哉、就其大工豊後守へ御作事之様子御尋候へハ、霜月ニ者御廣間・書院・御門迄無所残可相調由候哉、其外御数寄屋、御くさり之間・御湯殿・御料理之

間・舞臺樂屋・御馬や等者、弥可致出来之通候之哉、
於其成者、三月之時分御成相調可然由承候、御方ハ其
御覚(旧悟)語にて諸事御調候而、當暮之時分ニ者、春之御成
可調様子相知れ可申候と被仰候、尤ニ存候、いつれ御
急ニて肝要ニ存候、即貴老御書面皆々被成　御覧候、
定其心得可有之候事、
一中宮様(東福門院)御懐胎にて、當月御産月之由候哉、もし　太子
様ニて御座候ハ、、来年御上洛可有かと、寺澤志摩守
殿貴老へ御物語候哉、能々被聞召合可被仰下候事、
一東郷十左衛門尉殿、近日其地打立にて候之哉、殊外お
そく可被罷下由、節々出合申候事、
一爰許御屋形(旧敷)内へ忍入申候者之儀ハ、三日中ニ伊集院戸
右衛門差上可申□(旧候)間、其刻細々可申入候事、
一将軍様御疱瘡之御注進被成御申候、早打おそく参着仕
候、就其御存分尤ニ候、即扶持方を放追出申候、彼飛
脚申分共其地へ被仰越候哉、我等ハ相煩罷居中ニて候
之間、定而摂州老被仰越候ハんと存候、委者摂州御下
向之時分可申談候、左様ニて定而御返事可申候、恐惶
謹言、

六月十三日　　下野守　久元（花押）

伊勢兵部少輔殿
参人々御中

（本文書ハ「旧記雑録附録一」六九号文書ト同一文書ナルベシ）

340

猶々吉加江内膳事居屋敷之儀、此前申下候処、其
首尾いまた無之由候間、早〳〵可被相渡候、
幸便之間令啓候、
一先書ニ申候欤与存候、我等知行殊外荒候由、いつそや
注進候由、其□(旧や)田掃部殿東長左へ以書状、知行荒候様
ニ其聞得候間、左様ニ無之様ニ可被念入候、我等其元
へ罷居候時さへ無其儀候、當時者入木入草なと、其外
夫遣我等居候時之様ニ者有之ましく候間、知行なと荒
候事者如何之由申遣候処、少も知行不荒由、従両人度
々申来候、始良之内小場与申所、人の常ニ行付さる所
にて候哉、是ハもと〳〵より荒候間、誰そ移候て召置
候ハ、、作ひらけ候ハんかの由、両人より被申越候、

此儀ハ我等も為存所にて候、是ハもと〳〵より荒候、
其外ニ新荒之所少も無之候、無心元候由候、定両所聞
違ニ而も候ハん欤与存事ニ候、猶相易儀候ハヽ、追而
可承候事、
一我等屋敷内番仕候衆、門の明立庭馬場之さうぢ仕候由
候、今之屋敷者殊之外四方馬場たるへく候間、一方之
馬場ハ定番衆はゝき候ハんと存候、甚左衛門（旧ナシ）〔尉〕・
官右衛門（旧ナシ）〔尉〕・孫八なとの様成衆、四方（旧ハ）□掃除候様
ニ申付度候、此中も孫八・甚左衛門（旧ナシ）〔尉〕両人にて三
方ハはゝきたる様ニ其聞得候、官右衛門（旧ナシ）〔尉〕なとも
徒ニ罷居候而、可為同前候、此元へ召寄候衆ハ、日夜
ほねおり候処、其元出合候衆ハ日夜心易候而、掃除以
下之儀ハ無緩申付度候間、可被得其意候事、
一先書ニ、此元小性（旧姓）共無之候間、竹伊佐・小倉七介・堀
帯刀子共召列て罷上候様ニ与申候つれ共、頃小性（旧姓）一両
人相抱候間、先〻右三人之おさなき衆ハ、此節之儀可
被相延候、就中帯刀之儀ハ必可為無用候、當時者おさ
なき者共多候間、此元賄方六ヶ敷候条、可有其心得候、
尚期後音候、恐〻謹言、

十一月廿三日　　伊兵部少
　　貞昌（花押）

有川治部左衛門尉殿
八木民部左衛門尉殿　御宿所

（本文書ハ「旧記雑録附録一」四〇四号文書ト同一文書ナルベシ）

341

以上

一書申越候、然者當年御諏方御祭礼之居頭役、町田名
字・長野名字ニ参候間、其地長野彦右衛門尉殿名字中之
衆同心にて、来月廿日ニ必〻参上候様ニ可被仰渡候、聊
由断有間敷候、恐〻謹言、

六月十三日　　川左近監
　　久國（花押）
　　喜摂津守
　　忠政（花押）

（本文書ハ「旧記雑録附録一」一一〇号文書ト同一文書ナルベシ）

「其邊損して家不知」

右、長野彦右衞門殿所持古筆写、文化戊寅四月晦日
写之、

.342

一覚兼日記之内、天正十四年六月十六、十八日衆中各此方へ揃
而、筑紫立之談合させ申候、餘〻是程之遠方へ立(上之)(上候)
事、始ニて候間、七八町組に(上ナシ)〔て〕も仕候ハてハ難成
由、頻侘言也、巨細之儀(上共)者承候へハ、尤ニて候間、諸
方同前ニ可然と云〻、
同十九日之場、比志島殿も、餘〻遠方之立ニて候間、
是非共七八町組ニも被仕候て被立候(上て)肝要之由也、
「天正十四年九月廿四日、鹿児島へ使申付被申上候条〻也、豊後入ニ付而也」
一御行相定候、目出事、一御發足日限之事、付路次御宿
元之事、一兵船大将并乗衆之事、一御衆盛之事、一矢
合之仁之事、一御物俵無之之条、拙者以分別(上分別以)、千計調
儀候事、一諸方角雑説之事、
「同年十月十一日」
一穂北衆中寺田方ヘ(上)連〻不了簡之由候間△〔氣任ニ(上ナシ)
付〕所領被召離ヘ(上)候て可然通申候、春已来之事候、
左様之義共承候也△、其百姓江、先〻此度ハ楯・矢種
等、殿役ニ被持候て肝要候、

襲山紀行

（表紙）

霧島—日向—高千穂云々

襲山紀行

（中表紙）

「襲山考

襲山紀行」

1 襲山紀行

天保辛丑（十二年）秋九月、先是、山田清安還自京、介新伯剛（新納時升）、叩

余草廬、請覩余所嘗編島津荘考、余乃視之、而其復（マタ）如京也、拕伯剛氏、授余著篇、屬録襲山事、余會撰伴氏譜、為天忍日傳、而天忍日、則為前駈、從瓊瓊杵尊天降襲山者也、故著其傳、及襲山事、襲山即今霧島也、爾来九年、焉此月十五日、清安奉

松齢（義弘）公肖像、至自京、未半旬、儼然復来、語及前事、迺出忍日傳、視之曰、天降神蹤、史有明驗、莫如襲山、惟以僻在南裔、未有能載文翰以耀天下者、故若本居氏亦至貽疑、遺憾孰大焉、今子客京、願著精篇、以振海内、清安曰、足下為國勤則勤矣、雖然皆是獲於載籍所獵也、非親履其地而睹記者、恐承誤謬亦未可知、請子盍必陟襲山叙所睹乎、余曰、徒企望久矣、如無貲何、清安曰、吾其相之請必發行、十月四日、清安遣息有實齎簡、告将明日往遊、催余治装、晩乃往謀、新常有亦約偕行、既来在坐、清安曰、適羈官事、明發不杲、将以六日起、話及秉燭、俱常有回、既別、獨顧以為方今清安名聲藉甚、偕渠探勝、實非潜行、應必至以有振乎世、而如余天譴未霽、莫如豫遁以潜吾身、五日、清安勃々不已、尋投余簡、愈

促明日黎明、不問雨霽、襏襫偕發、然余也既欲罷、此夜稍雨、乃衝泥、訪常有、托辭陪曰、細慮於心、有所恐懼、不能如約、請為致意、因往著稿、以代喙也、常有強甚、不聽而去、臥未眠、失火峯下、延及數區、六日稍霽、清安不起、復来頻勸曰、足下不行、無所咨詢、與常有謀、私於某官、無所可憂、敢請必發、若足下訊、相以輿馬耳、於是乎、幡然決行矣、此夜小酌、告母堂別、七日候曉、単身迺發、降龍尾阪叩山田氏、時天既明、清安及息有實、新常有等、皆裝而竢、聞倪利國先行期會於桂山邊、乃相共發、各徒行也、出門、伊祐典揖余曰、聞君等為山遊、願亦陪行、余謝得良朋、固清安同志也、右仁王堂、左玉龍山、陟阪於郭北、将近里許、相及倪叟、揖慰此遊、行互笑詠、度太皷橋、過一村落、出於芳野道、松杉夾道、左右廣圃、蕃薯被連、往往既為霜所殺、菁葱多萎、知氣候寒於郭内也、歴小肥迫・菖蒲谷、降七曲阪、石徑屈曲、皆甃以石、非昔年所過艱嶮、咸曰近所修飭、借関屋民舍、小憩啜茗、踰薩隅境、下白銀阪、路左有一巨石、大可少減於府下鳶石、聞近轉来懸路右邱頂、欲堕未堕、若勢将者、觀者竦懼、迨巡撿使将過其下、官議及之、豫役衆夫、得轉于此、時有譌言、　心岳君憤懣之所為、亦足以仰其遺烈也、益降石磴、東北眺望、峯巒列空、海如銀盤、洲嶼阡陌、人烟松道、裝點其間、致美呈奇、莫不稱快、乃清安命所携酒、藉草附石、皆飲以巡、後遇泉石佳處亦輒爾耳、阪盡平坦、過蔬圃間、左折抵脇本驛、驛街繁簇、優昔所覩、此　重城公子食邑也、就店午飯、常有行厨、頒衆玉食、共箸忘疲、行度思川、入帖佐境、經松原路、沙軟没踝、右瀕海濱、蓁荆中有古墓、繚以石闌者、聞、是為垂城太祖典厩君墓、莫詳誰建、有實乃往、摩薜視之、杲此也、左望建昌・平山二城墟、中有堂宇翼然於崖壁之上、所謂米山藥師也、經十日町、渡別府川、過田畝間、左望後藤塚、聞、元和中殉松公者、山路某所割腹處、恨不往觀、至網掛橋、右有膝瓊山撰橋碑、所嘗讀也、橋舊架板、今修易石、假設危梁、皆由此渡、街坊脩飭、如一城府、此柁城驛而柁城公子食邑也、余曰、此遊在探神蹤、聞、邑治有古櫟樟、名楠樹街、云昔蛭兒見以船棄、其楫所蘖、而邑得名亦即此云、

覩自此始、咸曰然、乃問里人、遵指尋歩、至朽根盤露於垣處、又詢之、聞、其垣為桑畑屯宅、乃余舊識也、請就測圍、屯以事出、其妻邀聽、幹朽中洞、圍可數丈、恨竹叢生、為其所蔽、不甚雅潔、如不識有以者、屯兄時□、為屯出速、亦余舊識、嗣新納者也、頃之、屯聞客至、回謝且留、弟兄比隣、皆為著姓、乃索舊蔵、屯大秦氏、秦始皇裔云、出安元中右近衛府所授牒及鎌臺華營古書、如其牒文、嘗以難解、視余摸本、余解注點、且為標註、亦併副示、清安秉燭、寫文摹印、遂飯宿焉、獨倪叟別宿他氏、此日陰翳、晩雨、八日猶雨、□俟吾儕起、招飯渠宅、余青年巡察、得嘗過此、屈指距今三十六年、去歳、息抱碑藁、因新伯剛、屬余補闕、乃故國相旅菴君碑也、君従　松公於関原、特著偉績、余頗撰述、清安亦奉　公肖像、近至自京、今皆捜邃、會於君後、如不偶然、亦奇縁哉、又請舊蔵、出　公等賜書、多関原消息、常有等揮毫寫詞、辰冐雨發、令人報倪叟會於途、清安所随、多京畿産、不熟地理、恐後迷岐、緩歩俟及抵蟾蜍水、或駄僕肩、或攝衣渉、右能仁寺、陟龍口阪、踰柁國堺、過小濱邨、小憩旁店、倪叟跨馬、行謝不駐、竹内某陪、柁城人也、沿海蹈沙、随歩没脛、右望洲嶼、左傍村落、所謂七里小濱、豈指此乎、今減半耳、北陟小田阪、延縁里許、降得村落、村名小田、過田疇間、左睹一丘如城墟者、松列茂巓、巖壁繞帯、自半腹麓、松杉翁鬱、紅葉一株爛然其中、云是樺山氏墓、可玄佐故墟、恨不往觀、将近宮内、轉就捷徑、過村巷中、出於華表西、抵彌勒院、主僧出迓、解装啜茗、午飯更服、拜謁　八幡廟及石體宮、廟在邑廨偏西里許内邨、出寺馳道閑坦、人煙繁簇、西折行眺、老杉森鬱、中有石磴、右睹堂舎、奠許多佛像、左有茶店、具食待客、直躋石階數十級、庭除幽邃、右轉益陟、巋然神廟、廊廡悉備、刻龍彫雲、金朱彩爛、極為壮麗、相傳、昔　神武創祀出見尊、迨　欽明時、有八流幡自現於此、祔　應仲神三帝、崇八幡宮、和銅建廟、延喜祀典謂、本州桑原郡魔島神社此也、按　應神時秦人歸化、至　雄略世、秦族繁衍、蠶織之道盛行海内、至深被鴻恩以稟寵號、訓秦曰波陀、訓大秦曰宇都萬佐、此而弓月等裔詵々於州、見姓氏録、且多植桑、郡亦得名、則祀三帝豈擬於其所報賽

乎、石體宮、在社艮、鐫題妙文、未詳所覈、天承二年、宇佐神官、聞為怪異、遣三使燬、四月三日、莅焚石體、焰氣赫熾、念日弗滅、石百練抄六　崇德院十八年之中、長承元年天承二年八月十一日改元、依疾疫也、六月廿三日、太宰府言上正八幡宮、高四尺、弘三尺、厚二尺、石二自然出来、各有八幡二字銘事、自右天承二年四月三日至今茲嘉永七年甲寅七百二十二年、而季安始知有徵據乎焚石體之俗說矣、故抄註此、時九月二十一日之事也、靡塵焦、妙文益彰、三使縮畏、一名立殪、一名死道、而惟一名得還報實、繇是、靈驗顯乎世、遂崇本社、號正八幡云、所謂妙文、見長本平語、今社於其上、恨難闢睹、竣復還寺、雖固私遊、緣常有為椽祀典、主僧慰勞厚、飯畢、又野裝、往觀嘆及久我氣色三森、皆本州名區也、嘆森亦在廨戌里許內邨、古祠蛭兒、崇曰二宮、國史謂、諾尊嘆蛭兒三歲脚不立、載之天磐櫟樟船而放棄、則其船所着蘖、故得叢名云、今距海里餘、非船可着、先史親孚(本田)嘗謂、隣近有姫木城墟在崖壁上、去地數仞、為濤所穿、痕尚存焉、據此、神代知今渦川為海云、森亦按元輔歌、時既枯矣、按寛文七年、前史(得能)通古紀行云、有古楠在二宮右、在古樟子丑五歩許大可十抱、幹朽中洞、足匿八牛、時領社者、迎導齡垂八旬、云是嘆森、相傳、方草樹未萌於秋津洲、自高天原所投而種、故曰投木森云、萬代記謂、正德五年五月十一日、其第一枝、折破舞殿、長十二尋、圍可八尺、據此、猶知未悉槁也、又享保十三年八月、地頭樺山久初、命栽稱樟、枯矣未幾、三株自生其側、久初聞驩神迹不絶、事見社說、據此、壽木知枯其前後寛延三年、命遷社於西可二十歩、今社此云、寶曆三年、所撰地志謂、可繫十牛、知其稍朽容增二牛、而降享和、親孚睹記、朽洞圍十有二歩、根盤圍十有五歩、享保所生楠亦餘四尺云、余嘗遊觀亦在享和、比今所睹、其遺者僅十分之三、而如初月然、半輪缺亡、今為竹林、至籬亦廢、推此、元輔所詠、既非此株、蓋神代蘖樹、枝繁着土、輒必生根、分為數株、猶伊作楠在宮內、而漸枯亡、至寛文後、可觀者惟此株耳、以是想之、後降百歲、徒承口碑、至無覩而識者、可以知耳、久我森、在清水廨西可拾玖町姫城村、古樟屈盤、分餘三株、圍八丈二尺、叢一名風、葱欝未槁、寔壽木哉、云是古我大臣冢、余按長本平語、久我大納言侍左衞門尉朝重女曰伯耆局者、通藤成經、迨治承中成經遠謫、慕跡不已、時會八幡神官清道發

京、乃説局曰、偕西往國、得逢藤君、何難之有、局悦随西、至則烟波渺茫、島猶不見、徒益焦胸、遂奔清道云、據此、口碑不為無謂、則為局塚、可併知也、又偏西行可十町所、有氣色森、亦在國分廨偏西拾伍町許府中村、蓁叢蕭瑟、無甚老樹、薄暮急回、不及審觀、相傳、舊森在巽可六七十歩曰上河原滸、尚呼木掘、即其趾云、寛永二年四月、鼻面川洪水、岸崩叢流、　慈眼公命喜入紹嘉新植樹木、移名區於今地、五月建祠、祀菅丞相、事晰梁文、按舊天神祀神七主、因菅相曰天神、豈譌之耶、通古紀行謂、嘆森社司可八旬叟、迎揖相語、傳聞、氣色此嘆枝、而叟幼時、為洪水所潰、移於今地、則所隔川覩、蕞爾蓁叢、在杉樹中、即此云、據此、舊森知神代所蘖枝也、又村得名、昔郡縣時、國衙所在府故也、凡觀三森、雖無陟降、迂路直徑、田間村巷、梁舟渡川、昏黒回寺、夜訪桑畑公重、公重姓息長、家世襲神官、即清道裔胤也、亦索舊蔵、出其譜牒及古文券閲之、不足奇賞、神官鄙愚、他猶秘襲、咸欲悉覩、竊瞷幙罅、退撰諸内、清安微笑、招誘吾儕、乃皆不覺推入渠席、遂得與捜假本州圖田帳、清安等大驩、為古編、余既所嘗寫、限本氏蔵建久八年帳之摸本也、又有佛像、云是平相國所賜觀音、拂塵觀背、載故像既燬、摹刻於天文八年、余觀長本平語亦載、清道如京、得寵相國、今復覧賜佛、益信其事之不誣也、此夜宿彌勒院、九日、小雨、稍霽、余偕常有等、抵正興寺、寺在廨偏西里許内村、僧坦然剏、稟法建仁、奠釈迦佛、為八幡本地之列、東傍社麓、度一石梁、躋石磴數十級、得二天門、聞昔板蕩世、群雄割據、虎視磨牙、(氏久)齡岳公乃懐社衆、貞治五年所新造、而其左即　公肖像、右本田親治肖像、皆類二天、儼然雙立、匿文軀内、以禱降服、皆刻於存時、惜哉罹兵火、燬於大永七年、迨　梅(忠良)岳君平定本州、摹刻於永禄(ママ)年、蓋因舊像云、即此也、又躋數級、得門、入而抵寺、主僧出迓、寺據山、南向弘敞、景絶勝、實浄境也、回飯宿寺、皆謝僧發、就新田路、左木房温泉、復度圮橋、過田畝間、入清水地、左姫城墟、迂回其麓、有一嶮嶽聳城坤旁、松茂其巔、下當巖稜、有一叢祠、在廨西可十三町、云祀妙現、往昔竹林山之貢笛竹亦必自此始、余行相語、郡縣世則國司大中臣氏

築城於此、莅而治之、後襲郡司、以姫木為氏、嘗觀乗牒、有國司嶽尚聳城旁云、疑應此也、清安乃顧問村童、皆謂為城、行三四歩、又逢班白荷鍤旁避、乃指嶽問、折腰對云、嶽名古武士、一行咸笑、莫不感悟、書益可証、而口碑謬至如是也、過田間道、抵邑治口、士街頗整、乃問道左茶店、聞臺明寺在廨良里許山路村、直就堤左、恨不就街坊巡視、循新田渠、通田畝徑、両山對峙、如夾路迎、屢度川流或擇跳石或揭渉水、水沙粘履、覺脚益重、迤逶傍岸、尋源益歩、足指多仰、石愈奇、流愈清、漸入佳境、及有橋處、則架両岸、長不數丈、下瞰藍漲、水激亂石、或湧巖隙、湍洶雷轟、過橋有門、入躋石磴、右覩場圃、左仰喬木、陟盡則寺、寺據山腹、連巒環拱、美景如画、眺發清機、遊客不覺咸濯塵胸、莫各不曰快哉、實一浄域也、聞寺故係　天智勅場、世貢笛竹處、而當國衙艮、故剏于此、舊宗法相、行玄董席、改崇天台、　節山(立久)公時、換修眞言、至享保間、復今天台云、按國衙址、在國分府中村、因村得名、可併証也、又其貢竹也、翦伐輸衙、先供妙現、漬諸鏡池(在府中村)、使掾介等齎貢京師、世所謂無官大夫敦盛青葉笛亦産于此云、今税所・重久等、在藩中者即掾介後也、主僧迺迎、啜茗吃烟、又詣日吉山王、聞社在堺内竹林中、距寺五町、亦行玄所剏、而一山鎮主也、出寺、右就巖徑、益陟石磴、老杉夾阪、白日陰翳、陟盡、則山王社也、緣竹猗々、以環社庭、清溪潺々、流乎其間、水竹和聲、珊々鳴玉、人跡罕至、幽邃無比、而竹類多亦呼此種、徧繫寺名、則其鳴世亦不知幾百千年也、乃咸胥議、斬托主僧、郵致城府、宜挿花瓶、況齎諸京、頒文人騒客、各可供清玩、清安等迺排蓁荆、擇伐良幹、余亦托人、伐宜杖竹、為濟勝具、左有本地堂、聞建仁三年、　藩大祖聞比企愛、将往護京、致告禱書、即此堂云、又有鐘樓、懸古洪鐘、睹所鐫文、正嘉元年所改鑄、而舊鐘置於天慶九年云、亦可以知寺邈古也、清安常有假扉設閣、仰得及鐘、糊紙摹搨、古雅可愛、既又歸寺、午飯、亦索珍蔵、出文翰七軸、郡縣以来所世寶傳預貢竹書特多、嘗徵史館、享保元年所摸賜寺也、清安等翩々揮毫、擇奇抄萃、余既多寫、不悉讀也、復就舊路、抵曽於郡、此日、倪叟分袂半途、約如止神覓宿竢、

乃自途雇導、徑入止神、薄暮、謁止神社、余十六七、以寺社吏、監葺此社、屈指距今四十六年、猶彷彿有記乎心目、乃訪社司、所嘗相識、上原刑部既已物故、其外孫曰伊膳者、迎揖為導、天霽無雲、月出東岡、衆皆幸蹈光、至邨民舍、時已張燈、倪叟觀迎、如逆旅主人、邨係重久、昔郡縣時、重久氏所世治也、乃邨長亦趨謁辨具、余憶昔遊、粗舉舊識、問伊膳等、多皆逝矣、但記余幼字者、猶有三四名未就木、而邑治、則細山田父子、止神、則伊膳母及岡氏老嫗等、此云、問齒憶之所謂母、時六七歳、老嫗踰七旬、知余所舍婦、時可三十也、嗚呼彼亦一時、凡人之代謝聚散、實出乎意料外、不堪感懐、乃占七絶、為吏青年謁止神、何期白髪再遊辰、無端四十餘霜後、来會多非面識人、此行、除余皆善國風、就中、清安親炙景樹、風靡晩生、常有追随、在受學耳、故如余吟詩、不有與推敲乞郢潤者也、聞老嫗未死、余有未遺忘、乃懺悔曰、髫齡喪父、為母所鞠、随意成長、記賤名亦猶病焉、其監此也、牆面嗤臍、至以泚身、始有少所憤發、幸得天寵、聞士人蔵四書經註注國字本、假而讀之、昼於社廟、夜於旅窻、神倦睡生、輒垂縄梁、以懸吾髻、猶坐熟眠、一夜主婦竊睹其状、誤為縊死、駭然揚聲大叫、檀主何為如是、余亦驚寤、語實相笑、即老嫗也、今不圖得復逢渠、不亦奇縁乎、坐中粲然皆笑曰、惟其有斯、是以伴探勝、此夜月霽、霜寒、十日早起、邑正細山某訪余、恵烟艸、延坐話舊、乃相識也、少余一年、往来講武、交臂一堂、君應十六、今也白髪、余特齒齡、陌頭相逢、惟是行路人、安得知為舊識乎、因具告曰、吾儕至此、在探神蹤、聞止神舊祠尾群山、得無有其址如陵而遺者耶、邑正曰、無嘗所聞、但有石二在関阪上、若行路人、或踞其石、輒必為祟(祟カ)、然亦里人不知有以云、乃雇導發、自邨就右、陟一窄阪、至尾群山麓、有墾田、導指阪右云、自古相傳、為止神憩腰石所在處、迨墾為田、没埋土中、今不可觀、乃去、訪老嫗舍、躧履歡迎、以急程故、恨又叙別、往觀邑治、左望一榛叢在田畝間、指問導者、云是隼人塚、既入士街、右陟石磴、抵念佛寺、在廨偏北可二町重久邨、奠彌陀像、運慶所刻、弘安中建、稟法於相之藤澤山、扁吉水山、寛公墨蹟、渾雅可敬、境固幽寂、寺亦

宏麗、可惜将及傾圮、自寺出、路岐左右、擇道所向、導曰、西出於桂阪、就来路則関阪也、余乃告清安曰、為崇石亦不可不往觀、遂赴関阪、經松永村、西行可二十町、為古関址、地名便覧謂、夕暮関此云、或聞往昔係霧島領、為栽華園、而其祭霧島、必奉神輿、幸於海濱、曰濱降祭、每神還御、輒暮乎斯、故得名云、據此疑是、公田與神領接堺関址也、益陟巖徑、左右峻嶺、阪亦崎嶇、路旁盤石疊出、其平如鋪筵、其隆起如象如牛、其峙高如屋如屏、伏底水行、擇間人陟、屈曲躋攀、足指漸仰、至阪将盡處、右觀両石、大可餘抱、相距可五六尺、導乃指云、為崇物此、豈可為陵、将別有以歟、按治安元年、藤篤(敦)如者、所謫居處、曰曽於御館、而子篤義所構居、曰阪上御館云、豈其所主祭故物乎、而行未幾、過入水阪川流忽伏、盡潜巖底、下數百歩而復見云、口窄於川、将伏噴雪、聞激聲如雷耳、歴春山野、野皆馬牧、在清水廃良可三十町郡田邨與本邑接界處、其周餘三里三町、四分之其一隷清水、其三分皆隷本邑、凡馬可二百、聞寛永間、在日州澤原野、後移於此、小憩吃烟、余不嗜烟、前躋阪路、可五六歩、清安徐歩、教導者報所過地名、余聞其云胸副阪、忽驩於心、然聞於遠、猶恐有誤、顧問導者、慇懃聽之、無亦所異、益驩坐叫曰、國史謂胸副國、豈其指此乎、清安踴躍、欲陟高丘覩曽乃峯以測稽之、遽攀旁岡、蓁荆不蹊、導指阪曰、今少進陟、有高敞處、四野峯巒、一眼可眺、清安乃降、由阪疾走、余亦競陟、實如其言、高聳東北刺天者、高千穂嶽、突兀西南吐青者、笠狹御碕、俗云野間嶽、□薩加世田、跨片浦・赤生木両村、自村□嶺高里許、距邑廃偏西五里餘、祀娘媽社、而嶽雖邇、非亦可呼、其将降也、遥向笠狹、則胸副阪、實在其麓、自然所道由也、歴歳悠邈、國除阪遺、口碑不朽、神蹤尚存、而無世知、以僻陬故也、余曰、先史探勝、未聞及此、吾儕亦不逢邑正、必赴桂阪、幾乎失之、幸由此徑、而獲知有斯阪、不亦神賜乎、清安歡甚、乃為歌曰、高千穂乃、胸副阪乃知連之茂、神農千和比乃、外奈良女耶波、余亦歌曰、阿毛理之天、神乃等保連留國哉此、胸副阪乃、名仁残流良武、各藉草而憩、又相語曰、於所未睹、猶獲神蹤、雖亦難知、惟斯阪名、揭将湮没、寔斯遊之功、可補國史缺以垂千載、誰為徒行哉、愈愀愈進、通

弘敞野、行遙右望、多冠菅笠、連絡出没乎松杉道、清安搖扇、招為京人、彼亦招應、未幾、降土阪、出於王子茶店前、就店小憩、頃之、笠徒亦来、揖清安等、果是京人、赤井今井二子導野村某、詣霧島者也、余亦名謁、由此正路也、經歴大窪・田口等諸村落、有阪陟降、亦不甚嶮、村口過橋、有官倉在川滸、是為大窪倉、街戸頗整、田口徑側、左躋石磴、有一小社、祀天忍日、崇曰天子、伴姓太祖也、偕清安謁、欲開寶扉觀其神躰、恨亦無鑰、有獅子像三四在外、朽蠹敗壊、不知幾百年物、存彷彿而已、降借士人廬、息足午飯、食畢又行過梅北橋、可數百歩、高低取歩、無有峻阪、漸向山進、有木華表、過而益行、有仁王門、左右奠巨像、仰覩扁、曰霧島山、自門遙望、深山幽境、僧房數區、裝點樹間、而當其正面、殿堂門廡、最崇構、而巍々然者、所謂華林寺也、入門、降石磴數十級、有橋架両岸、溪水漲流、奇石怪巖、如臥如立、激湍雷轟、潴淵藍碧、使人戄然、亦山水秀絶、靈域罕比、右覩宮徑、左陟石磴、則華林寺庭除廣敞、頗為壮麗、○○

（季安自筆、頭注）

「○○此襲山紀行、□（陟カ）華林寺、至覩壮麗、閣筆不能、成就此篇、時會急速有著述事故也、後廿四年、元治甲子（元年）、迨　官遣季安、導栗原又樂（信充）翁、詣霧島聊作七絶、

2

宿華林寺　　季安

遠尋山寺踰青岑　塵外娛心流水琴
留客住僧花杯裏　唯人是莫不知音

山行十里到温泉　浴後涼風欹枕眠　　季安
夢裡如聞終夜雨　覺知斯榮尾溪川

山涌仙液化温泉　泉有神能使快眠　　信充
夢裡南柯封爵貴　地名榮尾酒如川　」

高千穂峯、即今霧島嶽、在府城距艮位十三里餘、大隅國贈唹郡贈唹郡郷田口村、　皇國五岳山（見神社考、和州金剛寶山、城州如意宝山及愛

宕山、江州比叡山、日州高千穂峯、之一、而嶽跨日隅、其方東屬日州諸縣郡、方西屬隅州囎唹郡、神社皆建於其麓、西今曰西御在所或西霧島、東今曰東御在所或東霧島、各載于後、按養老四年、舎人親王所撰日本記五月癸酉功成、奏上前此□年（七カ）和銅七年二月戊戌、詔紀朝臣清人・三宅臣藤麿令撰國史、雖見元明紀、不書其成、但太朝臣安麿及親王奉詔、見日本紀、慶長跋本耳、天照太神之子、天忍穂耳尊、娶高皇産靈尊之女栲幡千々姫、生天津彦々火瓊々杵尊、皇祖産靈尊、特愛深崇、欲立令主於葦原中國、屢遣先駈、迨經津主武甕槌二神復平定命、載神代記曰、高皇産靈尊、以真床追衾覆於皇孫天津彦々火瓊々杵尊（一書天津彦下有国光二字）使降之、皇孫乃離天磐座（一書離作引、開又座作戸）且排分天八重雲稜威之道別、而天降於日向襲之高千穂峯矣、既而皇孫遊行之状也者、則自槌日二上天浮橋、立於浮渚在平處、而膂完之空國、自頓丘覓國行去、到於吾田長屋笠狭之崎矣（一書崎作御碕）、其地有一人自號事勝國勝長狭、皇孫問曰、國在耶、以不對曰、此焉有國、請任意遊之故皇孫就而留住、時彼國有美人、名曰鹿葦津姫（亦名神吾田津姫、亦名木花之開耶姫）、皇孫問此美人曰、汝誰之女子耶、對曰、妾是天神娶大山祇神、所生兒也、皇孫因而幸之、即一夜而有娠、皇孫未之信曰、雖復天神、何能一夜之間令人有娠乎、汝所懐者、必非我子歟、故鹿葦津姫忿恨、乃作無戸室、入居其内、而誓之曰、妾所娠、若非天孫之胤、必當焼滅、如實天孫之胤、火不能害、即放火燒室、始起烟末、生出之兒、號火闌降命（是隼人等始祖也）、次避熱而居、生出之兒、號彦火々出見尊、次生出之兒、號火明命（是尾張連等始祖也）、凡三子矣、久之、天津彦々火瓊々杵尊、崩因葬筑紫日向可愛（此云埃）之山陵、又按一書、猿田彦大神對天鈿女曰、天神之子、則當到筑紫日向高千穂槌觸之峯、吾則應到伊勢之狭長田五十鈴川上、因曰、發顕我者汝也、故可以送我而致之矣、天鈿女還詣報状、皇孫於是脱離天磐座、排分天八重雲稜威道別（衍カ）道別、而天降之也、果如先期皇、則到筑紫日向高千穂槌之峯、其猿田彦神者、則到伊勢之狭長田五十鈴川上云々、

伊地知季安稿

3（追筆）

「　伊地知君の襲山考をよミし時、

伊勢人のふミたかへてし高千穂の

ミねもミちある御世に開けつ

信充

右、元治元年甲子七月、栗原又樂翁為被遣短冊、嶋津求馬殿取次奉頼　御前ニ差上未被相下ケ也、

4

伊地知君八十三、われハ七十二、ともにむなそひの
坂をのほりしかハ、
むなそひのさかしきミちをさきたちて
のほる八そちになゝそちのとも

信充

」

襲山考

襲山考

中古以来、貽疑乎高千穂址、異説往往紛亂乎世、獨於我藩、自古世傳、咸為霧島、而未嘗知世有疑之者也、故季安歴稽史説、質諸藩史白尾子説等、有以考焉曰、日本書紀、養老四年所成書也、其修之也、群書異同、難乎折衷、竝載備考、所謂一書皆是也、如夫天降、神代巻則曰、天降於日向襲之高千穂峯矣、既而皇孫遊行之状也者、則自槌日二上天浮橋、立於浮渚在平處而、膂完之空國、自頓丘（按頓丘之頓、猶雉頓使之頓、丘若其然、則義與空同、今俗空腹曰比多留志、亦此意也、）覓國行去云、又一書、猿田彦對天鈿女問曰、天神之子、則當到筑紫日向高千穂槌觸之峯、舊事記同之、又古語拾遺曰、當到筑紫日向高千穂槌觸之峯、又古事記曰、天降坐于筑紫日向之高千穂之久志布流多氣、凡以筑紫繫日向者、多略襲之、否略高千穂、如舊事記曰天降坐于筑紫日向槌觸二上峯矣、此擧大略小例、可併觀也、又一書曰、降到於日向槌日高千穂之峯、而膂完胸副國、自頓丘覓國行去、立於浮渚在平地、乃召國主云云、又一書曰、降到之處者、呼曰日向襲之高千穂（添カ）□山峯矣、及其遊行之時云云、又所採上一書亦曰、降来到於日向襲之高千穂槌日二上峯云云、又山城風土記亦曰、日向曽之峯天降坐神、凡略筑紫、而自日向言者、多書襲之、而所謂襲之、續紀延暦七年七月己酉、則書大隅國贈於郡曽乃峯、又十三年八月癸丑、藤継縄等修國史表曰、襲山肇基（見于後紀巻一）、又類史幣帛例、弘仁五年二月乙酉、書大隅國曽於郡□嶋□、（按郡下□、蓋霧也、嶋下□社也、姶良本耳、）又六年、姓氏録序曰、天孫降襲、又懐風藻序曰、襲山降蹕之世、凡約文而提其要、則皆如是、只曰襲山或只曰襲、而山城風土記曰、日向曽之峯天降坐神、又長門本平家物語曰、日本最初峯霧島嶽、據此觀之、凡其曰襲之、若副國、或添山峯、或曽乃峯、或襲山、或曽之峯、或最初峯者、則皆指大隅國贈於郡霧島嶽明矣、但贈於郡、本隷日向、和銅六年□月（四）乙未、割贈於等四郡、始置大隅、後歴五年、至養老四年、而日本書紀成於其年、則應（マサニ）以大隅繫襲之上、然尚言日向襲之云云、則所証書、皆既成於其以前者、而採載之、只仍舊文、可以知也、否其成之猶在日向時亦可觀也、蓋神代以後、以高千穂名此峯者、久矣、其為地也峯高麓盤、皆係襲國、故曰添山峯、或曰曽乃峯、

或曰襲山、而其峯麓則一而其頭二分東西、故曰二上若二上峯、以高千穂為其總名、後和銅中、迨置大隅、分為両國、山之所跨、東則隷日向國諸縣郡、西則屬大隅國贈於郡、但二上峯在其絶頂、分而為二、其一聳東、植矛於巔、故名矛峯、又一聳西、而此峯則因屢發火、名火常峯、以其二峯各異其頭、名曰二上、而中間則凹而其邱如馬背、因名迫門丘、凡躋攀者、先至迫門丘、而登二峯、故名二上、頭與登之義、所以異也、夫上古神廟、在迫門丘、祀瓊瓊杵・火火出見・葺不合尊等、蓋當時謂其廟、曰高千穂宮(觀兒湯郡妻社謂瓊瓊杵廟曰高千穂宮、可推知焉)、然延暦七年、發火於峯、爾後神廟蓋其雖在、不能就祭故、承和四年八月、則以其在半腹(高原郷蒲淖村)霧島岑神、先預官社、而迫門丘亦蓋寖得登、於是乎、(承和)十年九月甲辰、授無位高智保皇神從五位下(見積後紀)、後十六年、天安二年十月廿二日、授從五位上(疑下之誤)高智保神(以下季安自筆)從四位上(三代實録)、竝謂下上古在二迫門丘一之廟上、可二想知一也、但略二郡名一、只繫二日向國一、蓋峯火未レ滅、未レ有レ所レ隷也、今按二縁紀及元亨釋書・平家物語一、謂三霧島為二日本最初峯一、祀二六所權現一、事見二物語一、又釋書載二僧性空一云、平安城人犬中大夫、橘善根之子也、母源氏、以二延長六年戊子一生、十歳持二妙法華一、天慶八年乙巳、十八歳而削二髪叡山一、應和三年癸亥、三十六歳而出レ家、尋二深山於人跡不レ至、鳥音不レ聞之奥一、適二日州霧島一、結レ廬居レ之、隔二數日一食、不二踰レ旬食一、或夢受レ膳、覺二肚能飽一、屢被二冥祐一云、時未レ知レ有レ本二地乎權現一、故欲下登二絶頂一、益誦二法華一祈上レ受二神勅一、限以二七日一、而當二五日一、闔山震動、猛火雷發、不二暫有レ止、於レ是性空乃避二烟火一、自二迫門丘一、遷二神廟於西麓二里許一、結二菴其側一、此則今曾於郡田口村所レ在西霧島宮及其別當華林寺也、以二六觀音一為二之本地一、而其創二梵刹一、亦肪二性空一云、凡居四年、康保三年丙寅、去移二于筑前背振山一、永延二年、又移二播州書寫山一、　村上上皇使召不レ起、長保四年、花山上皇幸臨二山廬一、勅寫二其像一、令レ記二行状一、方揮二彩筆一、山動地震、　上皇厚禮、寛弘四年三月十三日、誦二法華一圓寂、年八十歳、若二夫所レ植矛一、為二震火一所二燬レ折一(莫詳何年、延暦以後、發火於仁安二年・文暦二年・天文廿三年・永禄九年・天正四年、事見縁紀)近文禄元年、取下其所レ折鉾可二一尺一者上、奠二諸其東南麓三里許一、乃崇二

其廟一曰二荒嶽權現一、今在二諸縣郡都城郷不動寺村一、而今予峯、則惟其所レ残幹、可二六尺一者、仍レ舊存レ焉已、火常峯亦因二屢發レ火、為レ燃所レ崩、峯漸陵夷、却為二凹坑一、今謂二之御鉢一、平家物語所レ謂巓有二巖穴一、長發二猛火一、烟氣衝レ天、忽雨二灰砂一云、新井氏所レ謂御池、亦皆此也、抑山之為レ靈也、與

（以下異峯）

衆峯異、而半腹上、善帯雲霧、二峯隠見、如示靈異、故自其奇而曰槌日、或曰槌觸、日與觸之為言也、猶言神左備神左布流例、樓即奇義、觀其或書高千穂槌日二上峯、或書槌日二上、或書高千穂槌觸之峯、或書槌日高千穂之峯、則槌日槌觸之語、可知其初非以名峯也、或繫之上、

※（上ノ図コノ間ニ記サル）

曰槌日高千穂峯、或繫之下、曰高千穂槌觸之峯、錯置互文、要之、槌日如繫二上、蓋言其為靈奇與衆峯異、如其句法、猶繫少男上曰可美、或繫小汀曰可怜之類也、又一説、因日向舊名豊久志比泥別、以繫其峯、亦曰槌日、又因有峯、以名其國、亦舊則曰建日別、後改熊襲云、又一説、因峯東所連、有諾尊斬火雷之址、三段所斬二巨石、東一段下、幅九尺九寸、高七尺二寸許、西一段石、高五尺五寸余而、一段飛去在宮崎大島云、得霧島名、乃皇孫祀諾尊於

其址、而姑行宮焉、故今謂其郷、猶曰高城、又謂其村及神社、皆曰東霧島、則延喜式所謂、諸縣郡一座小霧島神社、及三代實録所載、天安二年十月廿二日、授日向國従五位下霧島神従四位下云、蓋皆言之、而又一説、因有此社、繫矛峯亦以霧島、而祀諸冊於其東半腹許、今曰東御在所両所權現、在諸縣郡高原郷蒲淖田村、則續後紀承和四年八月壬子、日向諸縣郡霧島岑神、預官社云、蓋亦此也、又蒲淖田邨、有原名狹野處、自古傳為神武岳降地、故其幼也、名狹野尊、蓋取地名云、而又祀瓊瓊杵・神武等於此、今曰狹野神社、此也、所謂霧島字、後紀以前、未有所覩、其見古書、蓋自弘仁・承和間始、而從續紀延暦七年發火於曽乃峯、至弘仁・承和間僅二三十年、則其名霧島、蓋在其間、近我櫻島、發火於安永八年、爾後到今、剩五十年、猶帶烟霧、推此觀之、因以霧如示奇、似得其名、但配島字、由其岑秀起乎浮渚在平處云、亦通也、又贈於郡有郷名志摩國用島云、見和名鈔、蓋國人常呼霧島、多略霧字、単以島呼、猶諸島人、今呼其郷、只曰島例、遂為地名可亦觀也、但和名鈔志摩郷、及續紀曽乃峯、皆載贈於郡、則在西霧島隣亦可知矣、而曽乃字、則本襲也、續紀令諸國定郡郷名、各為二字時添之韵、書曰贈唉、猶紀伊例而今曽於郡也、至今、方俗雖書曽於、呼曰曽乃、尚不異於延暦時、而自神古時、大隅隼人世領其地、因以曽乃君為其姓號、則續紀天平十三年閏三月乙卯、授外正六位上曽乃君多理志佐外従五位下云、又十五年七月、賜饗於隼人等、授外従五位下曽乃君多利志佐外正五位上云、又天平勝寶元年八月壬午、大隅・薩摩両國隼人等、貢御調并奏土風歌舞、癸未詔授外正五位上曽乃君多利志佐従五位下云、而天平寶字三年十月辛丑、天下諸姓着君字者、換以公字云、由是多利志佐等、改書曽公、則神護景雲三年十一月庚寅、天皇臨軒、大隅・薩摩隼人奏俗伎、授曽公足麿外従五位下云、此類也、而今曽於郡曽於郡郷、尚有杜名隼人塚、在於郷之止神社西數百歩、而祀其先神火闌降於同社庭、曰大隅神社、又其隣郷國分亦有隼人城遺墟、在於要嶮所、蓋火闌降以来、神胤隼人所世居也、正長二年十二月十五日、曰伊季者、記上小河里山野境、云西境隼人城乾隅境弟子丸名之類、皆足以証其當時焉、上小河里、舊

名曽小川、而所謂梟帥居其川上、故曰川上梟帥云、其云曽小、則曽於訛、後分上下、今為村名、隷國分郷、弟子丸亦為村名、隷清水郷、詳見下文、而隼人城、後大永五年九月二日、清水城主本田親安称三河守攻而取之、事見樺山玄佐自記、迨以清水尚為居城、以隼人城新為産城、遂名新城、一説慶長十年貫明公徙都于此、名新城云恐誤、城有巖穴、曰長狹懐、此隼人所栖云、因祀隼人為天文五年事、今尚存焉、又曽乃字、則天福二年三月十六日、重枝證書題曽乃郡司殿曳文、或作曽野、文治三年四月十一日、檜前篤平、曰先邑萩原在曽野郡、自天福下、皆清水郷臺明寺文書、下沽券亦同之、或建久九年三月注進大隅國圖田帳亦書曽野郡司篤平、或作僧乃、見貞應二年二月十日僧圓慶之沽券、字雖或異、皆與續紀合、而神代所謂襲之與我曽乃郡、無毫可疑、如上所証、而今嶽之西南有地名胸副阪、在曽於郡春山野、進陟其阪四野高敞、而聳東北刺天者、為高千穂嶽、又秀西南吐青者、為笠狹嶽今野間嶽、實足以証覓國行之神蹤焉、稽之念佛寺文書、長享三年、有地名胸副利、凡四段、蓋亦阪邊也、但高千穂、中古土人其呼之亦常曰智尾、遂為地名、亦在曽於郡、觀康暦三年五月廿日 齡岳公本藩六世賜弟子丸若徳書、曰曽於郡智尾名事者、可以証也、若徳姓建部氏、世領弟子丸、因以為氏、建久八年圖田帳載弟子丸五町、田所建部宗房所知者、蓋若徳之先也、弟子丸既見上文、而弟子丸村今有乳母神社、弟子丸氏世主祭之、無佗名智尾地、則知康暦後寖失其名焉、於是乎、古之為風土記者、亦載是事、曰、皇祖裒能忍耆命天降於日向國贈於郡高茅穂槌生峯云、實可謂與世所撰史無乖戻矣、而其風土記、天文以前、尚傳于世、文安三年五月、觀勝寺僧行譽者、著埃嚢抄凡五百三十六條、共為七巻、後又沙門天文元年二月、繼補遺漏、増為二十巻凡七百三十七條、更曰塵添埃嚢鈔、其第二巻六十六條、引此古語、以説竹刀事、據是觀之、風土記原本、則言高茅穂峯在贈於郡亦足以証焉、然迨其後寛文中通村郷承台命繕寫斯書、則塵添所載風土記之語、無見其本、必知卿等未嘗知別有天文前良本矣、惜乎、當時只得弘治中所残缺本、寫以呈上、而今其本、専行乎世、則載臼杵郡知鋪郷之所以號知鋪等、雖然至如贈於郡高千穂之事、皆缺而亡矣、是故、本居氏之以博識亦尚至不免無惑於其間也、然於歴史、既書天降於日

向襲之高千穂峯矣、或書日向襲之高千穂添山峯矣、觀其峯字下両置矣字、亦撰者意、則知其所決定者、明驗莫善焉、故提其要、則只書襲山肇基、或書天孫降襲、或書襲山降蹕、自有書後、至弘仁中、既有明文、以傳乎世、故續紀、則載曽乃峯於贈於郡、風土記天文以前古本、載之贈於郡、大八洲記、以襲國為大隅國贈唹郡、平家物語、日本最初峯霧島嶽云、歴歴著明、無間然焉、則曷更可妄求諸贈於郡之外而得焉乎哉、但延暦時、省高千穂字、只書曽乃峯、書紀載高千穂添山峯、至是則省上中爾、而後更名霧島、説見上文、自時而於日向群峯、寖至乎如無別曰高千穂者、且古之所謂襲之高千穂、亦至康暦中、略號智尾、而僅存其名於曽於郡之地、則於臼杵方、蓋好事者、頼其地固祀高智保皇神、而書紀等記其天降、多雖曰日向高千穂峯、所謂二上、為屢發火所頽峯容、而名亦随易、如無可當於日向者、後人妄採天孫降襲之古説、以名其郷、謂之知鋪、又為是名一岡山、曰高千穂山、而所連山、各命之名、曰槌觸峯、曰速日峰、曰高天原、曰槌觸峯、皆在郡之三田井村、又曰二上峯、在郡之内押方村、祠二上明神、又有稱瓊瓊杵・火火出見両山陵處、所謂峯者、非皆可與霧島比高嶽、只樹木繁欝而已、且於一村、有両槌觸峯、又隔村、別有二上峯、況偽山陵、多不足信、要之、蓋後世粗聞史説者、撰諸神蹤、妄命郡峯、以合古史、故其致誤、有如此者、但有知鋪郷、蓋迨其既天降後、覓可都地巡幸彼此、因其所行在址、以祀其神、遂為郷名、可亦知也、故其古説、則實我霧島事、而到于今、尚能合焉、殊不知書紀所謂日向後多係隅薩之地也、故於臼杵、稽降襲迹、乖乎正史、如上所証、而今所謂高千穂山、言諸京洛、猶神樂岡、論之江戸、猶愛宕山、非固可與我霧島比其高大云、皇孫神徳、雖難亦測、曷得能天降焉乎、或曰、知尾名存曽於郡、見康暦書、亦尾與穂不合、則恐非高千穂之遺名也、季安對曰、穂與尾之訛亦久矣、建久八年日向圖田帳、於臼杵郡、書高智尾社八町、且文保元年十二月廿一日幕府政所、以我　道義公藩侯四世為諸所地頭下文、亦書日向國高知尾荘、彼此既訛以行乎世、如此也矣、可不証乎、問者乃服、又我霧島山南麓、有地名宮丸・都島等處、迨天授元年島津資忠城于都島、改曰都城、其為地也、平野沃壤、

方餘十里、四繞峯巒恰如舊都、而有地名都島・宮丸・高城・高原・都街道奥宮、亦古事記所謂高千穂宮之遺址云、是以、我藩自古相傳、以霧島嶽為高千穂峯、而莫獨貽疑者、可謂有世所承矣、近至本居氏古事記傳盛行于世、讀者往往疑贈於郡霧島嶽與臼杵郡高千穂山、有両可説、多惑眞贋、故我藩史白尾國柱、探勝臼杵、觀而覺非、有所著書、今也季安、編伴氏譜、由獵史傳、以輯天忍日命為前駈瓊瓊杵尊天降於襲之高千穂峯之事、粗有所考、故贅于此、以竢来哲爾、

（此本ハ「襲山考」次イデ「襲山紀行」ノ順ニ合冊サレル、本書ニハ「襲山紀行」「襲山考」ノ順ニ収載シタ）

帖佐来歴

（表紙）

伊地知季安先生手記

帖佐来歴

帖佐来歴考　　伊地知季安漫撰

帖佐略考

正宮領ノ時地頭等ノ事

（ハリ紙）

「帖佐来歴　　本府隠士　伊　季安　艸輯

第□（一カ）頼朝公御代正宮領にも地頭置かるゝ事　」

（コノハリ紙ハ右ノ表題ノ上ニ付サル）

1「建久圖田帳」

○大隅國

注進国中惣田数寺社庄公領并本家領所地頭弁済使等交名事

「此間文略」

帖佐郡三百七十一丁丈（二カ）（二カ）

正宮領

本家八幡　地頭掃部頭（中原親能）

為半不輸正税官物者弁済於國衙也、

御供田九丁七段小

寺田廿六丁六段

小神田六十四丁九段半

大般若三丁

經講浮免十四丁□段（二カ）　聖朝府國御祈禱料

國方所當弁田

万徳五丁三段大丁別十疋

恒見八丁七段大丁別廿疋三大

宮吉五丁丁別八疋

正政所十丁丁別十五疋

權政所五丁丁別十五疋
公田六十八丁四段半丁別廿疋村々十ケ所
「此間多文略ス」
右、件惣田数、任御教書之旨注進如件、
建久八年六月　日　　大判官代藤原
「外四名略ス」

2 ○大隅國注進御家人交名等事
國方　税所篤用云々　帖佐郡司高助
宮方　政所守平云々　肥後坊良西
右、件御家人、為上覧、各交名大略注進如件、
建久九年三月十三日（旧十二）　○（旧諸）司検校大中臣時房
「外二人」
（本文書ハ「旧記雑録前編一」一七八号文書ノ抄ナルベシ）

3 「東鑑」
○元久元年甲子九月（十カ）十七日、大隅國正八幡宮寺訴申事、
被經沙汰、是故、右幕下御時、掃部入道（頭脱カ）寂忍為正宮地頭之處、宮寺依申子細、（被カ）御停止其儀訖、其後又三箇所補（被脱カ）三人地頭之間、造營（宮カ）之功難成之由云々、仍今日所止彼地頭職等也、帖佐郷地頭肥後坊良西・荒田庄地頭山北六郎種頼・萬得名地頭馬部入道浄賢云々、廣元朝臣奉行（之カ）也、

季安按、帖佐ハ舊ヨリ正宮領ナリシニ、　右大将頼朝公日本國中惣地頭ニ補セラレ玉ヒシ時ヨリ、掃部頭親能入道寂忍大友氏正宮領ニモ地頭ト為ラレシニ、正八幡ノ宮寺ヨリ子細ヲ申上ルニヨツテ寂忍ノ正宮領ニ地頭セラル事ハ停レ、其ヨリ後ニ又肥後坊良西ヲ帖佐郷ノ地頭トナシ、山（ヤマ）北六郎種頼ヲ荒田庄ノ地頭ニ、馬部入道浄賢ヲ万得名ノ地頭ト、三人ヲ正宮領三ケ所ノ地頭ニ補セラレシニ、正八幡ノ宮寺ヨリ其通ニテハ造營ノ功モ成リカタシ迚、マタ〳〵鎌倉ニ訴申タレハ、右ノ元久元年子九月十七日、大江廣元奉行ニテ三人ノ地頭ヲモ亦止ラレシト見エタリ、其ヨリ留守職ノ支配トナリシニヤ、建治二年ノ頃ナ

トハ留守刑部左ヱ門尉真用カ領分多カリシト見ユ、
但彼地頭ハ止ラレタレト、國方ノ高助カ帖佐郡司ハ
本ノ通ナリシニヤ、建治ノ頃ニモナホ郡司榮継領ト
云アリ、左ニ詳也、

『第二正宮領依申分留守職支配に成事』
正宮領ニテ留守領ノ事
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

4
「建治石築地賦」

○帖佐西郷二百四十丁九段三百歩除貢進田五丁定二百卅七丁五段大
公田百四十三丁五段加宮吉五丁并福田寺田定除貢進田五丁
大山十一丁九段大加神田寺田定除貢進田五段
『今山田ニ大山村アリ』
正宮留守刑部左ヱ門〔尉〕(㊀ナシ)真用
定田十一丁四反一丈一尺四寸六分
『今ニ帖佐ヘ深見村アリ』
深見七丁九段同同
同人領
定七丁四反七尺四寸
『山田ニ中河良村ト云今アリ』
中河良九丁反同同
同人領
定八反八尺六寸
『山田ノ内麓村ニアリ』
山崎八丁三反小同同
同人領
定七丁八段小七尺六寸四分

寺師十丁七反加神田寺宮吉定(田脱カ)除貢進田五反
『今帖佐ニ寺師村アリ』
定九丁反小九尺一寸四分
同人領
中津乃十二丁五反大加神田寺田宮吉定除貢進田五段
『今帖佐ニ中津野村アリ』
定十二丁大二尺六分
永世七丁七反小加神田定除貢進田五反
『今帖佐ニ永瀬村アリ』
定七丁二反小七尺四分
越前検校覚禅
住吉十三丁九段半加神田宮吉定除貢進田五反
『今帖佐ニ住吉村アリ』
定十三丁四反半一丈三尺四寸五分
弁済使平左近入道円佛
船津十四丁反三百歩加神田寺田定一丈四尺一寸八分
『今重富ノ内ニ船津村アリ』
臺明寺住侶葉心房(㊀五)
餅田廿七丁四反小加神田寺田定除貢進田一丁
『今帖佐ニ東餅田西餅田ト両村アリ』
定廿六丁四反小二丈六尺四寸四分
御家人税所介義祐
神河九丁五反加神田寺田宮吉定九尺五寸
『神河松武恒見万得等ハ今帖佐ニ聞カス、重富ニモアルカ』
松武一丁五反一尺五分(㊀寸)
権政所助道領
恒見七丁七尺
郡司榮継領
万得(㊀ナシ)〔名〕七十五丁半加神田寺田定
留守刑部左ヱ門尉真用領

平山卅一丁八段半加神田定三丈一尺八寸五分　同領
『今在帖佐三十町村ノ内』
千本十丁七段六丁（ママ）同一丈七寸二分　弁済使紀四郎右馬
『帖佐ニ千本村ト云アレトモ洪水ニ洗崩シ今ハナシ』　允真能
豊富十一丁九段小同一丈一尺九寸四分　留守刑部左ヱ門尉
『今帖佐ニ豊富村アリ』　真用
柴畠二丁六厂（反ヵ）加宮吉定二尺二寸　美濃阿闍梨
『以下六行ハ帖佐ニ聞コトナシト云』
寺田十五丁四段
法樂寺三丁三尺　源八入道光佛
百堂九丁四反九尺四寸
新三昧一丁一尺　奉行權惣檢校
最勝寺領甑二丁二尺　留守刑部左ヱ門尉
真用
「此外略ス」
右、件石築地役、任関東御教書并少貳殿御施行之旨、
以八月中、可終其功之状如件、
建治二年八月　日　調所藤原在判
書生藤原在判
惣官大蔵
大介兼税所藤原在判
守護代左兵衛尉藤原在判

（本文書ハ「旧記雑録前編一」七七三号文書ノ抄ナルベシ）

季安按、右ノ通『建治ノ比』蒙古襲来ノ説アリテ、筑前宮崎ニ築地シテ役所ヲ建ラル時、夫々領分ノ町段ニ應シテ寸尺ヲ賦リ、御手傳ヲ仰付ラレシ『ト見ヘタ』『其』頃迄ハ平山卅一丁ハ正宮留守ノ領ナリシニ左ノ通相替レリ、

『第三平山家下向正宮領を司り一族繁榮にて彼此の事』
正宮領ニテ平山領ノ事
『〻〻〻〻〻〻〻〻〻』
弘安年中、城州石清水善法寺了清下向して八幡領の所司且平山村領家職と為り、神領を掌れり、名勝志調に事ハ委しけれハ爰に略しぬ、

○平山城　今鍋倉村に遺墟あり、了清築て居る所也、

○新正八幡社　平山城中本丸ノ東ニ鎮坐、是則了清石清水ノ神輿ヲ守下て勧請す、

船津村　右船の着きし所とそ、また書出し委シケレハ粗言おけり、

○阿弥陀寺址　亦平山城内ニあり、了清建立と云へり、

奉施入大隅國平山阿弥陀寺撞鐘一口　四十八貫鑄之

弘安五年五月　日　石清水了清　金師慈蓮

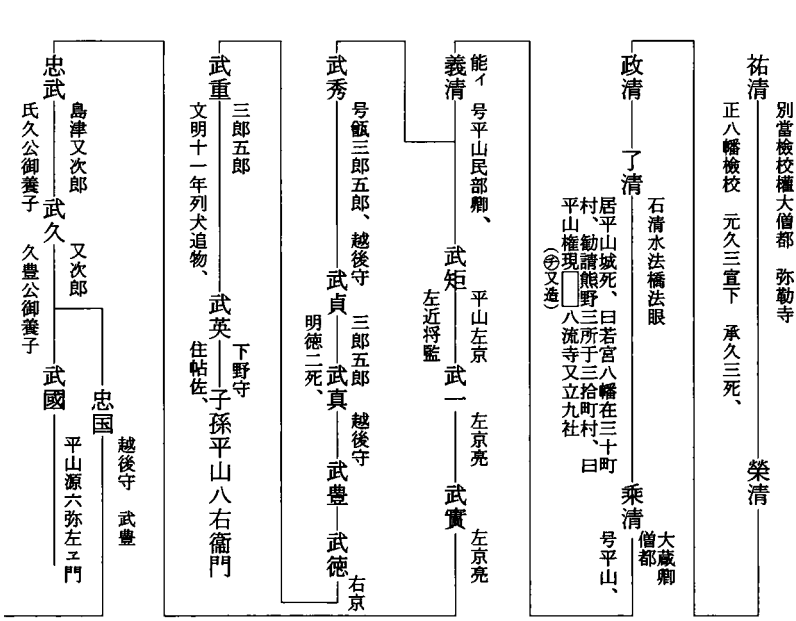
今此鐘、八幡別當寺ノ八流寺増長院ニアリ、本尊釈迦・阿弥陀・観音を安スト云ヘリ、又城内ニ観音寺ト云ヒシ了清建立ノ寺址モアルトナン、左アレハ初メ三尊別〳〵ニ寺ヲ建テオケルニ、後世阿弥陀・観音ノ両寺衰壊ノ時ニ至テ、合セテ此ヲ八流寺ニ安置スル乎、又蒲生八幡迄モ了清カ時ハ祀レルニヤ、嘉慶二年戊辰三月、蒲生清寛ノ置レシ鐘銘云、

隅州蒲生院　正若宮鐘銘

浄利置鐘其制尚矣　以故石清水了清施焉　然而形小聲微　貞和丁亥年今政府清寛六代祖清茂季子玄清改易　爾来撞之云々

右通アレハ了清同シク司レルナラン、

5　○　平山氏



（ハリ紙）

「〇　平山氏略系圖

祐清　別當法印　石清水検校　權大僧都　弥勒寺正八幡検校
元久三年宣下、承久三年卒、

寶清　号家田正八幡検校職、　家田法印猶子　實
善法寺祐清四男　宮清　亀山院廢子也、（ママ）

榮清　平山祖　法橋法眼少別當　政清　法橋法印大僧都
寶清弟一本宮清子、
榮清者祐清之弟子、受正宮領・平山領家職、

了清　石清水法橋法眼□（チ居平）山城、号平山、勸請熊野三所權現
於今三拾町村又營八流寺、於帖佐建九社、於帖佐卒、□（チ崇）若」

（コノハリ紙ハ前ノ系図上ニ付サル、以下ハ前ノ系図ニ統ク）
宮八幡云、廟在三拾町村、

乘清　大蔵卿　権少僧都　民部少輔
号平山、　能清　薩摩守　武矩　左近将監
一本左京
□（チ行）□（チ言）照清

武秀　二男　三郎五郎　越後守　居帖佐
内甑城、号甑、氏神甑大明神　平山左京弟

武貞　三郎五郎
明徳二年死、

武義　美作守
應永六年卒、　武眞　越後守

武豊　三郎五郎　武德　右京助造立
有功、限城合戦『甑一ノ二ノ宮大明神』
『棟札　宝德元年己巳十一月廿六日大旦主武德并義武』

武重　三郎五郎　武英　下野守　常真
文明十一年　亨住帖佐、
忠昌公列大追物、

武一　左京亮　武實　左京亮
左近将監

武頼　小川氏祖

忠武　島津又次郎　武久　島津又次郎
久豊公御養子

忠秀　元久公賜諱字、
市成氏祖

忠國　親トモ　越後守　武豊　平山源六
弥左ヱ門

忠正　源六　忠兼　源三郎
備後守　越後守

俊久　源四郎　忠親　弥五郎
又左ヱ門　備後

此子孫鹿府士平山五郎
右ヱ門

武清　三郎五郎　兵部左ヱ門　天文七年生、

武政　正右ヱ門　勝左ヱ門　祐心　去帖佐居城、守大始良、慶長十九年、改甑号平山、

平山東忠国公以上三代相續恐

武國　之本名ノ字、武字名乗了、

武吉　平山主計頭『高岡平山次八□』　城園寺

武清　左京進

女子　伊地知殿妻

此孫平山八右衛門

6の1

○平山善宝寺大隅國帖佐下向以来祖（庶）子名字事

嫡家平山　祖（庶）子餅田・中津野・高城・甑・平瀬・平松

6の2

○善宝寺殿御供衆内名乗氏聞書

曽我殿藤原名乗字助、窪田殿平重、上杉殿氏藤頼、今井殿氏藤兼、新原殿藤利、薗田殿藤俊、松本殿源信、河崎殿氏市井名乗字信、本渡殿氏平盛、若松殿藤廣、堀殿源頼、上嶋殿氏惟宗友、車田殿氏源名乗政、

6の3

『○如仰雖未入見参候、兼承及候キ、抑向嶋東西所務事、嶋津又三郎殿ニ御談合候て、御知行〔候〕（正ナシ）事承〔り〕（正ナシ）候、就其御年貢不可有懈怠之由（正候）▽（正）承候△、目出候、京都事ハ御心安可被思召（正食）候、（正補）任状并地下之御教書申沙汰（正夜）候、御年貢奉行分領家預所御志以下、任先例継（正沙汰候）様於日御候、喜悦入候、（正委）巨細事筑後禅門存知、恐惶謹言、

七月七日　　前筑前守秀秋判

謹上　平山左京亮殿　』

（本文書ハ「旧記雑録附録一」六五九号文書ト同一文書ナルベシ、尚本文書ハ前記事ノ行間ニアリ）

6の4

（別紙）

「□庄屋之松元次兵衛之□本文ニ□平山先祖下向之砌供いたし罷下候松本氏ニてハ無之哉、左候ハ、源姓ニ而家字ハ信と見得申候、私先□（祖ハカ）平□（山カ）ニ而重欤季字□御寫またハ御借入可被下候、紀姓平山一族ニも□申事候へとも相付□候家ニて一族ニハ有之ましく候、爰本坊中之松本寺ハ先年帖

佐へ被建候寺と申事候、願成寺之□□朱書いたし置候、」

7

○　紀姓西郷并荒田氏系圖

- 宰相　仁王八代孝元天王ヨリ卅五代孫　正八幡三所大菩薩　大隅国帖佐西郷弁
  - 紀成清法印祐清　修理別當　權別當　檢校　前權大僧都　弥勒寺正八幡宮別當　元久三年丙寅正月四日薨、
    - 弁清
    - 棟清　修理別當　權別當　權　少僧都法印弥勒寺別當
      - 荒田庄宗良法印　童名六郎丸　正八幡宮法印弥勒寺別當　權別當
        - 日高筑前守源義里御子宗義、其御子為宗、其御子六郎丸宗良法印、彌勒寺別當石清水棟清法印奉養子下向、御供大坂式部少輔・高水治部少輔・畠中法眼、将軍頼家御代、元久元年甲子十月　日
        - 妙清
          - 朝清
          - 龍清
        - 棟真

- 宗清　六郎　丹波守
  - 宗友　左馬頭
    - 宗次　六郎右衛門

○平田氏系説云、内大臣宗盛之二男従五位下土佐守能宗號帖佐、能宗二男至宗増改帖佐初号平田信次郎云々、一説平田氏者帖佐古城主肥後房良西之子孫也、

○此度本田親章、西餅田村ノ内雲門寺ノ山中ニ御石ト里人ノ呼ヘル大キ五輪石塔見當リシトテ、左ノ通銘ヲ寫シヤラレタリ、

正應二年六月下旬頭阿彌陀　大施主乗□知レストナン

季安按、正應二年ハ石清水了清ノ下向セシ弘安五年ノ頃ヨリハ僅八年アト也、左アリテ了清ノ子ハ乗清ト云ヒ、且了清阿彌陀寺ヲ平山城ニ建タルコトトモ考合スレハ、顕阿弥陀ハ其法号ニテ子乗清ノ施主ニテ建タル古塔ニハ非サル乎、ヨク乗ノ字ノ下ヲ清ニテハナキカ

今少シ改究タク想ヘリ、

○延元三年戊寅、平山式部少輔日州南郷大和田城ニ據テ肝付八郎兼重ニ黨セリ、七月十一日畠山直顕発向シテ攻之、翌興国元年己卯(ママ)四月十三日落城ストアリ、此紀姓平山ノ族人カ、

○小烏大明神

『今東餅田村ノ小烏ニ在リ』

右河野四郎通定、貞和三年丁亥三月五日、隅州帖佐ニ下向シテ富田ニ居住シ在名富田ヲ名字ニ名乗リ、三島大明神及ヒ若一王子ノ社ヲ創建シテ小烏大明神ト崇メタルコト、季安家ノ付郷士加久藤預リ河野淵右ヱ門カ古系圖ニ見ヘタリ、

○林清庵　今鍋倉村之内ニ畠地壹反六畦餘御免地アリ、總禅寺支配ナリト云ヘリ、季安福崎氏ノ古系圖等ヲ按ルニ、觀應二年辛卯九月二十八日、　齡岳公筑前金隈ニ軍タチシテ、一色右馬頭範光ノ軍ヲ助ケ玉ヒ、御手ヲ負ハセラレ既ニ御戦死ニ究メラレシ時、従軍シタル伊地知弾正忠季隨其以前道鑑公ト御同番ノ士ナリケルカ、罪ヲ　尊氏将軍ニ得テ獄中ニ危カリシヲ、　道鑑公御恩地ニ仰カヘラレテ御訴ヘメシ玉ヒシ御恩故ニ罪ヲ免サレケレハ、誠ニ命ノ主トテ下向シテ臣事セシ者ナルガ、則自カラ願ヒテ　齡岳公ノ御鎧ヲキカヘ、詐テ島津又三郎氏久ト呼ハリ御身代リニ討死シケリ、其時弾正忠カ自ラ随ヘシ家臣福崎主税助能廣ニ申付、汝ハ如何ニモ奇計ヲ廻シ　公ヲ難ナク御供シ歸レトノ主命ヲ守リテ、能廣ハ乃チ博多ノ出井ノ道場ニ走込、　公ヲ匿シ御手疵ノ看病(カヒヤウ)シマイラセ、頓テ扁舟ニ棹シ、ヤウ〳〵御国ニ遁レ下リケレハ、　道鑑公大ニ悦ハセラレ、弾正忠カ菩提ノ為トテ寺ヲ鹿児島今ノ堀ノ内ニ建ラレ、林香庵ト名ツケテ尼寺ニシテ其恩ヲ報セラレ、又主税助ハ御内ノ者ニ召出サレ、特ニ知行モ下サレシト云ヘリ、其時主税助モ亦一寺ヲ帖佐ノ自分ノ知行所

此段ハ一六畦地餘寺ノ今總畠禅ニ寺モ候ヤ、モ来元弾正菩提ノ為カ正ノ福崎家臣氏メニ知行カ内ニ建タルノ仁位牌主光菴都輝法名カ弾正忠ハ、ナレハ文通本緒ノ、由ノ無之乎、トハ位牌ナクテ建地ハ其毛上向手祭キコトリタケヲ

也、主税カ法名ハ知ラス、子孫谷山ニ居テ今ハ伊地知ナリ、

ニ建立シテ、林香菴ノ林ノ字ヲ取リ林清菴ト名ツケ、弾正忠カ菩提ノ為ニシ、又主税助、自分ノ菩提ノ為ニハ宝動寺ト云ヘルヲ谷山ニ建ケルトノ赴キ其系傳ニ見ヘタリ、鹿児島ニアリシ林香菴ハ尼寺タリシコト、上井覚兼日記天正三乙亥十一月廿七日ノ條ニ、奈良木伊賀守ハ臨江菴ノ父ニテ、関豊前守カ下女、一両年前臨江庵ニ走入タルトノ口事一件詳ニ出タリ、其後元和六年四分一上地ノ頃、無縁ト為リ癈壊セシト考ハル、谷山ノ宝動寺モ今上福元村ノ地名ニ宝動寺トテ三門(間カ)許、後ニ山アル地アリテ、僅ニ地蔵堂遺リ居ケルトソ、地蔵ヲ法幢ト云ヘレハ法幢寺ナランヤ、伊地知猪兵衛ノ咄ヲ聞タリ、斯テ帖佐ノ林清庵イカニヤト日頃疑ヒ想ヘルニ、今尚御免地アルヲ聞テ、季安等先祖菩提寺ナレバ、一入歓喜シテ其来由ヲ粗此ニ述ル也、加世田唐仁原ノ西照寺ハ、弾正カ屍ノ流レ寄シ所トテ于今其墳寺アリ、尤弾正御名代ニ戦死シテ博多土井ノ道場ニテ御手疵看病シマイラセシコトトモハ、山田聖榮自記并同人目安ナト云古書ニ明證アリ、

8の1

○大隅國於御方致軍忠之輩交名注文「文和ノ比」可被成下御感人数事

平山左京亮　加治木中務入道云々

右、注進如件、

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二四九八・二五〇八号文書ノ抄ナルベシ）

8の2

大隅國佐殿御方凶徒等交名注文

税所介一族云々　平山因幡前司入道一族正八幡宮先社務

弥勒寺執當房道慶　同舎弟九郎左ヱ門尉

同舎弟十郎三郎　正八幡宮神官所司分杉五郎

右、注進如件、

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二四九九・二五〇九号文書ノ抄ナルベシ）

○餅田城合戦

畠山治部太輔直顕カ将軍方シテ　齢岳公ハ南朝ニ應シ玉ヘル頃、正平十一年丙申延文元年十月二十五日、　公南

朝ノ大将三條侍従泰季ト共ニ兵ヲ帥テ、加治木ニ入リテ岩屋城ヲ攻陥サレ、翌十二年丁酉『此年正月廿一日、合戦ニハ比志島太郎範平ノ中間平六右ノ股ニ疵ヲ蒙リ、同二十五日ノ合戦ニハ範平弟彦次郎範家被疵、三月廿日夜濱陣合戦ニハ範平先登シテ自身蒙疵、中間平六亦疵ヲ蒙タルコト伊集院帖佐太郎左ヱ門尉、久木崎五郎兵衛尉見知コト、泰季一見状ニアリ』（ママ）、左アリテ五月二日、宮方久木崎五郎三郎久春ナト云モノ、餅田城ニ寄セテ戦ヒシコトアリ、其時球麻郡人吾平藤九郎入道等モ泰季ニ従軍セシニヤ、左ノ通文書アリ、

9

承了判「當此三條泰季花押」

肥後國球磨郡吾平藤九郎入道

「キレ不知」去年正平十一年十月廿五日大隅國御發向之時、御共（供）仕依被召向「切不知」其後平山ノ内粁田城御陳之時、無断絶致合戦抽忠勤上者、早預談判、欲備末代亀鏡、以此旨（ママ）披露候、恐惶謹言、

正平十二年閏七月　日

御奉行所

○萩峯城

延文康安ノ頃カトヨ、畠山直顕カ軍奉行野元藤次秀安カ守ル所ナリ、　齢岳公兵ヲヤリテ攻メサセラル時、畠山ハ本田信濃守重親カ戍レル溝辺城ヲ攻テ双方難儀ナリシカハ、遂ニ和談トナレリ、事ハ山田聖榮自記等ニ見ヘタリ、

10

○任于能清能性代々相續之法、左京亮忠所之本領之事、無子細可有知行候、於向後者、此旨不可致違篇、恐々頓首、仍如件、

貞治二年九月十一日　　武久（花押）

平山左京亮殿

（本文書疑フベシ）

○應永四年丁丑四月下旬、山北ヨリノ大将上總介伊久ト鹿児島ヨリノ大将陸奥守元久ト兵ヲ合セテ清色城ニ押寄セラレシ時、平山・平松・平瀬・中津野・餅田・吉

田・蒲生振テ」疵打立トアリ、

○同八年辛巳九月、総州鶴田ヲ取巻ル時、元久ハ以大勢後巻シ玉ヘリ、相随人々ニ、平山・餅田・平松・中津野・平瀬云々アリ、　此二件ハ應永記ニ出タリ、其頃平山一族ハ皆元久公ニ随臣スト見ヘタリ、

○同十八年辛卯八月、　元久公御逝去、　久豊公山東ヨリ走帰テ御家督マシマセシ頃、肝付河内守兼元隅州ニ謀反シテ、鹿屋周坊介(ママ)忠兼カ鹿屋城ヲ攻ルヲ　久豊公聞召サレ御渡海アリ、救セ玉ハントノ時、聖榮自記ニハ御屋形様久豊未国モ不調時分ニ候ヘハ、帖佐・加治木ハ敵タル間不及力、鹿児島ヨリ御渡海有リ云々、此頃平山一家御敵ト見ヘタリ、

○應永ノ末年ニハ平山一家皆靡キ服シケルニヤ、左ノ通リ、

「此間略ス」

奉加　馬壹疋　　平松　安藝守武昧（花押）

代貳百疋　　平山　越後守武豊

奉加　馬壹疋

代弐貫

奉加　馬壹疋　　高城　摂津守武宗

代壱貫

奉加　馬壹疋　　餅田　紀武井

代弐貫

奉加　馬壹疋　　平世　信濃守武子

代銭六百文

奉加　馬壹疋　　甑　美作守義武

代三貫

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二一三号文書抄ノナルベシ）

11

福昌寺佛殿造營之勸進

奉加　馬壹疋　　沙弥存忠(久豊)（花押）

代銭三拾貫文、此外五拾貫者棟木牌為也(之カ)、拜銭也、

12『比志島氏文書』

『○今札□承□条々不室(但書)承候、悦喜申候、あま□驚存候之間、あ□(しカ)此通尋候、□(「虫付」)か様時分にて候

間、不慮荒説なんとも□候すると存候間、重而状をしたゝめ、河田殿・ひ知嶋殿へ人進候、それの事ハ被渡候へハ可然様可有ヶ勢(旧之)□候、恐惶謹言、

九月廿五日　　久豊御花押

帖佐殿

船津殿

御返事　』

（本文書ハ「旧記雑録附録一」五九九号文書ト同一文書ナルベシ、尚本文書ハ前文書ノ行間ニアリ）

13

○「栗野士調所造右ヱ門文書」

一帖佐平山城伊集院殿夜中に忍候、城番衆用心堅仕候間、伊集院衆難叶候て、春氣のことく引退候、平山衆付送候、餅田・平松衆如船津之横入候て合戦候、平松香林入道打死候、其忠節に平山殿より千本十二町猷清被遣候、嫡子武家に附属候、其後守護方より帖佐御知行候時、平松之代の地として鹿児島の嶽三十町半分十五町、忠國より武家に給候て鹿児島移候、嶽之内野本木原門、犬迫之内樟田門・同佛木之門、谷山之内大坪門槙田覚悟申候、以上十町公役なしニ忠国より猷清給候、千本拾弐町二男武満に給候、其後忠國立久父子御(旧快)不會にて、忠国伊作・田布施のことく御出候、通路悉く立久より御留候、猷清・武家・武満父子三人伊作のことく被参候、武家嫡子初菊丸、惣領之平山殿憑候而、指宿二三ヶ年▽(旧堪忍申候△、其後帖佐平山大陽寺出家仕罷居候時、去故候之間、調所殿二男幼少候兄弟之契約申候て、文明十年戊戌八月彼岸申含候、定清於老清以前約束如申候、養子として武家之跡名字悉皆調所九郎兵衛尉武男に附屬仕候、證文書付進之候、

紀定清（花押）

平松九郎兵衛尉殿

「記ハ氏、武ハ名乗、清ハ戒名、平松ハ名字、石清水流」

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一五二二号文書ト同一文書ナルベシ）

14

○右ニ見ヘシ荒田宗良法印

十一代孫

宗貞　出雲守入道　法名慶窓　六十一歳時永享八年丙辰五月二十五日、隅州帖佐郷春毛ノ村ニテ討死、

- 宗満　壹岐守　法名石窓　嘉吉元年辛酉閏九月三日討死、年四十七
  - 雪通和尚
  - 宗元　主計助
    - 宗乗　八郎三郎
  - 宗伴　助三郎　童名　千代菊丸　永享八年丙辰五月二十五日、隅州帖佐春毛ノ村ニテ父同時二十三歳ニテ討死、
  - 武宗　左京亮　法名秀山　文明十三年辛丑七月廿五日死、年六十六
    - 宗貞　出雲守　法名月徳清公　文明十三年辛丑四月廿四日死、年六十
    - 祐蔵主　宮内吉成寺前住

按ニ、前文伊集院衆平山城ヲ夜襲ケル時、城兵堅ク拒キテコレヲ走ラス、餅田・平松ヨリモ兵ヲ出シ、横入シテ春毛ニテ合戦アリシト云ハ、此系ニ云ヘル永享八年五月廿五日ノ事ト同シ軍ナラン、

（頭注）

『第四忠國公の時入ニ御手ニ豊州家一所と成事』

豊州家一所ノ事

『〻〻〻〻〻〻〻』

15

○山田聖榮系圖目安文明二年三月五日被書置候

一忠國三ケ國悉静謐す、次國一揆之事も此代にあり、征伐せらるゝかたく、一家ニハ伊集院殿、國方においてハ別府・和泉・平山一家不残、牛山一族悉、坂より上にハ和田・高木・飫肥・櫛間・南郷・梅北、いつれも此方之跡御料所として御一家御内に御配分あり、阿久根も此時失ハれ候、難儀御合戦の次第、ミつへ・河田・指宿・鹿児嶋はやまか原、いさく合戦、知覧大寺内田中門四町八反、合而百九町八反為領地被下候、田中門は今三拾町討死、「帖佐」「菱刈」てうさ・ひしかり身身太刀打候、ミまた合戦時村ノ内ニあり』

『忠國公御舎弟島津出羽守有久にも梅北七十五町・姫城三十町・帖佐之

新納四郎三郎殿、同大崎方其外数十人打死云々、

（別紙）

「忠國公御舎弟嶋津出羽守有久へ梅北七十五町・姫城三十町・帖佐之内田中門四町八反、合而百九町八反領地為被下置よし、田中と申所ハ何方候哉、御礼御書入被置可被下候、田中門は三拾町村之内ニ有之」

16

○豊州家系圖

- 久豊公三男
  - 季久　二郎三郎　修理亮　越後守　豊後守

○應永二十年癸巳、生於鹿児島、母上原氏、
○自早歳在　忠國公幕下數有軍功云〻、
○享(享)徳中　忠國公使季久伐平山氏領帖佐、於是築瓜生野城、携嫡子忠廉居之、且使二男忠康守平山城、時三男満久嗣加治木氏、振威四境、
○創建梵宇号龍護山總禅寺、使四男起宗和尚住焉、
○文明九年丁酉八月六日卒、年六十五、号總禅寺題橋為柱大禅伯、室日置氏、芳林妙香大姉、

忠廉　初公久　二郎三郎　修理亮
永享十二庚申生、
○文明十五年癸卯、曽於郡税所新介来攻帖佐、忠廉使兵迎戦于郊、新介敗走、忠廉麾衆遮其歸路大破之、遂取曽於郡、○十六年甲辰十月、福島城主島津式部大輔久逸起兵伐新納近江守忠續於飫肥、忠昌公使兵救忠續、時忠廉率兵師于飫肥、渋谷・北原・菱刈等不應之、乃北原立兼・菱刈道秀来于帖佐勧與叛　公、忠廉不聴、然世疑之、雑説満巷、忠廉與薩州国久・樺山長久・北郷義久謀三州治、○十七年五月一日、忠廉以相良・菱刈・東郷・吉田以下國人謁于鹿児府、各謝其罪、而六日見　公、十日各歸城、六月、伊東・北原亦将衆至飫肥助久逸軍、　公聞其急自将救之、忠廉麾下多斬首者、餅原駿河尤有功、七月二日、久逸降謁　公、三日、遂去福島移于伊作　命也、既而忠續亦移志布志、○十八年丙午十月十九日、　公賜忠廉飫肥・福島、十二月上旬、自帖佐移於飫肥、備伊東堺、是年遷帖佐大陽寺於福島、○延徳三年辛亥八月二十日、卒於摂州天王寺、年五十二、号大陽寺雪溪忠好庵主、

忠康　号平山、又次郎　九郎右ヱ門尉
越後守　初久継
○父季久使忠康居平山城、因号平山氏、後領松山、補串良地頭、

女子
北郷尾張守數久室

忠朝　初忠徳　忠頼　二郎三郎
右馬助　豊後守

○法号龍峯寺松菴妙椿
大姉
満久 後忠敏 三郎五郎 右ヱ門佐
○加治木三郎實平養子
守興 起宗大和尚
季久使起宗創總禅寺、起宗乃請福昌寺心岩和尚為開山、自居二世、晩年又創龍峯寺於日州都城、明應六年三月四日、示寂于此寺、
幸久 六郎三郎 蔵人 淡路守
安久 初忠季 源七 兵部少輔 備前守
梅谷 芳清和尚 領蒲生宝聚寺（法壽寺カ）

○文正元年丙戌生於帖佐、
母 太守忠國公女、法
名衞中妙守大姉
○文明十八年冬、及父忠
廉移于飫肥、忠朝守福
島城、時年二十一、

○本田國親モ帖佐ノ駒帰ニテ寛正五年戦死セシト其家傳ニアレハ、亨徳ヨリ寛正迄カヽリ平山一族ヲ討玉ヒシニヤ、

○文明六年甲午三月朔日、肝付左ヱ門尉国兼、其弟周坊（ママ）守兼連ヨリ追出サレ、同十三年辛丑八月十五日、帖佐ノ總禅寺ニテ自殺セリ、法名肯堂俊可居士、塔頭ハ徳雲軒ト其家傳ニアリ、

17
○行脚僧雑録
文明六年甲午八月之頃、花洛西九州下三ヶ国、日向大隅薩摩行脚廻聞（伝）侍仁、當守護御屋形嶋津之又三郎殿藤原朝臣武久、御年十二、譜代御住所鹿児嶋、一別府仁薩摩守薩州國久御舎弟中務、同弾正、平山仁豊後守豊州季久御子息修理亮匠作忠廉、田布施仁相模守相州友久云々、加治木、知覧云々、指宿仁九郎左ヱ門尉久継云々、高橋仁蔵人云々、

季安按ニ、右ノ久継ハ季久二男越後守忠康ノ初名也、蔵人トハ其弟幸久ナルヘシ、右ノ數書ヲ参考スレハ、

弘安中石清水了清入部シテ留守刑部左ヱ門尉真用ナドニ代リテ平山ヲ領セシヨリ、九代嫡流越後守武豊（忠国トモ）カ時應永永享（享）ノ頃迄ハ、平山ハ勿論平世・平松・餅田・甑等ノ庶族何レモ其名字ノ地ヲ領シ来レルニ、忠國公悉ク此輩ヲ征伐セラレ、前文ニ見ヘシ伊集院衆ノ夜ル平山城ヲ忍ヒ、或ハ永享八年五月廿五日帖佐春毛ニテノ戦ナド皆其軍ト見ヘタリ、其ヨリ享徳迄十七八年モカ、リテヤウ〳〵攻取ラセ玉ヘルニヤ、山田聖榮モ　公ノ難義御カセンノ中ニコレヲ入レ、御自身帖佐ニテハ太刀討セラレシコト迄書キオケリ、凡ソ弘安ヨリ享徳迄年数百七十年許、了清ヨリ平山氏九代越後守武豊カ其子備後守忠正カノ時キニ帖佐ヲ召上ラレ、平山ハ指宿ニ移サレ、御一族平山ノ元祖久継モ指宿ニ居ラレシト文明六年ニ見ヘルニ、紀姓平山ノ惣領モ指宿ニ居タルト文明十年定清カ書ニアルヲ考レハ、平山家ノ養子ニモ久継ナリテ平山ヲ名乗ルニ非スヤ、久継ニツキテ紀姓平山ノ惣領同シ頃移リ居タルカ、其詳ナルコトヲ知ラス、平松武家ハ鹿児島ノ武ニ移サレ、其一族ノ跡ヲハ　公ノ御舎弟季久ニ御賜ヒニテ平山城ニ移ラレシト見ヘ、文明六年八月ノ古書ニモ右ノ如ク也、然シテ同九年八月六日卒去アレハ、瓜生野ニ城キ嫡子忠廉ト居城シ、二男忠康ヲシテ平山城ヲ守ラセ、平山氏ト名ノレルトナン云説ハ、文明六年ヨリ九年迄ノ間ノ事ナル乎、然ハアレド忠康モ文明六年ニハ指宿ニ居ラレシト見ユレバ齟齬セシヤウ也、瓜生野ニ城キウツラレシハ文明九年後忠廉ノ世ト為リテヨリノコトナラスヤ、詳ナラス、斯テ豊州家季久ヨリ二代忠廉迄、享徳ヨリ文明十八年十二月飫肥ニ移ラル時マテ凡ソ三拾三四ケ年帖佐平山ヲ領セラレ、其外高城・上之山・平瀬・蒲生・北村・溝邊・横河・東郷迄モ豊州之御持城也ト行脚雑録ニ見ヘタリ、

○文明十八年丙午ヨリ長享・延徳ヲ歴テ明應四年迄ノ間拾ケ年許、帖佐ノ地頭領主詳ナラス、村田肥前守經安カ又ハ日置美作守ヲ差置レタル、共ニハ非カ究テ考カタシ、美作守俊久トテ豊州家ノ奉行セシモノ、永正十六年己卯四月、日當山ノ山王社棟札ニ出タリ、此人ナラシ、明應ノ頃ハ昵近ラシク見ヘタリ、

※

※『○明應元年壬子五月十三日、　立久公御夫人卒セリ、村田經安カ妹ニテ年四十五、法名宣徳院殿椿庭性壽トアリ、亀泉院ニ此位牌トモハナキ乎』

（本記事ハ行間ニアリ）

○明應四年乙卯六月二十九日辰尅、加治木大和守久平帖佐城ヘ襲来テ城上ニ切乗レリ、翌七月朔日、日置美作守ト本田某社家衆等拒戦テ敵七人ヲ斬ル、大和守兵ヲ引テ加治木ニ歸ル時、美作守ト宮内衆ト加治木ニ入リ敵数級ヲ斬獲ス、市店村舎ヲ燒夷ク、二日、　忠昌公モ亦兵ヲ加治木ニ遣ハシ、本安国寺ヲ破リ、進テ城門ニ至リ敵数人ヲ斬テ我兵モ三四人コレニ死セリ、斯テ同五日、御家老村田肥前守經安ヲ誅セラレタリ、如何ナル子細ニヤ、

18

『今朝辰時(ママ)帖佐城ヘ従加治木切乗候之由聞候、無是非次第候、然者此番手仕可入候、社家之衆中本田・日置美作守被相談、一途了簡憑入候之外無他(ママ)候、恐々謹言、

（明応四年カ）
六月廿九日　　忠昌御判

▽肝付次郎左衛門尉殿△
肝付次郎左ヱ門(ママ)尉殿　　忠昌　　』

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一七三八号文書ト同一文書ナルベシ、尚本文書ハ前記事ノ行間ニアリ）

（頭注）
『第五辺川筑前守地頭の事』
邊川地頭ノ事

○川上筑前守忠直、明應四年ヨリ帖佐ノ地頭職ト為リ邊川村ヲ拜領セリ、因テ邊川氏ト号ス、

19

○正八幡宮始而　御屋形様御社参之事、文亀四年二月十四日ニ鹿児嶋(ママ)御立候、同十五日御社参(ママ)御下向、同(ママ)六日、御先うち

河川筑前守殿

くつをハ中間ニ被持云々、殿原五人、中間十五人之内ニ鑓四本、中太刀一、大太刀一、弓うつほ四人云々、

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一七八八号文書ノ抄ナルベシ）

○大永六年丙戌、帖佐城主邊川筑前守島津初千代殿「實久コト也」ニ屬キテ潜ニ本城ト新城ヲ取構ヘテ謀反ノ企露顕セリ、

20

『○玄佐自記云、帖佐之城邊河筑前守従和泉薩州御人衆申請祁答院・蒲生以同前鹿児嶋へ成御敵之處、金吾様為御太将、一日之中数度之合戦碎手、即時被召取云々』

（本記事ハ前記事ノ行間ニアリ）

21

又はり鞍ニ成候する皮御所持候ハヽ、一枚可給候、不申共にて候へ共、冬毛望ニ候、万事頼存候、衆中ニ所持候ハヽ、御所望候て可給候、

書状之趣得其心候、仍初千代殿御下ニ被参候人衆四ヶ所衆・蒲生方・邊川（旧河）殿・佐多殿此等にて候、頼娃方（旧ナシ）〔ハ〕何方共不見得候、又北郷殿・北原方和融未成候、此節番城誘無油断様にと御意候、次三夜留之用意諸人ニ可被仰付候、依一左右御動あるへく候、萬期後音候、恐々謹言、

『大永六年』霜月廿一日　『新納氏家老』匡久判

山田安藝守（忠豊）殿　限江『伊勢守』匡久

御宿所

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二〇七〇号文書ト同一文書ナルベシ）

按ニ、初千代殿トハ實久小字ニテ其頃ハ年若也、其手下ノ大将島津善左衞門安久迫水三代ナト出水ヨリ来テ辺川忠直ヲ助ケ帖佐ニ城守セリ、斯リケレハ同年十二月七日、忠良公　勝久公ノ命ヲ奉テ吉田ヨリ帖佐ニ押寄セ本城新城ヲ攻ラレシニ、善左ヱ門尉安久等拒戦テ岩永壽齋カ為ニ總禅寺口ニテ討殺サル、其外島津又七郎以下数人討死シテ、其日ノ酉剋ニハ新城陥『チ』タリケレハ、其徒何レモ周章シ遁ント欲シテ城隍ニ墜リ、死者男女五百餘人、牛馬ニ至テハ其数ヲ知ラス、岩崎太郎三郎頼清ハ　日新公ニ仕奉リ帖佐ニ戦死、田代新右ヱ門清千ハ　勝久公ノ時帖佐ニ戦死、鎌田刑部左ヱ門（政辰）モ帖佐ニ戦死ト各其家系ニ出タリ、皆此役ニ死セシ

ナラン、是ニ於テ邊川氏明應四年ヨリ此大永六年迄帖佐地頭タリシコト凡ソ三十二年ニシテ殺サレタリ、

『第六』島津政雅地頭ノ事

○島津下野守昌久入道政雅

大永六年十二月、忠良公帖佐ヲ平ケ玉ヘル時、昌久自ラ請テ帖佐ニ地頭タリシカ、同七年丁亥四月、加治木ノ城主伊地知周坊(ママ)守重貞ト謀テ亦叛ケル事聞ヘケレハ、忠良公既ニ御遁世ノ上ナカラモ是非ナク、又其年五月六日、加治木ニ御発向アリテ、伊地知周坊守重貞及ヒ其子新左ヱ門尉重兼ヲ誅殺セラレ、直ニ帖佐ニ御越、島津昌久ヲ殺サレ、両城共ニ警衛ノ兵ヲ入ラレ、百事闕ルコトナキ様ニ御取鎮メオカレテ、帖佐ノ松原ヨリ御帰舟ナリシニ、其御留守ニ島津實久、　勝久公ヲ欺キ大乱ト為レリ、

『第七』伊地知民部新城地頭ノ事『付本城山田城地頭の事』

○伊地知民部少輔重辰ニ、右ノ昌久ヲ誅セラレシ後ノ新城地頭ヲ　忠良公ヨリ被仰付居城スル也、其傳ニ云、

寛永十三年五月伊地知杢右ヱ門尉重政書記モノ也、重政父民部少輔重堅ハ朝鮮ニ戦死シ、其年十三ナリシヲ祖父備後守重康入道喜甫ニ養育セラレ、二十二歳ノ時重康死セリ、即重辰ハ重康カ祖父ナレハ、重康カ物語ヲカキタル也、

第四嫡子重辰法名永林久長居士は、　太守高久公之御當代永正の頃季安云、高久公トハ貴久公、永正ハ大永ノ誤、大隅之内帖佐新城之地頭賜之、彼城へ重辰父子在番之砌、従渋谷家催多勢被『攻』新城、其時重辰嫡子小次郎に語て云、大軍寄来之間雖防戦終責落さるへし、然は重辰は新城之主頭として可遂戦死、其故は父子一所ニ雖遂戦死、全以忠功之無レ全(セン)、守護御無勢之間、小次郎は衆中の子共を卒し、敵陣を切通、吉田の城に楯篭可抽忠節、曽以各不可為未練、若於不遁は無是非、籠城討死父子可為同前旨申含也、依之任父命、小次郎は人数五六人一味し大勢の中に懸入、向敵を散〳〵に切捨、吉田の城に楯籠也、案のことく新城は父重辰討死矣、此時文書系図悉打捨也、

22

『玄佐自記大永七年の條云、七月七日、従鹿児島以兵船、生別府へ御手形なれ共無何事、扨人の心時〳〵に移安き世なれハ、廻・敷根・上井・宮内・曽於郡・加治木・帖佐其外虎壽(田丸)殿への御神判、奉忠兼様を始皆古ほく(田と)にこそ見得にける、虎壽様も田布施・阿多・高橋三ヶ所に引、御籠鳥の如し云〻』

（本記事ハ前記事ノ行間ニアリ）

第五嫡子小次郎松元を改、本名字伊地知美作守重常と名乗、法名光林澤公居士と号す、渋谷家弥相誇、入来より至伊集院差出軍兵也、小次郎は伊集院之内遊須木城之主頭として在番也、其時彼渋谷家之敵蒲生より吉田之城へ打懸ル之故、彼城麓の川原に出向、鑓合の太刀始致之、其後市来に被差移、皆田代一村并伊作田之内陣の薗の門合拾二町被下領之者也、

○宮里孫九郎正勝系傳云、於大隅吉田、正月廿一日始合戦、生年廿一歳、（季安按、正勝生年二十一ハ享禄二年己丑正月二十一日ニ當レリ、）

23

○年代記(享)享禄二年己丑正月廿二日、祁答院重武帖佐之本城新城入手裏、翌日山田城攻陥以為領知、雖然蒲生某變改故、祁答院格護之加治木(田ナシ)〔ハ〕肝付越(兼演)前守攻落畢、

（本記事ハ「旧記雑録前編二」二一三七号ト同一記事ナルベシ）

○伊地知筑前守重成(初式部少輔)系傳云、為吉田城代居之云〻、

右ノ數書ヲ参考スルニ、松元民部少輔重辰(伊地知トモ)大永七年丁亥五月ヨリ帖佐新城ニ居城セシヲ、祁答院城主渋谷伊勢守重武多勢ヲ率ヒテ、島津實久ト　忠良公トノ大乱出来タル其間ニ乗リ、享禄二年己丑正月二十一日、祁答院ヨリ先ツ吉田城ノ伊地知重成ヲ攻メ、陥スコトアタハス、翌二十二日、重武多勢ニテ帖佐ニ攻入、本城新城ヲ攻陥シ、重辰討死、其子小次郎重常ハ衆中ノ子共五六人ヲ一味シ、敵ノ圍ミヲ切通テ吉田城ニ走篭リ、重成等ト共ニ吉田城ヲ保チ一命ヲ助カリシト見ヘタリ、去レハ重辰新城ニ地頭セシハ、大永七年五月ヨリ(享)享禄二年正月迄僅三年也、其翌二十三日ニ

ハ、重武又山田城ヲモ攻取テ此モ押領セリ、此時本城ノ地頭并ニ山田地頭誰タリシ事詳ナラス、季安博ク諸家傳ヲ按ルニ左ノ通、

○村田庄ハ家傳云、肥前守經安　立久公御家老、後背忠昌公命、明應四年七月五日伏誅、其子肥前守經堯、父被誅後出奔、倚頼菊地、其後帰國於帖佐戦死、其子五郎左ヱ門後越前守武秀　勝久公御家老、加治木ニテ戦死云々、

○大口士村田武右ヱ門系図云、越前守經貴、享禄二年己丑正月廿二日、加治木落城ノ時七十才ニテ戦死、右ノ三弟中信ハ号亀泉院義庵、其姪性壽、　立久公夫人トアリ、中晉ノコト也、

季安按、右ノ經安誅セラレシハ、加治木大和守カ帖佐城ニ切乗タル一乱ノ年月ニ當レハ、文明十八年ヨリ豊州家ニ代リ帖佐地頭トモニハ非ル乎、左アリテ如何サマ加治木ニモ内應シタル向キノコトトモ、忠昌公ノ命ニ背ニテ誅セラレ、其後ニ川上忠直ヲ移サル乎、斯ル由緒モヤアリテ、忠良公島津昌久ヲ誅セラレシ後ヲ經安ノ子肥前守經堯ニ仰付ラレ、帖佐本城ニ地頭シ居テ、享禄二年正月二十二日渋谷重武ヨリ攻ラレ、伊地知民部ナト一所ニ戦死シタルニ非スヤ、後哲正スヘシ、

○川越三右ヱ門家傳云、河越重頼八代之孫平次郎重秋、就母方豊後國ニ住、号眞玉、十一代之孫民部左ヱ門重博、帖佐山田城ニ而戦死、其弟紀伊助重實家督、　貴久公鹿児島御退去之時有忠節云々、

季安按、紀伊助重實カ　貴久公ノ御退去ニ忠節セシトハ、大永七年丁亥五六月ノコトナラン、左アレバ忠良公其年ノ五月、島津昌久ヲ誅ゼラレ帖佐ヲ平ケ玉ヒシ時キ、紀伊ガ兄民部左ヱ門尉重博ヲ山田城ノ衆頭ニ差オカレシニ非スヤ、左アリテ前文ノ重武乱

ニ二十三日戦死シタルナラン、必ス後哲コレモ正セヨ、

『第八』祁答院押領ノ事

○祁答院伊勢守重武入道嵐浦初字又二郎本姓渋谷氏

亨禄二年己丑正月ヨリ帖佐ヲ押領セリ、天文四年、勝久公鹿児島本城ニましましける頃、伊勢守重武ニ援兵を乞ハれし事、玄佐自記云、碇山・小倉なとの才覚にや、北原・祁答院を頼、北原加賀介と云者走参、祁答院ハ伊勢守自身致参上之處ニ、従谷山鹿児島のぬめり川と云所まて放火しけるニ、祁答院衆かのきたなけなる水はなに、谷山衆を神前之外城戸口迄追責戦し処、鹿児島衆ハ内心實久へ申合、又案内者なれハ見合せけるニ、谷山本城福本の以下の雑兵横入をし、祁答院の役人栗野越前と云族を初として数十人討死なれハ、伊勢守も無甲斐帖佐をさしてにけ帰候云々見へタリ、天文四年十月二日頃ノコトナラン、斯テ同十日ニハ　勝久公も鹿児島田ノ浦より帖佐へ御渡り也、其事を玄佐云へるハ、勝久ハ其夜舟ニ而帰る浪も御浦山しくや、帖佐へ御渡海也、始より御頼なる故にや、於帖佐、祁答院・北原奉仰云々、其後勝久帖佐より真幸般若寺へ御移云々、天文七年戊戌七月　日卒去、

○祁答院河内守良重初又二郎、妻ハ出水島津義虎ノ姉也、永録九年丙寅正月十五日、妻ヨリ弑セラル、年四十一、法名樹蔭鉄公大禅定門

右重武ノ子ニテ、天文七年戊戌七月、父ニ代テ家督ンテ、帖佐本城新城山田城ヲ押領セリ、本領祁答院ハ勿論也、

24

○甑大明神在鍋倉村其棟札云、

厥依為日域天神七代地神五代今奉勧請、仁王第十代崇神天王曽三十一社廟守此軌則永々帰敬焉、凡甑大明神宮是應神天王之曩初帖佐垂跡今奉建立當社大明神、當正平年中欽、依之奉為金輪聖皇天長地久御願圓満特信心大檀那三州之太主平朝臣良重、除災長命國郡泰喜、別者平重承・同亀壽磨除雌樂武運名誉、兼又村中安全殿内繁昌故矣、所安如件、

右ニ載セシ良重ハ、則世録記等ニ所謂帖佐城主渋谷河内守ニテ、三州ノ大主トカキシハ不届千萬悪ムヘシ〳〵、然トモ其父重武　勝久公ヲ暫ク帖佐ニ仰キオキマイラセシナレバ、如何サマロ命アリシコトモ知レカタシ、今カラモ嘆息スヘシ、

○西福寺址　鍋倉村平山城内ニアリトソ、

右ノ寺ニアリシ大般若經ノ箱ナラン、去ル文政八年乙酉六月、御小納戸吉井七之丞トノヨリ愛甲新右トノヘ、此銘ヲ存知タル人ハナキヤトテ見セ頼ラレシト、愛甲ヨリ季安ニ承趣キアリテ考オケリ、

25

大般若經箱三合之

為興隆佛法廣作佛事也、

大旦那平良重　惣奉行平重持

天文十三年甲辰　月　日　　大工竹下狩之介

山形膳六右衛門

教金坊

時「不知」福寺榮幸代當村地頭兼林

當村代官青山土佐守尚豊

右ノ經箱　御前ニアレトモ知レザルトノ尋ニアヒタレハ、祁答院十二代河内守良重コトニ當レハ、佐司・黒木・鶴田・宮ノ城・山崎・大村・蘭牟田七ケ郷并ニ帖佐・山田等ノ内ニ何福寺トカ云ヘル寺ノ校割ナラント細々カキテ答ヘオケルニ、今想ヘハ此西福寺ノ古物ナラン、天文十三年ハ良重十九ノ時也、

『第九』大中公御代御手ニ入事『貴久』

26

○御戦場記云、弘治元年三月廿七日、守護方之兵帖佐に發向し、高尾ニ攻入、敵首一百餘員を得候、同四月二日之夜、凶徒等帖佐及山田を捨退去仕、守護領ニ罷成候処ニ、同七月廿五日、渋谷・蒲生相謀、帖佐へ寄来候ニ付、守兵発出、致合戦得勝利、東郷将監・白濵某等を討取候、

27

『〇古今戦云、帖佐も古しへハ帖佐殿トテおハしけるが、絶させ給てより守護方之御方被成つるか、中頃渋谷方ニ押程ニ又白金へ御陣召ス、又弘治元年四月二日、帖佐も捨てそ除きにけり云々』

右弘治元年四月二日夜良重等退去ノコト、蒲生山元庄右ヱ門家ノ古日記ニ左ノ通、

28

□夜て(旧き)帖佐の本城・新城・同山田の城をすて、祁答院のことくのき候のよし、子刻(旧巳)ハかりてうさの本城の者二人平松へはせ参り、御左右申候、それよりまつ平松の人数の内に、足はやき人数少々はせつゝき、城内ニ被入候、加治木の人数も夜うちにはせつゝき候て、無何事三城御手に参候、　御屋形さまは其比平松に御光儀時分にて、軈而三日の朝(旧明)ほのゝ時分、御馬廻り三百ハかりにて、帖佐の本城南之城に御座をなされ候、鹿児嶋にハ其夜の牛時計御左右〔申(旧ナシ)〕あつて、　若殿様御兄弟御三人、御供の人数五百計にて、〔巳(旧ナシ)の時計に〕帖佐の南の城ニ御つきあつて、御祝言御申にて候、又四郎殿さま・典厩さま御同心あつて、其勢三千ハかりにて、三日のひるほと蒲生の城ふもとに御馬をよせられ候て、城わたされへきの使僧をもつて被仰云々、

廿六日、帖佐之寺師名へ敵出候、従是　御屋形様御續(旧)取(旧ナシ)ニ〔而(旧ナシ)〕候、自其帖佐之新城之堺(旧鷺)之ために〔と(旧ナシ)〕御出あり、此晩新栫之▽(旧麓)迄△敵来候へ共、指事なく候、此日鎌田刑部左衞門尉殿帖佐の内城へ相移(旧罷)られ候、

右ノ敷書ニテ按スレハ、享(旧享)禄二年己丑正月より弘治元年迄二十八年(六カ)、祁答院渋谷家十一代伊勢守重武、十二代河内守良重迄二代、帖佐ノ三城ヲ押領シケルヲ、弘治元年四月二日ノ夜、良重祁答院ノ如ク退去シテ、翌三日ノ未明ニ　貴久公帖佐ノ本城ニ入ラセラレ、　義久公　忠平公　歳久公御三人ハ巳ノ尅ニ入ラセラレ、同二十六日、鎌田刑部左ヱ門政年ヲ地頭トシテ帖佐

「天文二十四年乙卯四月二日迄乎」

ノ内城ニ召移サレ、山田ヘハ梅北宮内左ヱ門国兼ヲ移サレ、其ヨリ御代々于今目出度御知行ト為レリ、

『第十中古地頭の事』

○鎌田刑部左ヱ門尉政年

弘治元年（或云天文二十四年）四月二十六日ヨリ帖佐内城ニ移テ地頭タリ、永禄六年癸亥三月十八日辛卯、三拾町村大王棟札ニ、薩隅日三州太守藤原貴久公　義久公、當城地頭藤原房政并長政トアル、房政ハ政年ノ初名乎、三原遠江守重秋モ地頭トアリ、此間乎『弘治二年六月廿九日、平松村諏方の棟札ニ見ユ、平松バかりの地頭歟』『ミミミミミ　ミミミ』

○平田美濃守昌宗初名職宗　右馬助

元亀二年辛未、肝付勢兵船ヲ催シ内海ニ入リ、花倉・美船・向島ノ松浦西道ナト騒キタル時、昌宗帖佐地頭ニテ舟ヲ出シテ救ハントシ、敵ト大崎ニ遇ヒ退テ瀧ケ水ニ據テ防戦功有リ、『天正四年丙子八月十六日、義久公ノ高原ニ御出陣アル時、此夜餅田ニ御泊、同六年戊寅九月十一日、又日州石城ニ御出陣アリシ時、餅田觸主計介カ宅ニ御泊、新四郎罷出奉賀云、献御肴一折・御樽一荷』、天正七年七月十四日卒、総禅寺ニ葬ル、

○平田美濃守光宗及子太郎左ヱ門歳宗

天正七年、父ニ代テ帖佐ニ地頭セリ、鍋倉村山王棟札、深見村獅子明神・豊留村早馬等ノ棟札、天正十七年己丑十一月迄ハ見アタレリ、

○今一人地頭アラン、三原遠江守重秋ナト此年間カ、追テ考ヘシ、

▽○上井甚五郎里兼（後ハ次郎左ヱ門ト云、寛永八年六月四日帖佐中津野ニテ死ス、年六十六、墓ハ假屋園ニアリ、此時ハ久賀代乎、）

自系ニ天正十八年二十五歳ヨリ帖佐ノ家老役ニテ高麗ヘ御供トアリ、或小林地頭相替、帖佐地頭被仰付トモアリ、光宗ニ代リ帖佐地頭ニテ義弘公御家老ヲ勤ラレシト考フレハ此頃ヨリ乎△

（▽△ハ「始良郡地誌備考」ニヨリ補フ）

御在城ノ事『第十一義弘公御在城の事』『ミミミミミ』

○義弘公

文禄四年乙未十月栗野ヨリ帖佐ニ御移リ、十二月二十

一日発帖佐上洛、五年丙申正月十三日至大坂、九月帰国シ玉ヘリ、○慶長二年丁酉二月廿一日御首途、朝鮮ニ御渡海、『三年冬御帰陣、直御上洛』、五年庚子十月三日『関ヶ原より』御帰城、『九年甲辰五月五日、頴娃・開聞ノ棟札ニ帖佐地頭伊勢平左ヱ門貞成トアレハ、御在城ノ時モ地頭ハ在リシト見ヘタリ』、十年巳平松御家作、十二年十三年戊申トモアリ十一月十三日加治木へ御移、

『第十二再ひ外城に建らるより代々地頭の事』
再外城ニ建ラル事

○島津豊後守久喜久賀

公加治木へ御移アトノ地頭トシテ即日長野ヨリ移レリ、同十八年鹿府ニ移リ掛持、是ヨリ代々地頭ニツヽクナリ、

右ノ通名勝志調帖佐書出ニテハ、鎌倉以来是まて来歴の次第疎漏ニあれハ、季安カ愚臆に覺へたる荒増、四五日書籍を探り、粗愚按を書散し、十二段に時代を分て艸輯するもの也、急卒の事にて考違ひ漏れ誤の多からん事ハ案中なれとも、本田親章の彼地に僅の日を限りて滞勤あられし内に、名所旧迹をも探遊れん枝折ともなれがしとの書状に報ふまての用意にて、聊篇帙を成すの志なし、観者笑察せは幸也、

（天保元年）庚寅三月潜隠舎に筆をとゝむ、

平季安漫跋

真幸紀行

1

（表紙）

眞幸紀行

伊地知季安著

眞幸紀行

弘化乙巳冬十月、遊角藤邑（加久藤）、邑在日州諸縣郡即眞幸地、而距　府城東北十八里許、昔吾六世祖嘉翁府君地頭于此、其墓在處也、是歳仲冬、則當其二百年回、繇是豫男季直謂余曰、前此、府君皇妣喜窻孺人當斯諱辰、遣不肖跋渉山河、遙以致奠於孺人墓下、而昨年亦値府君令息雲外子諱辰、使旁族季包代以祭之、家君不幸經歳禁錮、未獲一拜墓下親獻奠羞、今既遭　赦、齡踰耳順、健不讓壯、請必親莅、今而弗往、恨匪啻竟無謁先墓、不亦獲終身縱眸於眞幸諸邑名山霊境、願其就奠、余亦為然、乃託同僚、私偸直日、謀以朔發、命男季慮及僮末吉、辨之行装、家人卜日、不欲朔起、於是、期僮吉追會於柁城、二十九日、與季慮發、抵下海岸、命僮福助需艅将出、會扁舟艤、得買以駕、楫師貪賃、猶豫移尅、須之解纜、抵永安橋下、聞申鼓鳴、此日天晴無風、海如盤水、不宜開帆、揺櫓徐行、白雲青巒、両岸如画、舟中回望、以志遠途之勞、昏黒、抵柁城下、時稍過戌、潮退港浅、篙工竭力、着網掛橋下、夜未人定、乃過市街、叩新納氏、時行父子倒履迓曰、得報命浴、疑君至遅、為未必起、竟穢浴室、只是可憾、余謝以實、小飲話舊、飯而宿焉、

府君諱重政、稱民部少輔、改本右衞門尉、使役官至御用人也、轉御后、今御丙戌十一月四日卒于江山野・羽月・加久藤地頭、以正保三年

戸、葬二本榎□廣岳院墓加□于今而在招魂墓久藤也、□

吉右姓末原氏福崎氏助右姓皆府君各於先世任久藤其後加也久

仲冬朔日晴、猶竢僮至留滞、觀舊蔵文翰、此昔國相旅菴(長住)後胤、而遺簡尺牘、足証當時者、稱蓄充棟、除飲食外、欲務讀過、不能徧渉、與息時成就寝、猶話坐向鷄鳴、　二日晴、辰牌、僮吉未至、率季慮發、時成導送、右觀城址、言、　松齡(義弘)公所居遺墟也、古松蓊欝、石墉尚存、足以欽仰、左則公子別館、多仍舊貫云、過其館内、出於士街、渡一圯橋、田圃平曠、出於徑路、左横五嶺峯、右懸龍門瀑、皆邑勝觀、足指漸仰、進登石磴、此為龍門阪、右有窯廠、所造土器、曬於路旁、傳聞、昔文禄中、　先公所虜韓人芳仲等、世為窯戸、燒造瓷器、以為産業、世謂門陶此也、阪盡可里、時成就左岐、辭如別荘、自此、余與季慮行、過溝邊邑、入一村落、所謂石原、有饅頭肆、會開蒸函、食忘饑腸、過此餘里、憩横川驛、啜茗午飯、東北行可七里、薄暮、抵栗野邑、邑有隊長肥後某、稱市郎、與男季直等學坐擊法於東先生、所嘗来往也、季直及先生議、豫告余遊、由是、直入士街、問諸土人、遵指尋訪、市郎迎招、令解裝浴、小飲且飯、見子及婦、皆與余男所相識也、頃刻、吉亦至、曰昨舟阻風、夜繫瀧水、候曉就陸、飯於新納氏、兼程今至、　三日、早起、厳霜鋪玉、始驚寒氣冽於本府、乃導市郎、曳杖蹈霜、登栗埜城、城在廨北可三町木場邨、名曰松尾、昔建久中、郡司守網所據有云、至天正中、　松齡公命新納為舟等、所擇要嶮以修築之遺墟也、幅員餘里許、庚寅六月、　公由飯埜城移居此城、凡可六年、朝鮮師亦發自此云、右徳元寺、左就敗磴、屈曲躋攀、間覩石墉、始至其巔、平坦廣闊、中断為二、南曰本城、周餘二段、北曰副城、周餘五段、相距七八歩、當時架桟通云、其下即所登途、南北異門、本城西腹、祠毘沙門宏敞可眺、　公所剏云、副城草際柱礎尚存、又有古椿、圍繚以籬、以有以

樹、然非壽木、疑可蘖也、四面両皆臨旁而眺、千仞老杉、俯覩其杪、崇亦可知、泉出副城半腹、匪徂汲於城、流可以資灌漑也、市郎言、城為山久、老樹森欝、咸稱可觀、近年為製樟(腦)(腦)者所尽伐剝、　先公遺構亦為之缺壊、荒榛塞路、至無遊者、而今年迨　今公停駕、恐或　遊覧、不靳工夫、芟拓如斯、余謂、今遊省濟勝勞、亦其恩哉、下過徳元寺、寺在廨東百二十餘歩木場邨、此昔應永丙戌、酒井親貞所剏、舊名崇壽、至文安中更為今名、而降文禄為蘭桂公子墳寺、謁公子廟、在佛堂後、方丈面乎蓮池、名千葉蓮、種出於朝鮮、此公所植云、憶昔青年、偕五六輩、為觀壮士劍舞(俗云欲研踊此)、一夕宿此寺、蓋向五十年、今而觀之、堂構門廡、如始遊者、門内碑建石牆上、仰讀一面、蓋載膝跅騂事、不能摩薛尽讀之、出門両旁老杉、輪囷数圍、盤乎徑垣、可数百年物、歴覧士街、閎坦頗整、尚足懐古、回肥

后氏、觀一長劍、此萬膳氏所世寶蔵、相傳、昔天正中、渠先仲兵、属川上忠堅、與擊隆信於肥前島原、獲佩此刀以斬其首、相刀家咸為高田造、□隆信刀所飾銅縁亦併蔵之、非今制度、雖彫華紋、視候家物、霄壤懸隔、可以觀其質朴也、婦乃供食、食且櫛畢、又野装發、市郎亦送、循河出途、折度圯橋、發源乎日州狗留孫山、經此隅州、出薩州、曰千臺川、始注於海、亦此末流也、導言、過所近移新倉且其新路、頗為迂回、直就舊路、執與其邇、余曰従邇、而所向行、足指漸仰、進登土阪、所謂熊嶺阪此云、雖不甚嶮、陟降延□不知幾轉折、自栗埜北、則余父子未曽著脚處也、行可二里、抵吉松邑、邑正中邨某、亦坐擊家、而所與季直善者、自稱勘左、由過其門、市郎迺導、勘左迎招、小憩飲食、謝又發行、主人遣子與藤亦導、自飯埜以南、邑皆瀕川、晨昏帯霧、地宜茶園、而藩中茗品、以吉松為第一、

今觀所過、水滸蔬畦、居宅垣牆、争栽設園、府下茶商、所鬻于肆亦皆此産云、實茶名勝也、行未半里、市郎告別、自言、僕本貫吉松、家在廨傍、乃辞赴焉、由此易導、左眺般若寺於深山中、右循溝渠、折過八幡廟下、廟在廨北百餘武鶴丸邨、祀鶴岡云、相傳、昔尊氏略九築也、立塞於日向山、特崇此廟、日向山、即般若寺云、余恐入謁必暮乎途、乃展拜於華表、踰隅日堺、經吉田市、過馬関田、入加久藤、所謂眞幸田畝、廣遠渺茫、如無際涯、左右連山、蒼翠靡迤、如列屏風、迂路直徑、通乎其間、雖聚一腱、行不甚利、而豊沃者、正在此中、往々榜曰、　公粮田、且係　公所放鷹、禁恣獵禽、由是、群鶴蹁躚、嘹唳聞天、其所徘徊、或縮頸、或顧歩、或刷翮、或啄餂、又鳧雁鴛鴦之属、襍乎其際、亦各為群、翔泳水面、人近輒飛、不必高擧、只避機心、落集遠畦、千状萬態、如見所画、行慰旅眸、餘五里許、時降黄昏、過邑店肆、左渡圯橋、出於松原街、分為両岐、右赴高岡、左踰玖麻、就右左折、入不動街、過別館下、始抵貳宗、庶胤季包、方羈吏務、越在永山、息男彌次、出門恭迎、隷士同族宗助・外記、小原森右、池上市太等亦迎謁、余乃解装、就坐啜茗、導者辞歸、謝饋令還、少頃、各浴、浴罷、供饌、燕飲移尅、擧家出謁、相與杯酌、飯而就寝、季包亦過亥回、謝失誼曰、貢税期迫、新令厳密、猛乎常歳、不得須更奔於私事、遺憾何譬、特告暫還、余亦遙察其然、豫報此遊、先誡汝及隷士等、勿必廃公事郊迎饗應云、亦惟是耳、豈可為意乎、唯所可語在命祭事、余聞諸人、主僧寝疾、長善寺僧、帰自遍参、權摂寺務、汝速託渠、季包乃往遂以託之、復趣税務、期迫故云、　四日、陰翳将雨、實府君諱辰也、辰牌、使隷士同姓宗助等齎香奠供物、先饋墳寺、寺曰徳泉、在廨西可三町小田邨城

1の1

址搦手口、昔北原時剏、建之於徳満城、後移于此、山號瑞亀、長善支刹云、巳牌、邑正西田時殷、致仕齋藤多、及子杢、監吏谷口杢等、聞余至此、各来候、而時殷言、晩招飲渠宅、渠字廿知、隷士永崎則員甥女壻、且與齋藤等學於東氏、亦季直同門也、谷口父、庶胤季由次子、出嗣谷口、即其男也、午牌、余及季慮朝服、導彌次、登徳泉寺、隷士宗助・新助・僮吉等従、長善僧侶曰龍道者、摂席迺迓、以主僧疾、謝難陪祭、供茗若菓、導進佛殿、遷　府君神主於正面、薦之奠羞、以行祭儀、竣余炷香、恭獻祭文、以拜稽頓首、

祭六世皇祖嘉翁府君文

維弘化二年、歳次乙巳、仲冬初四日、相値六世皇祖穆峯院殿故掌務兼領加久藤地頭嘉翁祐慶居士二百年回之諱辰、於是裔胤伊地知季安、豫與男季直議吾家近世、高曽祖考、皆□院號、而府君否、於義不宜、故使季直請玉龍山主獨山禅師、追崇府君、贈之院號、自齎香菓、跋渉数里、抵舊任邑、親謁墓下於徳泉禅寺之後山、乃托僧龍道、以薦其號、恭致祭於府君之霊、其辞曰、

嗚呼府君　世紹将門　夙帥堡戍
把符守藩　遷鎮三邑　邊威愈張
属官軍西　殲賊肥陽　自麾部卒
奮入戦場　鬪獲数馘　名耀報章
轉兼知邸　之任帝郷　約衆造塑
剏勝軍堂　祠神治人　維徳詎忘
陞職掌務　従如武昌　秩登禄富
配隷借光　受禄與宅　頤指待傍
八姓樹族　十四為常　以賜後胄
永荷勲功　英魂一去　世感恩鴻
載積二百　尚欽厥忠　跋渉迥来
躋此山中　摩薛拜墓　昔容何空
累累墳塋　環拱如公　生撫茲邑

神其何馮　余久忤權　為連斥躬
倘靈有知　庇救吾窮　徘徊懷古
泣對悲風　天其所命　誰得不蒙
奠羞雖薄　虔獻愚衷　嗚呼哀哉
尚饗

余拜畢、季慮及彌次・宗助・新助・僮吉亦各香拜、而先墓、在寺後山曰淨慶處、淨慶人名、字秀存、姓樺山氏、崇修驗法、即其所居址、墓亦在此山中、因得名云、事詳城傳、由寺庖厨、左過菜圃、而登邱阪、可三十武、披荊躋級、曲徑阪尽、至其山頂、平坦弘敞、實棲神地、許多墳塋、累々各如環、拱於吾先塋、以整陣列、永禁其芻牧、而除寺僧墓、餘皆吾族人、有恩於府君者之墓也、過此卵塔、抵東北隅、則是先塋也、府君墓南向、在第一座、宗助建卒都婆於其後、新助挿華於其前、龍道炷香誦經竣、余香拜、而喜窻孺人墓西向、在

孺人姓阿氏、中務允久宗女、乃府君母、
雲外諱重次、称小吉、府君庶子、
機芳君諱季富、称本右エ門、仕至府礒奉行、君曾孫也、

其東可壹歩、竝孺人墓、有一片石、亦西向、崇可四尺、闊減半窻、無有誌銘、蓋上祖墓所改葬處、莫能考也、雲外子南向、在其北可八尺、昨年所建卒都婆猶存焉、又小片石在其後、相傳、旁族重治娶大河平氏、此其婢云、又府君巽、有機芳君墓、併圍累石、此余曽祖而葬南林寺、建之於此、隷士永崎秀脩等為拜掃云、昔年吾先考蘭叢君巡察郡邑、捐其俸資、新造神主、書此嘉翁・喜窻・雲外・機芳四霊於一面、以奠佛殿、時有謁廟詩、攀林携客倚山□(岑カ)多少墳塋薜荔陰、千古猶餘松柏色、霜前還識歳寒心云亦此地也、他所賦不載、余及季慮等皆徧焚香、自出府宅、無日不晴、迨拜将竣、雨間小點、如待而降、乃急下阪、季慮疾趣取傘於寺、復迎阪口、得以不濡而回貳宗、雨愈弗歇、同族宗助・外記・新助・祐進、小原宗次、池上市太等隷士相偕調饌、饗余於此、對酌消日、余亦捐貲飲之火酒、于時永崎與右、

居職郇長、不暇徴貢、永崎金太輸租於府、同族源太・佐土原惣等竝寝疾、小原森監護旅客、皆不能與陪候迎席、因托渠等、以陳情實、且謝其罪、此晩赴時殷招、燕飲歡話、見妻及婦、彌次・吉等陪飲、夜雨傾盆、子牌、冐雨蹈泥濘回、　五日雨霽、谷口杢来招渠宅、隷士新助亦候、又故邑正同族季致寡婦、與其姪谷口八太来候、皆其先世出於吾庶胤、寡婦言、孫伊直方抵新倉、故為渠候謁、飯且櫛畢、欲覧古城址、址在廨北三町許、乃随季慮等、前導彌次、巳牌出門、右折数十武、而轉東北、士街逶行、漸陟土阪、東西皆山、通徑於間、東麓為廨、西巔為古城、右覩射圃、左循城足、西行登阪、為追手址、延縁益陟、右有老杉、泉出其下、圍以短籬、言、今歳迨　公遊覧、所掘而出、又陟、徑左為枡形址、而愈陟、途為両岐、右折北行、則為本城、就其左徑、至鑰掛口、北行阪尽至其絶頂、平坦廣闊、四方臨旁、俯覩樹杪、可以知其崇也、今公停輿處、草際繚籬、其他茅屋、猶未悉撤、北旁少降、又有産城、名曰新城、今唯老杉森欝、昨夜蓁徑為雨所潤、會其未乾、故不往觀、飯野城、由此通云、維昔永禄中、　松齢公所築居而備日肥寇之遺墟也、相傳、城舊名久藤、公増加字、改加久藤云、元亀壬申三月、命川上忠智等祠妙見・水天・荒神於此、以為鎮護、崇曰三社、以歳仲冬念八日為例祭云、吾家所主祭亦祔三社、例祭同之、蓋據此耳、天正丙子、　琴月公（家久）嶽降于此、有比寿杉、其□所植、而枝幹繁欝、所蟠根周可三丈、殆優乎穆佐所植　大岳公（忠国）比寿杉云、雖然、彼舊榎寿木、燬於慶長庚子、而所更栽、則周劣不亦宜哉、近歳、此杉亦為颱所拔、僵而枯矣、邑吏胥議、剪其芽以挿根迹、今又長育、但若其材、土人畏敬、莫剪伐者、然由　公将臨遮其社途、令伐避旁云、又有林泉址、在杉株南、草際僅

凹、至無可觀、入謁三社、威霊可崇、庭有鐵矛、植於華表側、全身赤澁、可近古物、社北眺旁、有險隘谷、此為鑰掛口、隔谷而西又有岡巒、相傳、使樺山浄慶移居于此、以備不虞、於是、元亀中、飫肥寇夜入不動街、燒夷民舎、進攻此口、於時、浄慶父子三人、叫譟招衆、拒鬪死之、城将川上忠智急発城兵、夾擊其師、死者六人、由是、寇退屯木崎原、竟大敗績、抑此口者、魚貫而躋、實要嶮處也、而来攻之、陷　公術中云、凡平坦地、可数十頃、多為場圃、近停　輿後、稍廃壊云、下抵両岐、南降旁徑数十武、泉出乎山腹、亦繚短籬、潴為小池、周餘壱歩、言、還　輿後、今隊長西田直、始相此水、所掘而出、視諸阪泉、雖地益高濫觴反溢、掬而嚥之、水亦清冽、流而注麓、復就来路降土阪、途訪宮内某及季致舊宅、而回貳宗、未牌、相偕又出、往詣別館、恭觀新營、実今歳　公所賁臨、而豫親密

実心君諱重頼、称主膳、正官為談合役、亦加久藤地頭、后復新納氏、更名忠尊改彌兵衛、拜御口地頭、御使役轉大賀州諱忠清、官御使役大口地頭、諏訪氏諱兼延、称采女、官為御使役、禪牛君諱重倫、称杢右エ門、仕為吟味役、領坊泊地頭、府君孫也、

臣、巡卜地於此、鳩工択材、以夜継晷、稍迫其期而告竣云、宏麗華潔、令人起敬、抑聞、此地者、昔吾嘉翁府君、至其嗣子実心君、所世襲地頭、皆随其妻帑及隷士家僮等、莅以鎮戍之廨址也、按、其始徙、在寛永丙子、而其離任、在萬治庚子、中間居廨二十五年、但實心君、本新納氏、賀州次男、来為嗣子、娶女襲職、陞談合官、至其本氏無後可嗣、復新納氏、時乞従弟諏訪氏之子、妻己次女、令以嗣吾家、是為余高祖禪牛君、君時尚幼、如其任所　官命其父采女為邑地頭、使君之従祖姑仍率家僮居于此廨、如父祖時、而至寛文中、采女亦轉他邑、竟還府宅、前後居廨三十三年、可謂久矣、然後、迨　大信公（重豪）命建別館、移廨於今地、因稱此址、謂舊廨云、而其別館、亦後稍撤、今復如斯、凡物換世移、恐其稱呼湮或湮滅、故記所聞、又廨舊蔵　琴月公蹟、毎歳且、□邑士聚拜為故事、至　大信公遊覧、

而齎還蔵諸史館、更親揮毫、書千年固三大字、裱装賜之、令蔵且拜如故、而今蔵諸別館云、余竊拜觀、筆法遒麗、寔可宝蔵、一説、舊蔵雖谷口家物、其宅弊壊、恐雨漏而蔵之廨、竟聞如右云、未知孰是、去觀今廨、廨蔵両扉、相傳、至毀城門、置之於此、非施鉋(鉋カ)板、所鎖鐵器、雖亦具存、當時質樸、可以觀也、蓋其毀城、遵元和制、亦可知耳、而隷士小原宅、堺廨東南、同姓宗助等宅、隣偏南、季包宅、堺舊廨西、凡當時親昵多居比隣、如季包宅、由牆徑云、凡吾庶族、貫邑籍者可十戸、而隷士寄貫者八姓十四族、今也皆傚余祚薄、衰微過半、多離舊宅、僦舎乎僻邨、故其居址、犁為蔬畦、實可太息、又抵不動寺、寺在廨南六十餘歩、亦北原氏剏、舊在徳満城、後移于此、為祈報所、相傳、元亀中、飫肥将伊東宗右等入此寺街、燒夷民舎、城兵発出却之、寇恐遮後、退屯於小田渡、時主僧久道七世

所謂八姓伊地知・河野・小原・永崎・池上・佐土原・山下・川畑也

韜銃於衣袖、陽為陳僧、行乃陰発、立斃宗右、一説此時殪米良筑後、按筑後為村尾重候所殺、疑傳聞誤也、残卒為是悉敗走、屯木崎原、為公所破云、謁幻生廟、即瘞公子骨處、寛永癸未、府君居任、奉旨興造云、前有石燈、植於左側、崇可六尺、此正保丁亥、吾實心君襲職之六月、所偕群士建以薦廟者也、面鐫君姓名職任及邑吏等二十八名、觀其列序、右吾同姓、始乎季包・宗助等祖、亦當時威權可以知也、又府君嘗奠十一面於宝蔵院、迨院廃圮、遷寺尚存、今觀其像、剝阤頗多、欲與主僧図修飾事、弗遇可憾、由寺捷徑、出於廃院址、登愛宕山、曲徑陟阪数十百武、荆棘塞路、披而躋攀、翼然堂宇、建於其巔、為雨所嚙、礎墜頽低、得縁柱登拜畢、觀塑、甲冑騎馬、巧彫彩麗、儼然可崇、相傳、寛永己卯、府君偕邑士、創祠于此、使宝蔵院領祀事、而院、寺主隠棲、今廃圮云、先是、府君皇祖備後守諱重康、天正中、以地頭鎮戍平泉、備玖

麻彊、建堂祠之、創勝軍菴、令領祀事、方其
将廃、府君復新、葺修相継、尚存乎今、余嘗
往謁、而又創茲、前年、府君将衆師于島原、
與攻原城、麾衆舊進、斬首数級、凱旋于邑、
其翌己卯、知邸京師、據是觀之、其偕赴軍、應
必有禱、而暨凱旋、祠以酬愿者、似於情然、
而其像、則府君在京、所命佛工彫刻以遺者、
亦無可疑也、噫彼一時爾後昇平載剰二百、世
稍忘乱、祠徑蕪莽、知治既極、雖若可慶、亦
可無顧乎、下訪谷口宅、杢乃邀招、燕飲互
酌、饌頗豊、見母若妻、妻亦庶胤季明女、而
季包姪也、於其母、昔年余以監吏巡察柁城、
邂逅逆旅、為帰自觀中山貢使時、屈指憶度、
實四十年、誠哉駒隙、今復面晤、可謂奇縁
也、飮罷、導渠、欲覧古戦場、申牌、出門、
右折入飯野堺、摂衣渉川、過田疇間、偏東可
里、抵三隅田、在飯野城偏西里許池島邨、此
元亀壬申五月、　松齢公在飯野城、聞飫肥寇
夜可寅牌、自上江路入襲角藤、四日辰牌、親
将発兵、徑趨新城、斥候来報、寇已退屯此曠
原、轉過野谿、出於二八阪、直濟廣瀬、邀木
崎原、大敗其師、身親挈鎗、與飫肥将伊東祐
信格鬬乎此、其時、祐信持鎗衝　公、　公馬
乃跪、鋒不中兜、由是、　公反刺祐信、祐信
墜馬、従兵渋谷続獲其首云、按宝永中大史國(田中)
明為種伊時撰、建於帖佐亀泉院馬塚碑、　公
親追北、抵鬼塚原、柚木崎丹後・肥田木玄齋、
執弓返戦、方　公槍之、其所乗馬、跣膝伏地、
因　公下馬、突而獲首、故称其馬、曰膝跣辭、
寿八十三、一説跣膝、為衝丹後時、或為衝玄
齋時事、併諸前説、似跣三次、未知孰是、且
戦場亦或木崎原、或鬼塚原、傳聞異同、莫能
考也、又馬本産於柁城西別府、或因長壽院所
獻、馬曰長寿院辭云、併記竢考、吾先考曽有
觀碑詩、吾君辭駿舊龍□、碧蹄生風金瞳開、
一日長鳴千里外、身振汗血絶塵才、両耳批竹

毛蠶乱、走過掣電為誰来、元亀之中飯城東、
與君一心氣自雄、縱横臨陣将破敵、逸足跣膝
成大功、功成恵養伏櫪年、馬官厠養皆周旋、
但有金策堆前石、功名不朽萬古傳、亦謂此事、
故収于此、而　公其時憩腰石、所存處此也、
繚牆植杉、為一叢林、前有小川、清水潺湲、
架之略彴、度而觀之、自然石也、旁石磴建、
身斫六稜、各彫地蔵、翰遊集等所謂、　公為
此兵死、所弔而建云、此也、今使導摩辭、漫
滅無字云、出觀三隅田、隣於杉牆偏南十武
許、畦稜三隅、到今猶然、因得名云、益陟出
野逕、所衝村樹森欝、為一廛宅、名野間門、
相傳、五代友慶所設覆處、而二階堂某射殪飫
肥将伊東加賀、獲其首級亦此覆云、左折循牆、
行数十武、至木崎原、由原東南山曰小木原、
有加賀立塞址、而　公従二八阪、經杉水流、
濟廣瀬水、趨迎于此、諸覆亦一齊竝起、大敗
飫肥寇處、此云、今唯墾圃犁田、其可稱原、

馬乗勢跪

叢爾草野僅遺乎徑旁耳、益進行数十武、抵濯
刀川、在三隅田東、鬪士既克、皆濯血刃於
此、因得名云、今唯草際小渠、不足成川、遇
雨輒涓流耳、左有小壟、名曰首塚、所聚首瘞
處云、凡係此戦名區不尠、所謂二八阪、在飯
野城偏西十九町許大明司邨、遙望之於杉山
中、而田原陣、亦在其城南里餘末永邨、一名
桶平、此飫肥師来立塞處、又粥持田、在小林
廨偏西二里許北方邨橋谷原、相傳、　公既破
寇於木崎原、挈鎗鞭馬、追北相及敵将柚木崎
丹後於此渡、乃衝刺之、其鋒弗及、乗勢馬
跪、得以能殺、即其處云、而距木崎原可二
里、一説、其時丹後脱兜小憩、會邨農知其為
将、持粥食渠、故得其名、而置兜石尚存、高
可四尺周餘二丈、名曰兜石、按舊乗、此戦尾
擊凡可三里、　公獲丹後首、或為木崎原事、
又擊新次等、為古陣原、擊權頭等、為本地
原、又如本地原、　公遣村尾重候伏兵處云、

或其尾擊至鬼塚原云之類、名區猶多、不可能考、雖欲尽觀、恐日将暮、自首塚回、復躡来路、聞故地頭玄巣伊君墓在村居裏、右取旁徑、往而觀之、所逆修寿塔也、薄暮、回宿季包亦回、此夜、坂本郷右来候、亦隷士永崎姑壻、所嘗相識也、　六日晴、余欲遊大河平、而選之導、咸曰、伊直為其姻属、乃導渠、随季慮・彌次・僮吉、巳牌、飯後又野装出、由松原街復入飯野、而度略彴、東北可里、過邑市閭、經士戸街、左折数十武、登長善寺、寺在廨偏東四百餘武原田邨、老杉夾路、幽邃可愛、稍進入門、庭除弘闊、鐘楼建右、巍々佛殿、當其正面、雖以茅葺、頗為崇構、聞昔應永丙子、北原範兼剏、招僧明窻為之開山、明窻諱妙光、嗣法於能州總持實峯、以高徳聞、範兼邂逅其雲遊於上江邨、感服招刹、附田百町、宗風振世、稱為實峯派、門葉蕃衍乎他州、迨北原氏衰喪城邑、寺亦敗壊、而至　公時、又興葺之、賜禄百解、然亦京命奪其禄田、今微禄云、寺主乃速、余仍野装、謝不登堂、小憩玄関、午飯啜茗、而又起、寺主遣小僧送導捷徑、由圃間而魚貫山行、或陟或降数十百武、小僧旁避、遙指示方、由此、随指、右折陟阪、屈曲出於野徑、就右逶降阪、而度略彴、又陟出於徑路、伊直乃導、行餘半里、得小聚落曰下大河、既過離村、出於大河、河不架橋、又無略彴、水中量歩、間置巨石、便蹈可渉、乃摂衣、択跳渡之、進陟土阪、所謂七折阪、此云、延縁阪尽、出於原上、地勢開豁、有柵建閭、過則坦道、其直如箭、左右皆門牆、人煙頗繁、似過士街、行数十百武、左所構門、此貳宗宅云、益進、右折又入閭、左轉亦如士街、此皆其家僮云、益行数百武、又左所崇構而門牆頗壮者、即大河平主人宅云、庭除弘敞、如大夫家、凡所過街垣、及主人垣、躑躅蔓生、皆剪枝葉齊整稠密、如塗壁

然、清麗可觀、伊直云、遊春華時、紅爛照映令物皆赤、特為奇賞、主人迓招、解裝就坐、不直棟宇閎麗以娛人目、南向眺望、霧島東若西及夷守飯盛之諸名嶽連山、横乎雲間吐奇致美、攢聚一睫、以資前栽之□泉、其絶勝罕□、可以使王侯貴人亦羨之也、主人名隆政、字休四、父名隆章、今已老矣、皆雖未面識、休四嘗介人、請余文稾、故歡余至、燕飲為饗、調饌陣莚、炙鹿肉特珍、酒亦醇美、所随多陪、余言、渠等竝吾庶胤、而老君曽妣、出於伊直、又高祖令姉、嫁彌次先、今皆陪亦有因耳、父子愈歡、飯罷、擁鑪各宿、夜甚雨、　七日、雨愈降、主人益歡、乃出舊蔵、請余悉讀、在側聽之、歴按文籍、其先出自肥後菊池、姓藤氏、別祖隆俊、称八代五郎、乃菊池肥後守隆直第五子、受封八代、因以為氏、而其始徙大河平者、莫能考也、自別祖傳十二世、至越前守隆屋、世食采於大河平、属北原氏、迨永禄中北原和降乎　松齢公、隆屋亦降、　公乃命隆屋安堵舊邑、以備日肥疆、因易氏大河平、□隆利時、飫肥来寇、隆利拒戦却之、家僮死者十餘人、　公賞其功、益賜采地於灰塚榎田等、更択要嶮、築城戍之、所謂今城此云、隆利蚤死、子隆次嗣、初今城成、　公遣援兵與以戍之、甲子春、北原告　公、　公罷其援兵、於是五月、伊東義祐窺其釁、親将起兵、立塞於□松邱、来圍今城、先使僧説曰、速以城降、授汝城邑、永保其禄、否汝等命危在旦夕、隆次等為　公威固死守、却駡詰使僧、義祐聞而大怒、晦日昧爽、遂進攻城、其鋒不可當、隆次及従兵百有餘人、舊戦死之、後又義祐遣使如玖麻、連兵相良謀伐飯野、使者往、宿皆越其宅、某有弟、乃隆次娣婿也、間聽知謀、竊遣人報告角藤、　公大悦、乃使兵戍大明司以備之、繇是、戊辰二月、　公徴其夫婦於玖麻、使國相忠智等命嗣隆次後、賜之大河平、

因冒大河平、更名隆俊、而至壬申夏飫肥師襲角藤、玖麻師亦立塞於大明司之山、然知其既有備、不敢會之、且　公轉乎途趣木崎原、由此戍卒斥候有以報告云、實隆俊等功也、隆俊無男、初隆屋次子隆堅、死乎今城之難、其子隆重、戰歿朝鮮、有二男、隆商・隆尚、至是、隆俊養隆商為嗣、既而慈眼(家久)公召弟隆尚質於柁城、使隆商襲守封疆、如祖先時、隆商歿、子隆賢嗣、寛永中、　公徵於府、賜之鳥銃一口・青銅千疋、益令以守封疆、而徙隆尚、質於府下、隆賢歿、子隆良嗣、隆良歿、子隆由嗣、世領舊土、襲守封疆、至若班級、因循竟至貫邑士籍暨隆由時、元禄丁丑　大玄(綱貴)公擢為府士、仍守封疆如故、而隆房、前此執贄青銅為例、至隆房時、贄必執弓命也、而隆雄、而隆喜、自遠祖時、世守封疆於大河平、所臨使家僮数十百戸、而於資格猶列庸士、似無差等、隆喜上疏請于　官、天明辛丑、特陞小番、令世勿絶、今隆政即其孫云、凡自享封、載垂三百、襲領宗邑邑、周減八里、而世居墳墓地、匪獨三州、博訪天下、亦所罕比、要之、豈得非其先世守義、以偕家僮各塗脳血之忠報乎、其最称舊文翰、率皆官券、若貴權手帖也、所謂忠智・貞刻・久元・貞昌等竝為國相、伊肥州・伊遠州等為邑地頭、平久清・比國詮等為近侍之類不悉記焉、読畢、主人為酬余労、壺槳又陣、遐荒之山中、海産之魚蟹、其雖或乏、山獣野禽、所獵而獲、富乎庖厨、余既饜飫、陪客笑言、飽下箸亦惟一夕、何勝食氣之有、夜話燕飲、已過人定、禱明霽而眠、此日、彌次先余回、　八日早起、雨果晴、飮罷野装、已牌皆偕辞去、由庭過徑、告別老栖、貳宗女亦追来言欲邀渠宅、聞既着鞋、聊携一壺、倘挽弗留、請勸一杯、余欲此日途過上□(江カ)登白鳥山、慮其迂遠、必暮乎逕、一盞而辞、就前日途野徑村巷、山川田圃坦嶮

互出、或陟或降、南行可一里、入一村落、導云、此昔　先公所賜▒、而其徒世相継耕耘以食之地、幅員餘里、今其當室、名称彦六、繁簇聚落、俗穢多邨云、此也、在飯埜城東南二十町遠、邨有祠廟、蔵　公甲冑、亦其所賜云、使導請觀、値彦不在、不果、余聞、元亀中、飫肥侯竊遣兵、夜銜枚、入襲角藤城、渠之先曰丹馬者、聞甲兵錚々赴角藤人馬之行声、竊趨告　公、　公乃分隊、使五代友慶潜行、覆於野間門、使村尾重候、覆於本地原、遮其帰程、別使遠矢良堅馳于新城、以援忠智、又張旌幟於諏訪八幡之諸山、往々為疑兵而　公親将一隊、従野谿前、欲邀以擊、斥候報、寇既退、屯於木崎原、　公乃由二八阪、濟廣瀬水、徑迎寇回、覆亦竝起、夾而擊之、飫肥師敗績、鞭馬追北、尾擊、手獲将首於鬼塚原、其所以克、由乎丹馬有先所告、故賞其忠、賜渠物件如右云、爾后、子孫世氏▒、近古戸籍、不知自何時、推尋常例、貶為無姓、彦六懐舊弗懌、乃近陳情、拜疏有請、廷議亦顧渠先勲著乎青史、特允其請、辱復先氏云、方其上疏、渠托一士、其人煩余、為之文藁、渠應弗知、益行右折出於上江街、導云、由途出於如□堀某前、小憩渠宅、乃訪其宅、主人迓招、妻即故季致第三女、亦吾庶胤、忽陳肴蔌、属杯於余、請必一宿、時夕陽在山、恐行路猶遠、艱乎昏黒、一飧而辞、行数百歩、左折陟土阪、所謂白鳥山、登自此云、足指漸仰、延袤可半里、抵一聚落、街戸整繁、皆隷寺門、所謂下門前此云、過此益陟餘数百武、夕曛中過上門前、愈進陟阪、老杉夾道、左右深山、不知幾千章、杪参雲表、其大者各七八圍、若可十圍、皆二三百年物、森欝陰翳、月出山頂、亦不漏光、遭樹所疎、間仰朧月、晦々多明稀、暗黒探級、泥濘没脛、前者呼、後者應、各恐其或蹶然陷旁崖、既過

華表、又陟可里、途為両岐、左詣廟道、就右益陟、抵満足寺、寺在權現廟下可百二十歩、傳聞、此昔釈性空剏、舊係名刹、至應永中、僧光尊来興其廃、時轉密宗云、庭除曠闊、構頗崇閎、廳堂庖庫鮮不悉備、然而深山幽邃、闃乎若無人、使僮請宿、寺主廼使僧挑燈、迎招且出湯浴、余及同行、皆解装濯足、入謁寺主於丈室、乃廷吾儕、環爐各附火、以憩山行之疲労、頃刻、辨饌、互飲巡杯、飯罷、授寮、圍火而臥、有能慣旅客、雖逆旅主人、豈其優之、凡得益於□、實踐知人情、如斯之類也、汝輩識之、　九日晴、曉鐘響枕、經声亦聞□堂、乃起啜茗、竊私寺主、請觀舊蔵、聽之、乃類漱拜讀、天正戊子、　松齡公始朝京師、賜寺文翰、以令告禱、又慶長己亥、荘内之役應驗特著、庚子正月、　慈眼公親賜手券、寄捐田禄百四拾斛零、當時丹誠皆溢藻詞、爾後相継到于今、寺田歳租、蠲其課役、亦根據乎此云、飯後、欲浴温泉、回謁　宮廟、巳牌、導伊直、出寺降阪、取路於山中益陟土阪、奇石怪巖、峙乎路旁、回旋躡級、寿木老樹蟠於其間、逶迤躋磴、流渠多温泉、氣似白虹、行餘三百武許、有一小室、倚於巨巖側、新造華潔、啓扃窺内、即宮池也、導云、今歳夏、　公所臨浴、故他遊客不得浴焉、過此、就左益陟、茅屋夾澗、對結両邱凡六七戸、而有温泉、在於澗水旁、此浴小民池也、上覆板屋、幅員減丈、深二三尺、其清徹底掬而味之、有礬若硫黄氣、以板屏中、隔如両池、接筧引泉、瀉其上方、如小瀑水、此為碓躬處、余及陪者、乃浴于此池、無火自熱、山遊疲體、頓以融暢、寔快哉、又西南数十歩、有板屋池、又陟乱石、行数十武、有小板屋、在於泉所出旁巖如亀甲處、啓戸覩内無池可浴、鋪板於閣、幅員餘歩、躶而坐臥、以闔其戸、下有沸騰声、不如煮湯何許作此声、而氣烝於

罅、須之、欝熱足以煖體、髪膚流汚、能捐夙痾、此最宜云、吾儕随意、或烝或浴、比過亭午、寺主使小僧具午飯、齎饋吾儕、得藉以各遂所欲者、至三四次也、又欲觀泉発源處、由此、猶益探於山頂、朽幹僵路、秦棘不蹊、披荆捫葛、陟数百武、抵巨石乱峙縱横臥竪處、土多黏土、数種異色、如窯陶土、但於其間有温泉、糜沸泥騰、以吐白氣、如鼎烹物處、徘徊移歩、不知幾處、里人名曰地獄、名亦宜也、顧先人遺體、其誰緩留乎、乃去下山、復就来路、左折陟阪、行数百武、至阪将尽、架一橋、度而抵廟庭、廟在廨南可二里十九町末永邨、巋然正殿、極為壮麗、宝扉両楹刻龍彫雲、雖無朱漆金彩以施其飾、固竭巧力、厳威可仰、按寛文中主僧覺仁撰社記、釈性空巡霧島山、抵茲山頂、読經於池滸、老叟忽然来聴其誦經、語空曰、吾為日本武尊、化為白鳥、久棲此山、因祀尊於此、崇其廟、曰白鳥權現、創刹於下、奠正觀音、兼掌祀事此満足寺云、余按彰史、尊乃景行帝皇子、□名小碓命、来討熊襲、西州寧謐、因獻嘉號、曰日本武尊、後又東征、薨于伊勢、年三十二、帝聞訃哭泣、乃遣群卿葬之、忽化白鳥、飛於兆域、開□視内、唯有明衣、尋鳥所止、既造三陵、皆曰白鳥陵、然而又飛、不知所之云、據此其時則止乎此、亦不可知也、傳為軍神、至元亀中、飫肥入寇角藤、不克而退、将踰此山而遁高原、寺主光厳乃趨禱神、自麾臧獲、颺旗操兵、大譟降阪、由是、寇皆陥伏中大敗績云、於是乎、公愈褒崇、剣甲兵器屡捐酬愿、事詳邑乗、性空又手刻六觀音、奠諸読經處、因繫池名、池在廟偏南可二里山頂、周餘里許、惜不往觀、拜罷皆下、歩自廟後、降阪数十武、出於寺後圃、乃謝寺主、申牌、出寺、躡前日路、左折降可二里、黄昏、還角藤、途詣二宮廟、廟在廨偏南二十餘町栗下邨、祀　仲哀

帝、　帝乃尊子、両楹雲龍、最極其巧、展拜階下、惜不入觀、而過二宮寺、寺堺廟後、祀十一面、相傳、此宮舊小祠、　琴月公降誕於邑、特崇祠祭、慶長壬寅、命置祭田（税額卅斛）於此邨、己酉九月、興葺陪舊、寛永丁丑、復命益田、併故伍拾斛、吾実心君居任、亦興造祠宇於明暦乙未、而寺燬乎天和癸亥、尺椽不遺、然後所新営云、由此、又途訪盲僧於三徳院、盲僧迓招、供茗及菓、執禮甚恭、相傳、院、昔　先公時、盲僧菊市、雲游以俔他藩密事、樹功於探聴、故所賞擬令賜渠居、特許募縁、遍併数邑、以垂法業、徒弟承継、　今公亦近臨此院、有恩賚云、薄暮、抵境田氏、主人邀招、亦伊直姑壻、字稱七郎、娶季致女、實余庶胤、於是、其母若谷口等、相偕饗余於此、令設浴以洗山遊塵、小飲話舊、隊長西田直来、乃時殷男、近回自府、報余家信、彌次亦候、皆陪筵、余憊甚、飯而宿、季慮・僮吉・偕直等、去還貳宗、蓋可人定也、　十日、晴、早起、余蹈霜回、寒風砭人、七郎亦送、至旅舍、乃聞之人、今地頭使遽傳邑正、以徴季包於府宅、朝服竢　命、頃刻季包趨廨、聞旨而告余曰、請君帰装、少延其期、幸因趨召、陪送　府下、倘其或訊、相以吾馬耳、余欣躍曰、為追遠来、伴徴擢還、福莫超此、偕汝発回、於是、余率僮吉、復謁先墓於徳泉寺、摩蘚掃苔、及旁近墓、府君墓西可二歩、有同族重時墓、一片石也、正面鐫渭川等竹、以明暦丙申九月二日歿、姓名具刻、無可疑焉、字稱治右、故泉侯遺老、至侯國除、吾府君之皇考富山君（民部少輔諱重堅）地頭於山野、辟為隷士、富山君戦歿朝鮮、迨府君立襲地頭、配隷如故、所輔弼多、自時、歴羽月、至於本邑、遷易皆従、屢有功勞、故　官賜田禄亦特超衆、寿九十二、死於實心君時、余嘗聞諸黄耇、毎歳元旦、地頭之受賀也、群士雖衆、自治右始為例

云、即宗助等祖也、聊併記焉、此日、季慮及彌次・齋杢・西直講武於廨、亦坐擊也、夜赴齋藤氏招、饌調佳味、燕飲頗豪、西直・伊直・彌次・僮吉等陪飲、半夜回臥、　十一日、晴、人咸勸余、不復易遊、宜必浴於吉田温泉、於是、又導彌次及其弟杢、巳牌、相偕赴吉田邑、凡可半里、皆就来路、由湯田邨、右折循川滸、隔水、遙望遺墟於松山頂、所謂徳満城此云、昔北原坊州所據有、而與相祐頼鬪死于此、後又總室久林所割腹死、亦此城云、一説遁自此城、途墜馬歿、祠霊於其處、崇曰峯八幡、今在飯埜原田邨、即此云、未知孰是、行数百武、右折度圯橋、入馬関田、循川下数百武、度略彴、陟土阪、逶迤行餘里、右覩山王祠、建於邱岡、循岡之足、廻折則有華潔室、亦官池也、左廨北十七町許昌明寺邨、言、此今歳　公所浴處、故他遊客不得浴此池、堅鎖其扃、不得啓窺、由此架筧、引其餘泉於墉下、瀉如小瀑、瀦為小池、幅員半歩、此小民碓躬處、又其下有両小池、在茅屋中、所併周員僅餘一歩、亦浴小民池也、清瑩可鑑、手掬味之、鹹而如渋、亦兼礬氣、吾儕浴之、各両三次、疲勞頓捐、聞之土人、能治創疵、又癒五積、無疾不驗云、屋旁小渠、多皆温泉、遊客所舎、僅三四家、若置諸衝要地、豈翅如斯哉、其所出處、実在遐陬、可不惜乎、啜茗午飯、去躡来路、折自略彴左行数百歩、歴邑肆廛、過廨舎下、谷口杢娣迎招乎途、至則邑正宇都氏、主人恭迎憩余於宅、自稱源允、娶谷口氏、亦吾庶胤也、玉饌乃調、對酌燕飲、語及舊歳、拜觀　松齢公所賜渠先古剃刀及泗川直籍、按、剃刀類今清製、直籍為慶長二年新塞従兵名簿、而昔年史館既徵原本、所更賜摸本也、余有家僮姓田内、稱七兵者、来謁余於此、乃召觴之、渠先、本貫為角藤士、至七左時、筮仕於吾實心君、至君既

歿、寓馬関田、七兵即其五世孫云、去取来路、夕瞧急程、戌牌、回貳宗、此夜、隷士同姓宗助・源太・祐進・外記・新助・小原森・小原宗・永崎與・永崎金・佐土原惣等相俱賸余、饋茗及活鷄等而来謁者不絶乎坐、他所相識、亦来饋物件、不悉書也、　十二日、陰翳、昧爽、辨装、季包遞馬未至、余及季慮等、告別闔族、期季包追及於途、相偕先発、男女老幼、送至松原口、惓々離情、如出故郷、復取来路、行可三里、抵吉松邑、訪中邨氏、謝辞未既、季包相及、余乃乗馬、他皆歩行、抵熊嶺阪、行人連綿、不絶乎途、唯於其中、有跪馬前拜于余者、觀其擧頭、即隷士伊新助也、騎而為別、行聞季包、左降野徑、出於荒波、亦栗埜之勝、近拓石徑於其旁岸、至國相調君亦親經而覧之、君今往觀、不亦迂廻、余喜又欲觀其勝、乃下馬、前導季包、就左降阪数百歩、至其川滸、右循嶮絶、縁石輦石、累□開路、陟眺降瞻、互異形状、両岸相對、岸皆峻壁、川流乎間、巖峙石乱、聚壅水流、隆起如象、屹高如屋、縱横交錯、水競其罅、或激而雷轟、或伏而噴雪湍洶致怪、藍漲呈奇超妙勝絶、不可悉圖述、而其經如斯、蓋餘二百歩、土人謂之阿婆、未詳其義、俗謂怒濤、曰荒波、疑其訛邪、使禹復出、石歯湍險、安能浚疏以行舟乎、余之此行、多捜奇勝、山水佳處、莫觀過之、下流漸平緩、而過野逕、出於新倉、過此憩駅、啜茗午飯、托吏、致謝於肥后氏、直過横川經溝辺、行餘十二里、薄暮、降龍門阪、夜已過戌、抵柁城市、余及季慮等、乃宿新納氏、　十三日、稍晴、使僮買舟、由風不便、無張帆賣者、皆議陸行、主人挽余曰、必俟明霽、余憊亦甚、於是、発季慮等偕季包、先回自陸路、余乃憩宿、主人又示舊蔵、而讀家乗、則渠先久供、娶於新納氏、乃與吾實心君従父兄弟也、據

此、匪但舊識、有因亦久、交誼愈親、申牌、時行・時房導余、遊安國・椿窻二寺、而安國、雖名藍殿宅頹弊、僧亦不住、有文之墓、文之名昌、日州南鄉人、以儒僧聞、詳見余所撰漢學紀源、余遊柁城数次矣、而茲寺未之及也、毎為欠事、今而始謁、實遂夙志、椿窻舊名萩原、迨肝屬兼盛食采於邑、承　梅岳君翁主、生男兼寛、殁謚椿窻、故至兼寛奠主於此、更為今名、開祖鳳山、昔以陣僧従　松齡公於朝鮮、而運所獲材、以造此寺、稱其古材、至今猶存、佛殿前壁、所彫画板、即是也、今琉僧久住于此、近歳、加営葺亦其力云、供中山酒若氷糖、少頃巡杯、夕瞑偕回、此夜、亦主人酌余、饌頗美也、與時房話、過夜半眠、風愈厲、怒濤響枕、　十四日、早起、天稍将晴、託人買艅、尚懼風濤、不敢解舟、余甚恐　萱堂壽踰九秩、日夜或憂余回遅、帰情頻切、乃亦欲歩而還自陸、主人固留、余不聽辞、迺遣僕齎行厨、送以従余、發於巳牌、不暫憩足、午飯亦行食乎途中、凡可五里、過申帰宅、家人待門、萱堂無恙、　十五日、季包来報、此日趨召、復拜隊長、凡此行往還、餘四十里、跋渉半月、備歴艱苦、雖健則健、屡躡崎嶇、患牛程蹇、唯一夕入直衛署、私謝同僚、益苦歩行、曠日不瘳、余乃自□、潰其膿血、還速内攻、托療於醫、以閑居久矣、季直云、若此遊、則不可以無記、余亦以為嘗襲山之遊、欲記其勝、既雖起草、不及羈事脱稿、今遭茲患、似□之欲假余暇、使以記之、倘果然、則非必患也、可以為幸亦可也、遂記概略示之兒輩、使以異日裨家乗之缺爾、

2

十二月十六日

潜隠伊地知季安子静稿

追薦嘉翁（伊地知重政）祐慶居士院號法語

削玉穆峯映碧寥、德泉見貌衆山朝、報章名耀廟堂下、
二百餘年當左昭、
弘化二年乙巳仲冬初四日、胥丁伊地知家六世先君、穆峯院殿嘉翁祐慶居士二百回之諱景、裔胤孝孫季安、豫齋香華、跋涉数里、就于德泉禅寺、辨備浄齋、綴祭文、以伸供養者乎、夫以居士者、曽仕本府、丕揚武名、擅英雄之威、並鑣、締断金之盟、勇氣豈敢劣項羽、德風何□愧公卿、二百年之日月、猶如一瞬、所謂君子不抱其子却抱孫、于茲曽孫季安、續其家業、今當仁其恩重於丘山、即今見乞山僧、為追薦於院號、憶念昔日佩符守藩之事實、則不忍黙止、豈無感哉、依而應于需、贈崇穆峯院殿者也、嗚呼正興麼時、二百年覆蔭之功、又何以為驗聳、
立嶺點成千尺勢使人倒退嘉翁描、

玉龍住山
橋獨山拜薦

3 嚮
（斉宣）
大慈公在輪邸日、使巖下亘潜傳　旨、以徴余所嘗撰管窺愚考等若干篇、辱備　英覧、叨蒙感賞、賜金拾両、而如愚考、猶齎於藩、以時　熟觀諸大礒別館、皆為可以資考證、迨
輿将東、復使亘賞賜金伍両及美濃紙、以悉還余、益致精訂、浄寫獻之、筆吏市政寛帯其　命、就余弊盧、潜以傳余、余也迂拙、以刑餘身、幸匪翅免乎媟瀆罪、忽承　褒奬之密諭、不堪悚慙、感激銘骨、惟　命是拜、既而未幾為史所徴尋、以納　館、不可得而鉛□□久矣、為之遷延、未逮竣其功、　公竟薨矣、　遺命所属宿諾須勤亦無如之、何實終天之憾、何日忘之、故余以為、永傳此賜□莫善於書乗譜、今此紀行非徒勝遊、實吾家乗補遺也、乃寫諸其餘楮、将併以貽　恵於子孫、因記概乎巻尾、永使以知余拙文、不足傳如其可補、與此賜紙不可不傳焉爾、

弘化三年丙午二月　　伊季安識

文書目録

例　言

一　本巻に収めた「伊地知氏雑録」「御旧式類抄」「御旧式類抄二・三」「寺社巡詣録」「諸旧記文書」（巻一～巻三）「襲山紀行」「襲山考」「帖佐来歴」「真幸紀行」を、それぞれ掲載順に通し番号を付して収録した。

一　文書は、番号のほか、年月日、文書名を記載した。

一　文書の年月日については、原文書記載の年紀はそのままとし、補筆の年紀は［　］で囲んだ。また疑義の示されているものは「　」で囲んで区別した。

一　年紀を欠くもののうち、推定しうるものは（　）で示した。

一　月の異称は数字に改めたが、正月、朔日、晦日などはそのまま残した。

一　原則として『鹿児島県史料　旧記雑録』及び『同　旧記雑録拾遺家わけ』にならい文書名を付けた。

一　重複等により省略した文書には※印を付し収載した。

伊地知氏雑録

番号	年月日	文書名
一の1	[正徳　三年] 九月十六日	田中国明・川上久儔連署伺書
2	[正徳　三年] 九月十五日	田中国明・川上久儔連署伺書
二		某覚書
三	(天保　九年) 八月	島津久風申渡書
四の1	明暦　二年 十一月　八日	奉得御意条々
2	天保十二年 六月	伊地知季安奥書
五の1	明暦　三年 九月　日	諸外城系図文書抑留帳
2	天保十二年 六月　中旬	伊地知季安奥書
六	万治　二年 九月　日	御記録方帳
1	八月十一日	某書状
2	八月廿五日	某書状
3	万治　二年 四月　十日	弘誓寺宗珉願書
4	万治　二年 八月　日	鎌田政直証状
5	七月　九日	某覚
6	七月十二日	某書状
7	八月　九日	某書状
8	七月　五日	鎌田政直達書
9	九月　三日	某達書
10	九月　三日	某書状
11	八月廿五日	鎌田政直返答書
12	九月　朔日	某書状
13	万治　二年 九月十一日	平田純正伺書
14	九月十七日	某書状
15	(万治　二年) 九月十八日	鎌田政直返答書
16		某覚書
17	九月十二日	某書状
18	九月十八日	某書状
19	十月　朔日	鎌田政直書状
20	十月　朔日	鎌田政直書状
21	(万治　二年) 十月　朔日	某口状書
22	(万治　二年) 十月　二日	亀山久運請状
23	十月　朔日	某書状
24	十月　三日	某達書
25	十月　三日	某書状
26	十月　二日	某覚
27	(万治　二年) 十月　三日	某書状
28	十月　六日	某書状
29	(万治　二年) 十月　七日	鎌田政直返答書
30	(九月十三日)	平田純正伺書
31	(万治　二年) 十月　七日	鎌田政直返答書
32	九月十三日	平田純正伺書
33	十一月　九日	某書状
34	十一月　九日	某書状
35	十一月　九日	某書状
36	十一月十四日	某書状

※

※

37	(万治　二年)十一月十一日	某返答書	一六　七月　八日　児玉實門書状
38	十二月　六日	某書状	一七　(宝暦　七年)　四月廿五日　本田親方外二名連署調書
39	十二月　五日	某書状	一八　月　日　聖堂造立之地面調案
40	十二月　十日	某書状	一九　大概記
41	(万治　三年)　正月廿八日	鎌田政直返答書	二〇　(文政　九年)　四月十五日　相良甚太夫書状
42	(万治　三年)　正月　三日	平田純正伺書	二一の1(文政　九年)　四月十三日　相良甚太夫覚書
43	正月　六日	鎌田政直達書	2(文政　九年)　五月　廿日　伊地知季安覚書
44	正月　七日	鎌田政直書状	二二の1　明暦　三年　四月廿六日　島津久通外五名連署引付
45	正月　七日	某書状	2　明暦　三年　四月廿七日　島津久通外五名連署引付
46	正月　七日	某返答書	3　明暦　三年　七月　四日　島津久通外六名連署引付
47	正月十六日	某返答書	4(文政　九年)　四月十五日　相良甚太夫書状
48	(寛文　元年)後八月十二日	鎌田政直返答書	5　文政　九年　五月十三日　伊地知季安覚書
49	(寛文　元年)後八月十二日	鎌田政直覚	二三　伊地知季安覚書
50	四月　十日	鎌田政直達書	二四　元寛年月日記
51	天保十二年　六月　中旬	伊地知季安奥書	二五　寛永十八年　八月廿七日　川上久国書状
		御家文書所持之諸士記	二六
七		御家文書所持之貴賤同考之記	二七　明暦　三年　正月十五日　伊地知季安覚書
八の1	万治　元年　十月　日		二八　島津久通・鎌田政昭連署証状
2	天保十二年　六月　上旬	伊地知季安奥書	二九　寛永　六年　八月十五日　伊地知季安覚書
	天保　四年　六月　吉日	伊地知季安序	三〇　寛永　廿年　八月　二日　島津久元・喜入忠政連署曳付
九			三一　川上久国外三名連署引付
一〇	明和　四年　十月　日	記録奉行伺書	三二　伊地知季安覚書
一一	明和　四年　十一月十八日	記録奉行伺書	三三　(元禄　九年)　四月廿九日　記録所掟書札
一二	宝暦十二年　八月十六日	吉田清純・郡山遜志連署願書	三四　伊地知季安覚書
一三	(宝暦十二年)十一月	島津久亮申渡書	三五　(元禄十一年)十二月　八日　田中国明口上覚
一四	宝暦十四年　十一月	島津久品申渡書	伊地知季安覚書
一五	(宝暦十四年)十一月	本田親方伺書	

三六の1　諏訪神事頭屋一件書出
2（文政　九年）　五月十八日　伊地知季安書状
3　伊地知季安追啓

御旧式類抄

「御旧式類抄」（島津家本）

一　永正年間五十九ヶ條之事目
二　永正　三年　三月十二日　伊地知重房覚書
三　［万治　三年］　正月　吉日　伊地知重昌覚書
四　三献組次第之事
五　寛文　元年　十二月廿五日　島津光久古絵図之跋
六　島津久通跋
七　宝永　二年　十二月　廿日　伊地知重昌覚書
八の1　長禄　二年　正月　四日　本田国親吉書
2［長禄　二年］　正月　四日　本田国親書状
3　伊地知季安覚書
4　永正十三年　正月　廿日　大隅国留守所下文
九　島津喜入忠誉日記
一〇　島津喜入忠誉日記
一一　渋谷氏鹿児島参仕座配書立
一二　天文十一年　十一月　廿日　酒式次第
一三　伊地知重実日記
一四　上井覚兼日記
一五の1　椀飯之品書
2　元禄　八年　五月十八日　伊地知重英調書
3　伊地知季安覚書
一六　天正　七年　正月十一日　島津義久吉書
一七　本田公親年男日記
一八　伊地知重元年男日記
一九　伊地知重則年男日記
二〇　上井覚兼日記
二一　伊地知重元年男日記
二二　天正十九年　正月　二日　島津龍伯義久吉書
二三　高麗入日記
二四　高麗入日記
二五　面高連長坊朝鮮在陣日記
二六　慶長　六年　十二月十三日　兵具所達書
二七　慶長（三年）　正月　吉日　御持具足之事
二八　加治木御日記
二九　三献式次第覚書
三〇　慶長十九年　九月　四日　三献式次第覚書
三一　寛永十六年　正月　太刀進上座配
三二　正月太刀進上座配次第覚
三三　元禄十三年年頭座配
三四の1　享保　九年　七月　島津久春申渡書
2（享保　九年）　七月　島津久春申達書抄
三五　［宝暦　三年］十二月　記録所調書
三六　［宝暦］（十三年）十二月廿九日　吉田清純外四名連署調書
三七　（享保　廿年）十一月　比志島範房覚
三八　月之五節供之事並諸士朔望廿八日出仕之事

三九　永田氏冢木碑文
四〇　嘉永　五年　閏二月十八日　伊地知季安奥書

「御旧式類抄　二」（島津家文書大箪司）

四一　伊地知季安覚書
四二　享保　四年　十二月　五日　肥後盛香外二名連署調書
四三の1　諸調書書抜
2　宝暦　九年　五月十九日　某覚書
四四　宝暦十三年　二月廿二日　安藤茂真・吉田清純連署調書
四五　大村重頼古戦書付
四六　※　統日本後紀
四七　長久　四年　八月十一日　大隅国符
四八　天喜　三年　七月廿五日　大隅国司庁宣
四九　山門院地頭所務和与状
五〇　嘉禄　二年　十二月　八日　関東下知状
五一　正応　二年　八月廿一日　守護狩役左手右手書分事
五二　正応　二年　八月廿一日　守護狩踏馬役注文
五三の1　正応　二年　八月廿三日　守護代狩雇狩人注文
2　守護代狩雇狩人注文
五四　元亨　三年　七月十一日　守護狩歩兵差符
五五　元亨　四年　正月廿五日　沙弥円也守護狩夫支配状
五六　元亨　四年　正月廿七日　守護狩夫支配状
五七　元亨　四年　四月十八日　沙弥円也守護狩夫支配状
五八　元亨　四年　四月廿二日　守護狩夫支配状
五九　元亨　五年　後正月廿二日　島津貞久国廻狩供人注文
六〇の1　元徳　二年　八月　日　鹿屋院雑掌兼信申状
2　鹿屋院惣地頭代押領田在山野注文抄
六一　鮫島入道松岳自記
六二　応永記
六三　島津喜入忠誉日記
六四　島津喜入忠誉日記
六五　伊地知重実日記
六六　上井覚兼日記
六七　上井覚兼日記
六八　大村重頼古戦書付
六九　新納久儀覚書
七〇　［安永　五年］　三月十七日　伊地知重元年男日記
七一　上井覚兼日記
七二　伊地知重則年男日記
七三　伊地知重元年男日記
七四　上井覚兼日記
七五　上井覚兼日記
七六　上井覚兼日記
七七　慶長十二年　三月廿九日　島津忠長・樺山久高連署条書
七八　「寛永　三年」　二月　九日　島津久元・喜入忠政連署申渡書
七九　［寛永十三年］十二月廿四日　市来宗友覚書
八〇　寛永十五年　正月　小原織部佑書留
八一　［寛永］　五月廿六日　樺山久盈外一名連署達書
八二　寛永十九年　九月十七日　新納忠清・伊集院久真連署達書

八三	[寛永　廿年]	九月廿二日	伊地知重政達書	
八四	[寛永廿一年]	二月十六日	新納久親外三名連署達書	
八五			勘定所日記	
八六			御狩検者書上	
八七	[寛永廿一年]	五月　九日	平田宗直・相良頼員連署達書	
八八	[寛永廿一年]	六月　五日	新納久親外三名連署達書	
八九	寛永廿一年		差出案文	
九〇	[寛永廿一年]	七月廿一日	伊地知重延外三名連署書状	
九一	[寛永廿一年]	七月　八日	伊地知重延外三名連署書状	
九二	[寛永廿一年]	八月　四日	満尾堅介外二名連署受取写	
九三	[寛永廿一年]	八月　九日	伊地知重延外三名連署書状	
九四	[寛永廿一年]	九月　二日	伊地知重延外三名連署書状	
九五	[寛永廿一年]十一月　朔日		黒葛原忠清外二名連署達書抄	
九六	[寛永廿一年]十一月　廿日		曖衆・郡奉行連署差出抄	
九七	[正保　二年]	二月廿九日	新納久親外三名連署達書抄	
九八	正保　二年	五月廿四日	曖衆・郡見廻連署誓書抄	
九九	[正保　三年]	正月　三日	某条書抄	
一〇〇	[正保　三年]	四月廿六日	伊地知重延外三名連署書状	
一〇一	[正保　三年]	四月廿六日	伊地知重延外三名連署書状	
一〇二	[正保　三年]	四月廿七日	加久藤曖連署書状	
一〇三	正保　三年	八月十七日	北郷久加外二名連署達書	
一〇四	[正保　三年]	九月　朔日	薬丸兼陣外二名連署達書	
一〇五	[正保　三年]	九月　三日	北郷久加外二名連署達書	
一〇六	[正保　三年]	九月十九日	和田正貞・仁礼藤左衛門連署達書	
一〇七		八月　四日	某連署書状	
一〇八	[慶安　四年]十一月十二日		伊集院宮内外三名連署達書	
一〇九	[慶安　四年]十二月十八日		田口兵部左衛門外二名連署覚	
一一〇		九月廿九日	島津義弘書状	
一一一	[承応　二年]	八月廿九日	山法掟之事	
一一二	[明暦　四年]		廻文留	
一一三	[万治　二年]	十月　七日	町田七郎左衛門外二名連署達書	
一一四	万治　二年	十月十五日	岩崎藤左衛門・竹内志摩丞連署指出	
一一五		十月十五日	某三名連署書状	
一一六の1			島津久馮日記	
2			勘定所日記	
3			園田成芳覚書	
4			勘定所日記	
5			伊地知季安覚書	
一一七の1			山ノ口古今記録	
2			寛文二年日記	
一一八			山ノ口古今記録	
一一九			山ノ口古今記録	
一二〇			横山慶左衛門日記	

一二一　［天和　元年］　九月　四日　加世田七右衛門外四名連署申渡書
一二二　島津久馮日記
一二三　貞享　三年　十二月十三日　評定所覚
一二四　［元禄　二年］　六月　日　幕府条書
一二五　元禄　二年　十一月廿六日　評定所覚抄
一二六　元禄　三年　正月廿一日　評定所覚抄
一二七の1　十二月廿九日　評定所覚
2　岩山直道老号散木日記
一二八　某関狩日記
一二九　［元禄十五年］　正月十二日　島津久明外四名連署覚
一三〇　宝永　二年　十二月　某達書
一三一　［宝永　七年］　二月　関狩条書
一三二　某関狩日記
一三三　享保　九年　二月十三日　某達書
一三四　関狩賦
一三五の1　元文　二年　五月十一日　島津久貫達書
2　元文　二年　五月十一日　島津久貫達書
一三六　元文　五年　九月廿一日　北條時成達書
一三七　宝暦　六年　七月　島津久柄・鎌田政昌連署達書
一三八　宝暦　八年　二月十六日　鎌田政昌・島津久柄連署達書

「御旧式類抄　三」（島津家文書大箪司）

一三九　伊地知季安序
一四〇　明和　四年　三月廿九日　記録奉行調書
一四一　明和　四年　正月十七日　吉田清純外三名連署覚書
一四二　［明和］　五月　廿日　某覚
一四三　川上親盈覚書
一四四　慶長十三年　十月　吉日　種田秀正覚書
一四五　明和　二年　十月　二日　吉田清純外三名連署調書
一四六　萬調
一四七　寛延　三年　三月　八日　川上久儔外二名連署調書
一四八　御當家由来
一四九　十二月十八日　島津道鑑貞久書状抄
一五〇　貞治　七年　三月廿七日　島津師久預ケ状
一五一　［貞治　七年］　四月　二日　島津氏久預ケ状
一五二　山田聖栄自記
一五三　島津喜入忠誉日記
一五四　島津喜入忠誉日記
一五五　上井覚兼日記
一五六　上井覚兼日記
一五七　上井覚兼日記
一五八　上井覚兼日記
一五九　上井覚兼日記
一六〇　三月廿七日　新納忠元書状
一六一　桂忠詮・上井里兼連署書状
一六二　五月　朔日　島津惟新義弘書状抄
一六三　三月廿六日　島津義久書状抄
一六四　［慶長十二年］閏四月廿九日　新納為舟忠元書状
一六五　慶長十三年　二月　春山馬狩座配書上

一六六　慶長十九年御留守中日記

一六七　[元和　五年　四月廿三日]　島津惟新義弘書状抄

一六八　[寛永十二年　七月廿七日]　伊勢貞昌・島津久元連署状抄

一六九　九尾野牧書上

一七〇　盛香集

一七一　寛永廿年加久藤嘜所案文并萬留帳

1 [寛永　廿年]　二月十四日　伊地知重延・白坂篤豊連署書状

2 [寛永　廿年]　二月廿七日　伊地知重延・白坂篤豊連署廻状

3 [寛永　廿年]　二月廿九日　伊地知重延・白坂篤豊連署書状

4 [寛永　廿年]　二月廿九日　伊地知重延・白坂篤豊連署書状

5 [寛永　廿年]　三月　七日　島津久元・山田有栄連署達書

6 [寛永　廿年]　三月十四日　伊地知重延・白坂篤豊連署廻状

7 [寛永　廿年]　三月十二日　弟子丸宗盈・伊地知重政連署達書

8 [寛永　廿年]　三月廿五日　白坂篤豊書状

9 [寛永　廿年]　三月　廿日　土持綱辰覚

10 [寛永　廿年]　五月　二日　白坂篤豊外二名連署受取留

11　馬引ノ名之覚

一七二　寛永廿一年加久藤案文留

1 [寛永廿一年]　正月十八日　伊地知重延外二名連署廻状

2 [寛永廿一年]　正月十九日　伊地知重延外二名連署廻状

3 [寛永廿一年]　三月廿九日　北郷久加外三名連署達書

4 [寛永廿一年]　四月　二日　西田時通外二名連署書状抄

5 [寛永廿一年]　四月　二日　西田時通外二名連署廻状

6 [寛永廿一年]　四月　四日　西田時通外二名連署書状

7 [寛永廿一年]　四月　四日　和田三左衛門・黒木弥右衛門連署書状

8 [寛永廿一年]　四月　四日　敷根久頼達書

9 [寛永廿一年]　四月　六日　西田時通外二名連署書状

10 [寛永廿一年]　四月　六日　敷根久頼達書

11 [寛永廿一年]　四月　九日　西田時通外二名連署書状

一七三　正保二年加久藤案文留

1 [正保　二年]　三月十四日　某四人連署書状

2 [正保　二年]　三月廿四日　川野通昌・白坂篤豊連署書状

3　正保　二年　三月廿四日　川野通昌外二名連署書付留

4　馬追日記

5 [正保　二年]　四月　五日　島津久通外二名連署達書

6 [正保　二年]　四月十一日　伊地知重延外三名連署廻状

7 [正保　二年]　四月十一日　新納忠有達書

8 [正保　二年]　四月十三日　伊地知重延外三名連署廻状

9　某書付

10 [正保　二年]　十月　四日　財部盛秀・大山廣綱連署廻状

11 [正保　二年]十一月　二日　加久藤・馬関田・吉田・吉松嘜連署廻状

一七四　正保三年加久藤案文留

1 [正保　三年]　正月　七日　加久藤・馬関田・吉田・吉松曖連署廻状
2 [正保　三年]　正月十一日　加久藤曖所達書
3 [正保　三年]　四月　二日　伊地知重延書状
4 [正保　三年]　四月　八日　伊地知重延外三名連署廻状
5 [正保　三年]　四月　七日　北郷久加外二名連署達書
6 [正保　三年]　四月廿一日　伊地知重延外三名連署書
7 (正保　三年)　四月廿一日　伊地知重延外三名連署指出
8 (正保　三年)　四月廿一日　伊地知重延外三名連署差出
9 正保　三年　三月廿六日　西田時通外二名連署書付

一七五　承応三年甲午日記

一七六
1 [元禄　三年]　五月十六日　岩山直道証文
2 [元禄　三年]　五月十六日　須田綱清證文

一七七　岩山直道老号散木日記

一七八　[明和　四年]　正月　廿日　福昌寺副司月潭・丹嶺連署口上覚

一七九　[延享　四年十二月]　某調書

一八〇の1　本田玄賀覚書
2　伊地知季安覚書

一八一　天文　八年　正月十一日　島津日新忠良吉書

「御旧式類抄　追補」

一八二　五月　二日　島津貴久書状

一八三　[天正十九年]後正月　廿日　島津義弘書状抄

一八四　[慶長十二年]　三月廿六日　島津龍伯久義書状

一八五の1　[三月廿六日]　島津義久書状抄
2　伊地知季安覚書

一八六　[慶長十二年]閏四月廿九日　新納為舟忠元書状抄

一八七　川上久国上使附日記

一八八　[正保　二年]　二月　六日　伊地知重延外三名連署書状

寺社巡詣録

一　延応　二年　八月廿二日　比丘尼菩薩坊・生阿弥陀仏連署田畠去状

二　天正　月十九日　智賀尾六所権現社鬼面裏書

三　建仁　四年　二月　十日　紀正家寄進状

四　正中　三年　四月廿二日　権執印妙慶譲状抄

諸旧記文書

「諸旧記文書　一」

一　諸家旧記

二　山口直行流系図

三　月　日　山口五郎兵衛口上覚

四　藤原姓相良氏支族之覚

五　榊原五郎右衛門系図

六の1　近衛龍山前久詠草

2　近衛龍山前久詠草

七の1　大永　八年　八月十九日　内藤光広書下

八	2	某覚書	二八
九		近衛前久書状抄	二九
一〇		肥後山城系図	三〇の1
一一		某覚書	2
一二		渋谷氏略系図	3
一三		諸家旧記	4
一四		有川氏略系図並某覚書	三一
一五の1		諸家旧記	三二
		島津源兵衛願書	三三
	2	三右衛門外二名連署口上書	三四
一六		越前島津氏由来書	三五
一七		徳川秀忠筆色紙	三六
一八		近衛龍山前久詠草	三七
一九		徳川家康書状	三八
二〇		せうるり御前短尺	三九
二一		越前島津家末流書付並覚書	四〇
		島津家久・喜入紹嘉久和歌	四一
二二			四二
二三		島津忠隆画像讃	四三
二四		懸物写	四四
二五		永田氏・白石氏・藤崎氏由緒書付	四五
二六		護摩所愛染明王並不動明王来由	四六
二七		島津義久掟書二十ヶ条	四七

慶長	四年)十一月廿七日	某狂歌	
元禄十二年	五月十六日	島津久通書状抄	
明和	七年 十月	長徳軒島津忠貞影讃	
		島津忠貞寄進状	
		遠山綱景禁制	
		島津又右衛門調書	
		谷山薬師寺正八幡由緒書	
		肝付経兼届書	
		田中国明外二名連署調書抄	
		比志島氏由緒書抄	
		源姓比志島氏庶流略系図	
		伊作氏略系図	
		足利尊氏起請文	
		諸家旧記	
		川上久国書状	
		川上久国書状	
		川上久国達書	
		実見証文	
		土井利勝外三名連署奉書	
		伊勢貞昌・島津久元連署覚書	
		戸田忠昌書状	
		土井利勝請取状	
		久永源兵衛外五名連署請取状	

[万治	四年]	正月	二日
天文十二年		九月	六日
天文	九年	四月十四日	
		三月十五日	
(宝永	七年)閏八月	八日	
宝永	五年	三月十七日	
(貞和	二年)閏九月十四日		
(寛永十五年)		正月	九日
(寛永十五年)		正月十八日	
(寛永十五年)		正月十八日	
(寛永十五年)		三月	朔日
寛永十三年(十三)		三月十四日	
[寛永	三年	三月]	
		十月	朔日
[寛永	六年]	三月十九日	
(寛永	六年)	三月廿六日	

四八　［延宝　四年］十月　八日　稲葉正則外二名幕府老中連署状
四九　［寛永十五年］三月十一日　土井利勝外二名連署書状
五〇　（寛永十四年）十月廿九日　徳川家光御内書
五一　［寛永十四年］八月　三日　土井利勝書状
五二　（寛永十四年）十一月　朔日　酒井忠勝書状
五三　［寛永　六年］閏二月　二日　土井利勝書状
五四　（寛永十六年）八月十七日　土井利勝書状
五五　六月　二日　安藤重信書状
五六　［寛文　二年］六月十八日　本多忠相外三名連署書状
五七　［慶長十七年］八月　八日　本多正信書状
五八　［慶長十九年］十二月廿一日　山口直友・本多正純連署書状
五九　［慶長二十年］六月　二日　本多正信書状
六〇　十一月　四日　久世廣之書状
六一　（寛永　七年）九月十三日　土井利勝外三名連署書状
六二　天和　三年　四月　四日　北郷忠昭覚書
六三　［貞享　四年］七月　六日　島津光久願書
六四　［貞享　四年］七月廿六日　戸田忠昌書状
六五　［貞享　四年］七月廿六日　老中書状副状
六六　［元和　六年］十月十一日　酒井忠世書状
六七　元和　四年　閏二月廿五日　徳川秀忠御内書
六八　［寛永十三年］五月廿九日　土井利勝外三名連署書状
六九　［延宝　四年］九月廿二日　稲葉正則書状
七〇　［宝暦　三年］十二月廿五日　堀田正亮外四名幕府老中連署状
七一　島津家久和歌
七二　島津貴久発句
七三　大覚寺義昭辞世之歌
七四　鎌田政真和歌
七五　寛永十六年　十月廿三日　島津久慶外五名連署条書
七六　島津久慶外四名連署申渡書
七七　慶長　六年　二月　八日　島津忠長証状
七八　（寛永　十年）六月十八日　伊勢貞昌書状
七九　［寛永　十年］六月十八日　島津久元・伊勢貞昌連署書状
八〇　八月十五日　飛鳥井雅敦蹴鞠免許状
八一　天正十九年　島津歳久譜
八二　新納久顕流系図
八三　永正十六年　九月　九日　中野歳信答申書
八四　伊地知周防守語書
八五　島津龍伯義久・家久和歌
八六　元禄　九年　三月　下旬　祢寝家譜林信篤題辞
八七　建仁　三年　七月　三日　関東下文
八八　（建仁　三年）七月廿七日　北条時政書状
八九　（文禄　四年　九月　三日）　伊集院幸侃忠棟・本田三清親貞連署知行目録
九〇　（慶長十一年）四月　二日　島津惟新義弘書状
九一　［寛永　九年］六月　五日　島津家久書状
九二　［寛永　九年］十月　十日　島津家久書状
九三　（寛永十一年）七月　廿日　伊勢貞昌書状
九四　［慶長　五年］八月　廿日　島津惟新義弘書状

九五　十一月十六日　近衛様江御家御由緒之趣
九六　清水台明寺鐘之銘
九七　島津日新忠良書状
九八　（寛永　四年）八月　六日　伊勢貞昌書状
九九　十月十八日　某書状
一〇〇　十月十八日　金蔵院隠居覚書
一〇一　寛文　七年　七月廿六日　島津光久覚書
一〇二　（寛文　七年）七月廿九日　島津光久覚書
一〇三　寛文　三年　正月　吉日　島津久通外十名連署起請文前書
一〇四　元禄　二年　四月　十日　乾崖梵竺請状
一〇五　元禄　二年　三月　六日　島津久竹外二名連署佛餉料寄進状
一〇六　九月廿五日　島津龍伯久義書状
一〇七　慶長十九年　七月廿五日　町田久幸外三名連署知行目録
一〇八　（正保　二年）六月十六日　頼撰覚書
一〇九　七月十二日　喜入吉兵衛外七名連署書状抄
一一〇　六月廿九日　島津忠昌書状
一一一　十月　五日　島津忠昌書状
一一二　七月廿六日　島津忠昌書状
一一三　天文十九年　四月　吉日　島津貴久宛行状
一一四　川上久惟譜
一一五　鹿児島稲荷由緒書
一一六　慶安　二年　四月　五日　新納久正了久書状抄
一一七　元和　六年　五月十三日　某覚書
一一八　寛永十七年　正月廿四日　島津光久覚書
一一九　［寛永　九年］八月廿二日　島津久元・伊勢貞昌連署書状抄
一二〇　［慶長　五年］（八月十九日）　島津惟新義弘書状抄
一二一　［元和　二年］三月廿一日　島津家久書状
一二二　「慶長十一年」五月　朔日　島津惟新義弘書状
一二三　「慶長十一年」二月十九日（十一）　島津惟新義弘書状案
一二四　（元和　三年）九月　八日　島津惟新義弘書状
一二五　（延宝　七年）六月　十日　後水尾院女房奉書
一二六　正徳　四年　九月　九日　後水尾院女房奉書
一二七　［慶長十七年］十二月廿六日　島津久達書状
一二八　本多正信書状
一二九　寛永　八年　九月廿五日　島津家久外十五名和歌
一三〇　（元禄十三年）八月　六日　西山徳川光圀伝言之扣
一三一　（寛政　十年）四月　五日　記録所伺書
一三二の1（宝暦　二年）十一月　日　泰翁寺長磋島津勝久蹤跡書出
2　寛政　八年　二月　日　曽木権之助覚書
一三三の1　御伝記略
2（寛政　十年）八月　某覚書
3（寛政十一年）正月十七日　鎌田源八届書
4　某覚書
一三四の1　陽和院和歌
2　元禄　九年　大寒日　広照院恵円尼覚書
一三五　年山記聞書抜

一三六　新井白石紳書
一三七　度景の始
一三八　守護地頭の事
※一三九　（慶長　五年）八月　廿日　島津惟新義弘書状
一四〇　（元和　五年）六月廿四日　島津惟新義弘書状
※一四一　「慶長十一年」五月　朔日　島津惟新義弘書状
※一四二　（慶長十一年）二月十一日　島津惟新義弘書状案
一四三　「慶長　四年」八月　十日　島津龍伯義久書状
一四四　本田貞親書状
一四五　建治　二年　二月　五日　島津久時書状
一四六　「慶長　四年」六月十八日　伊集院忠真書状
一四七　（慶長　四年）七月十三日　島津惟新義弘書状
一四八　「慶長　四年」八月十八日（六）　島津惟新義弘書状案
一四九　「慶長　四年」八月　六日　島津義弘書状
一五〇　十月廿六日　島津惟新義弘書状案
一五一　「慶長十四年」[五]十一月　六日　伊集院忠真書状
※一五二　（慶長　四年）十一月廿七日　徳川家康書状
一五三　「寛永十八年」八月廿七日　川上久国口上覚
一五四　「天正十五年」五月　七日　島津義珎義弘書状
一五五　（慶長　四年）四月　朔日　徳川家康等豊臣氏五大老連署書状
一五六　種子島氏略譜
一五七　天正　八年　十月　五日　島津義久証状
一五八　十一月廿一日　島津義弘書状
一五九　十一月廿四日　島津忠恒家久書状
一六〇　正月十九日　島津忠恒家久書状
一六一　寛永　五年　四月　八日　島津久元・伊勢貞昌連署書状
一六二　「天正十五年」五月十六日　島津義久書状
一六三　「慶長十七年」三月廿二日　町田久幸外三名連署覚書抄
※一六四　（慶長　五年　八月十九日）　島津惟新義弘書状抄
※一六五　「寛永　九年」八月廿二日　島津久元・伊勢貞昌連署書状抄
※一六六　（元和　八年）七月十二日）　島津家久書状
※一六七　寛永十三年　三月十四日　土井利勝外三名連署奉書
※一六八　寛永十三年　三月　伊勢貞昌・島津久元連署覚書
一六九　（寛永十三年）六月十五日　伊勢貞昌・川上久国連署書状
※一七〇　慶安　二年　四月　五日　新納久正了久書状抄
一七一　寛文　二年　六月廿六日　川上芳庵慶久伝授状
一七二　「寛永十九年」八月十八日　島津久通外二名連署書状
一七三　「寛永十九年」十月十七日　島津久通外二名連署書状抄
一七四　「寛永十九年」七月（十九）九日　島津久通外二名連署書状抄
一七五　八月　四日　島津継豊書状
一七六　九月　八日　近衛家久書状
※一七七　「延宝　四年」十月　八日　稲葉正則外二名幕府老中連署状

一七八　[寛永十五年]　三月十一日　土井利勝外二名連署書状
一七九　[寛永十三年]　十月廿九日　土井利勝外三名連署書状
一八〇　[寛永十三年]　十月　八日　徳川家光御内書
一八一　[寛永十三年]十一月　朔日　酒井忠勝書状
※一八二　[寛永　六年]閏二月　二日　土井利勝書状
※一八三　八月十七日　土井利勝書状
一八四　六月　二日　安藤重信書状
一八五　[寛文　二年]　六月十八日　本多忠相外三名連署書状
一八六　十月　朔日　戸田忠昌書状
※一八七　[寛永　六年]　三月十九日　土井利勝請取状
※一八八　三月廿六日　久永源兵衛外五名連署請取状
一八九　[寛保　四年]　正月廿五日　近衛内前書状
一九〇　[寛保　四年]　二月十八日　近衛内前書状
一九一　島津久慶文書写
1[寛永　十年]十二月　七日　島津家久書状
2[寛永　十年]十二月　六日　島津家久書状
3[寛永　十年]十二月　六日　島津家久書状
一九二　天正十七年　五月廿四日　平田舜廬外二十名連署起請文
一九三　慶長十七年　六月十六日　島津忠仍久・同菊袈裟久敏連署起請文前書
一九四　某起請文前書
一九五　慶長　七年　八月　十日　島津惟新義弘起請文前書
一九六　(元和　八年)　七月十二日　島津家久書状
一九七　(寛永十五年)　正月　九日　川上久国書状
※一九八　(寛永十五年)　正月　九日　川上久国書状
※一九九　(寛永十五年)　正月十八日　川上久国達書
※二〇〇　(寛永十五年)　正月十八日　川上久国達書
二〇一　(寛永十五年)　正月十七日　島津光久書状
二〇二　(寛永十五年)　三月　朔日　実見証文
二〇三　寛永十五年　三月　二日　村尾重候実見証文
二〇四　(寛永十五年)　二月廿八日　柏木主馬首証文
二〇五　寛永十五年　正月　五日　鹿児島賦所手形
二〇六　(寛永十五年)　正月十七日　島原立人数差出
二〇七　(寛永十五年　正月十六日)　有馬陣立差出抄
二〇八　寛永十五年　六月　朔日　伊地知重政書状
二〇九　寛永十四年　十一月十七日　阿多旧簿
二一〇　(正保　四年)　八月　七日　島津久慶・川上久国連署覚
二一一　寛永十五年　(正)五月　五日　鹿児島賦所手形
二一二　寛永十五年　正月　五日　鹿児島賦所手形
二一三の1　新納仲左衛門忠雄日記書抜
2　文化　四年　八月　某覚書
二一四　文保　二年　三月十五日　関東下知状并島津道義譲状
二一五　建武　三年　二月　九日　島津貞久下文
二一六　観応　二年　二月十三日　足利尊氏下文
※二一七　文保　二年　関東下知状
二一八　応安　六年　五月十四日　今川了俊軍勢催促状
二一九　応安　六年　十一月　五日　今川了俊預ヶ状
二二〇　永和　元年　八月十一日　今川了俊書下

二二一　観応　三年　四月廿五日　一色範氏宛行状
二二二　文和　三年　二月十六日　一色範氏挙状
二二三　康安　元年　十月十六日　斯波氏経軍勢催促状
二二四　康安（康応元年）　七月　廿日　斯波氏経書状
二二五　康安　六年　二月　七日　今川了俊感状
二二六　康安　六年　三月十一日　今川了俊感状
二二七　貞治　三年　七月廿五日　北郷道明譲状
二二八　明徳　五年　四月　七日　島津元久宛行状
二二九　応安　五年　十二月廿五日（十五）　今川了俊軍勢催促状
二三〇　明徳　五年　八月十六日　島津元久宛行状
二三一　応永　四年　五月十三日　渋川満頼感状
二三二　応永　七年　二月廿四日　島津元久宛行状
二三三　応永　七年　三月　二日（三）　島津元久宛行状
二三四　応永　七年　八月　二日　島津元久宛行状
二三五　応永　七年　七月　廿日　今川了俊官途吹挙状
二三六　永和　二年　六月　九日　今川了俊書下
二三七　天授　三年　六月廿九日　征西将軍宮令旨
二三八　応永廿一年　四月　二日　島津久豊書下
二三九　応永十八年　八月　島津玄喜久豊契状
二四〇　応永十七年　二月十五日　島津元久宛行状
二四一　応永十八年　十月　九日　樺山道春音久譲状
二四二　応永十八年　閏十月廿五日　島津久豊安堵状
二四三　応永十八年　閏十月廿五日　島津久豊安堵状
二四四　応永十九年　三月　廿日　島津久豊宛行状
二四五　応永十九年　十一月廿五日　島津久豊書下
二四六　応永　廿年　四月廿九日　島津久豊安堵状
二四七　応永　廿年　九月廿五日　島津久豊宛行状
二四八　川上久国上使附日記
二四九の1　惟宗政公撰加藤清風墓誌銘
2　文政　十年　三月　伊地知季安覚書
二五〇　九曜紋幕
二五一　天文廿三年　二月　二日　島津日新忠良寄進状
二五二の1（延享　二年）　八月　四日　日新寺鉄英口上覚
2［延享　二年］　八月　四日　加世田郡見廻伊加倉與兵衛外三名連署副書
二五三　延享　四年　三月十八日　寺社奉行所覚留
二五四　［延享　四年］　三月廿三日　日新寺鑑司川辺玉泉寺義勇覚留
二五五　延享　四年　四月十一日　日新寺代官武左衛門達書

「諸旧記文書　二」

二五六　承応　四年　正月廿三日　島津久通外三名連署事書
二五七　（承応　四年）　三月　六日　吉田兼起書状
二五八　承応　四年　二月吉曜日　卜部兼起答状
二五九　（承応　四年）　三月十一日　吉田兼里兼起書状
二六〇　寛永十四年　三月　吉日　島津家久寄進状
二六一　寛文　四年　五月　吉日　島津久胤久竹寄進状
二六二　慶長十五年　七月　吉日　諏訪両大明神棟札
二六三　元和　三年　十一月大吉日　諏訪両大明神棟札

二六四　寛文　十年　七月　朔日　諏訪参籠所修補棟札
二六五　寛文　十年　七月　朔日　諏訪社棟札
二六六　新納久珍訴状写并調書留写
1(元禄十四年)十一月廿八日　新納久珍口上覚
2(元禄十四年)十一月廿八日　新納久珍口上覚
3(元禄十四年)十一月廿八日　新納久珍御内意伺覚
4　記録所調書
5　十月　二日　記録所覚書
二六七　月　日　記録奉行覚
二六八　酒匂安国寺申状
二六九　応永十七年　六月　進上物注文
二七〇　十一月十三日　北条泰時書状
二七一　[文暦　二年]閏六月廿九日　北条泰時書状
二七二　「永和　元年」　八月　十日　今川了俊書状
二七三　十月十五日　浦上則宗書状
二七四　暦応　五年　七月　十日　島津道鑑貞久書状
二七五　康永　三年　十二月廿二日　高師直奉書
二七六　貞和　二年　九月　日　伊作庄名主等連署注進状
二七七　[貞和　二年]閏九月十四日　足利尊氏書状
二七八　貞和　三年　九月廿八日　足利直義御教書
二七九　貞和　四年　正月十二日　足利直義御教書
二八〇　貞和　五年　十二月廿七日　足利尊氏御教書
二八一　正平　六年　八月　三日　後村上天皇綸旨
二八二　正平　六年　八月　三日　後村上天皇綸旨
二八三　正平　六年　十月廿五日　後村上天皇綸旨
二八四　正平　六年　十一月十三日　足利尊氏御教書
二八五　観応　三年　四月廿九日　足利義詮軍勢催促状
二八六　観応　三年　五月十三日　足利尊氏御教書
二八七　観応　三年　六月十八日　一色道猷氏範施行状
二八八　観応　三年　七月　廿日　畠山直顕軍勢催促状
二八九　観応　三年　七月　廿日　畠山直顕軍勢催促状
二九〇　文和　二年　七月　九日　足利義詮御教書
二九一　文和　四年　六月十八日　島津氏久注文案
二九二　八月廿五日　大覚寺尊有義内書
二九三　六月　廿日　足利義教御内書
二九四　六月　廿日　足利義教御内書
二九五　足利義教御内書
二九六　(嘉吉　元年)　四月十三日　足利義教御内書
二九七　(嘉吉　元年)　四月十三日　足利義教御内書
二九八　(嘉吉　元年)　四月十三日　足利義教御内書
二九九　(嘉吉　元年)　四月十四日　大内持世書状
三〇〇　(嘉吉　元年)　四月十五日　赤松満政書状
三〇一　(嘉吉　元年)　四月十五日　赤松満政書状
三〇二　拝領物目録
三〇三　(嘉吉　元年)　四月十六日　赤松満政書状
三〇四　(嘉吉　元年)　五月廿六日　友貞書状
三〇五　(嘉吉　元年)　六月十七日　足利義教御内書
三〇六　寛正　四年　七月　七日　本田宗親覚書
三〇七　永正十二年　六月　七日　島津忠治証状
三〇八　永正十四年　八月廿七日　島津忠隆安堵状

「諸旧記文書　三」

三〇九　元暦　二年　六月十五日　源頼朝下文
三一〇　元暦　二年　六月十五日　源頼朝下文抄
三一一　元暦　二年　八月十七日　源頼朝下文
三一二　文治　三年　九月　九日　源頼朝下文
三一三　建暦　三年　七月　十日　将軍家政所下文
三一四　承久　三年　八月廿五日　関東下知状
三一五　嘉禄　元年　七月　三日　津乃郷地頭代職補任下文
三一六　嘉禄　三年　六月十八日　島津忠久譲状
三一七　嘉禄　三年　十月　十日　将軍家安堵下文
三一八　仁治　三年　二月廿二日　将軍家政所下文
三一九　文永　二年　六月　二日　島津道仏忠時譲状
三二〇　文永　四年　十二月　三日　島津道仏忠時譲状
三二一　文永　六年　十月廿三日　関東下知状
三二二　文永　八年　九月十五日　島津道仏忠時誡状
三二三　弘安　七年　三月廿二日　平氏女譲状
三二四　文保　元年　十二月廿一日　将軍家政所下文
三二五　文保　二年　三月十五日　島津道義忠宗譲状并関東外題安堵状
三二六　山元氏日記
三二七の1　佐多久英覚書
2　佐多久英覚書
3　島津忠長書状
4　佐多久英覚書
5　寛文　元年　十一月　佐多久英覚書
三二八　寛永　九年　十二月　二日　島津久元外三名連署覚書
三二九の1　明暦　元年　十月　吉日　江平伝左衛門覚書
2　文化十五年　四月廿七日　正澄覚書
三三〇　某覚書
三三一　[文禄　元年]　[文禄　五年]　五月　六日　新納為舟忠元書状
三三二　(慶長　四年)　十月廿四日　島津惟新義弘書状
三三三　天正十九年　四月　七日　島津龍伯義久証状
三三四　天正　廿年　七月廿六日　島津義久起請文
三三五　天正　廿年　七月廿六日　細川幽斎玄旨起請文
三三六　(寛永十七年)　九月　一日　川上久国外二名連署書状
三三七の1　七月　朔日　鎌田政意覚
2　七月　朔日　鎌田政意書状
三三八　(寛永　九年)　六月十六日　細川忠利書状
三三九　六月十三日　島津久元書状
三四〇　十一月廿三日　伊勢貞昌書状
三四一　六月十三日　喜入忠政・川上久国連署書状
三四二　上井覚兼日記抜書

襲山紀行

一　襲山紀行
二　(元治　元年　七月)　伊地知季安並栗原信充漢詩
三　元治　元年　七月　栗原信充詠草

四　栗原信充詠草

襲山考

襲山考

帖佐来歴

第一　頼朝公御代正宮領にも地頭置かるる事
一　建久　八年　六月（十二）日　大隅国建久図田帳抄
二　建久　九年　三月十三日　大隅国御家人交名抄
三　東鑑
第二　正宮領依申分留守職支配に成事
四　建治　二年　八月　日　石築地役配符抄
第三　平山家下向正宮領を司り一族繁栄にて彼此の事
五　平山氏系図
六の1　平山氏庶子名字事
2　平山善宝寺供衆内名乗氏聞書
3　七月　七日　前筑前守秀秋書状
4　伊地知季安書付
七　紀姓西郷并荒田氏系図
八の1　大隅国将軍方交名注文抄
2　大隅国直冬方交名注文抄
九　正平十二年　閏七月　日　吾平藤九郎入道軍忠状
一〇　貞治　二年　九月十一日　武久書下
一一　福昌寺佛殿造営奉加状抄
一二　九月廿五日　島津久豊書状
一三　紀定清証文
一四　荒田宗貞流系図
第四　忠国公の時入御手豊州家一所と成事
一五　山田聖栄系図目安
一六　豊州家系図
一七　行脚僧雑録
一八　（明応　四年）六月廿九日　島津忠昌書状
第五　辺川筑前守地頭の事
一九　（文亀　四年　二月十六日）　島津忠昌社参随兵人数書上抄
二〇　樺山玄佐自記
二一　〔大永　六年〕十一月廿一日　限江匡久書状
第六　島津政雅地頭ノ事
第七　伊地知民部新城地頭ノ事　付本城山田城地頭の事
二二　樺山玄佐自記
二三　年代記
第八　祁答院押領ノ事
二四　鍋倉村甑大明神棟札
二五　天文十三年　月　日　西福寺大般若経箱銘文
第九　貴久公御代御手ニ入事
二六　御戦場記
二七　古今戦
二八　山元氏日記
第十　中古地頭の事
第十一　義弘公御在城の事
第十二　再ひ外城にたてらるるより代々地頭の事

二九　（天保　元年）三月　伊地知季安奥書

真幸紀行

一　（弘化　二年）十二月十六日　真幸紀行

1　弘化　二年　十一月　四日　六世皇祖嘉翁府君祭文

二　弘化　二年　十一月　四日　伊地知重政追薦法語

三　弘化　三年　二月　伊地知季安後書

鹿児島県史料編さん関係者

史料編さん顧問　東京大学史料編纂所所長　石上英一

国立歴史民俗博物館館長　宮地正人

尚古集成館前館長　芳即正

鹿児島大学名誉教授　五味克夫

委員　安藤保晋　原口泉山田尚二　三木靖宮下満郎　日隈正守堂満幸子　大賀郁夫

鹿児島県歴史資料センター黎明館

館長　今吉弘

調査史料室長　徳永和喜

学芸専門員　林匡

資料調査編集員　上村文那加野文恵　中原あけみ高原千鶴　豊岡尊子小巻武

鹿児島県史料　旧記雑録拾遺伊地知季安著作史料集五

平成16年1月10日　印刷
平成16年1月31日　発行

非売品

編集　鹿児島県歴史資料センター黎明館
発行　鹿児島県

印刷所　株式会社　きょうせい